

^{the} GOLDEBRIARS



The GoldeBriars' Story

ゴールドブライアーズ・ストーリー「ジェザベルに何があったの?」

“Whatever Happened to Jezebel?”

ゴールドブライアーズ・エピック・イヤーズ

The GoldeBriars' Epic Years



ドーティー J. ホルムバーク・ワデルー著

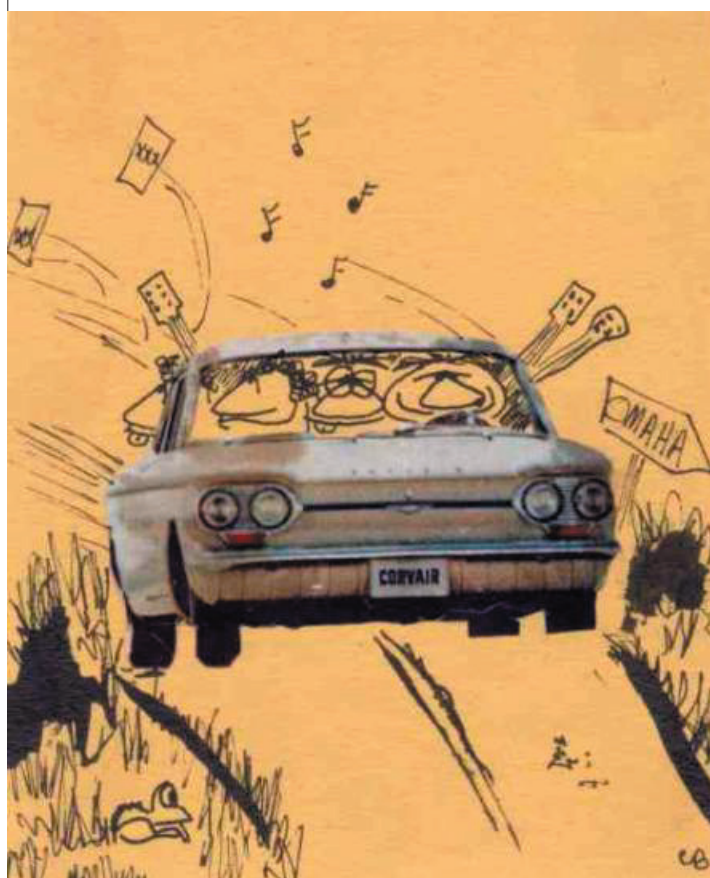
辻 睦詞一訳



The GoldeBriars' Story “Whatever Happened to Jezebel?”

The GoldeBriars' Epic Years

ジェザベルに何があったの…?



カート・ベッチャーによるマンガ・キャラクター “マンガス Mungs”

ドーティー J. ホルムバーグ-ワデルー著
辻 睦詞一訳

**成功のまぎわで
飢えて、笑って、涙して**

COPYRIGHTS/REGISTRATION

Registered with Writers Guild of America, West, Inc.
December 4, 1968 & December 9, 1969
Titled “Starving, Laughing, Crying”

Copyright August 23, 1985 Dottie J. Holmberg-Waddell
Titled: “Starving, Laughing, Crying” (Copyright Registration TX 208-533)

Copyright December 20, 2001 Dotti J. Holmberg-Waddell
Titled: “Whatever Happened to Jezebel?” The GoldeBriars’ Epic Years
Copyright Registration TX 5-649-111

Copyright May 2004 Dotti J. Holmberg-Waddell
Titled: The GoldeBriars’ Story “Whatever Happened to Jezebel”
Published 2004 Apple Core Publishing

ABC Hootenanny Show
January 1964
Knoxville Tennessee - Episode 31 Filming
Right to Use 1964 Vintage Movie Clip-
Washington D.C. Copyright Office Status Search #2004400226*

*Washington D.C. Copyright Office Status Search indicates search was conducted
from 1955 through January 12, 2004 under the names and titles listed below
and no copyright registration was found (original or renewed) for:
ABC, American Broadcasting Company, American Broadcasting, Inc.,
American Broadcasting Television Network, ABC Hootenanny Television Series,
Episode #31, 1964, Hootennanny #31, 1964

ABC Hootenanny January 1964 film clip on this CD

このヴィンテージ白黒フィルムは、1990年代初頭にドーン・イーデン Dawn Eden
(カート・ベッチャーのバイオグラファー)から贈られたものです。彼女がシェリとドーティーへ丁重に提供してくれた
ゴールドブライアーズ・ライブ映像は、ドーティーによってこの本のためにパソコン用フォーマットへと変換されました。
60年代当時のフィルムなので、映像クオリティが完璧ではない事をお詫び申し上げます。

このショーでゴールドブライアーズが演奏した“Saro Jane”はトラディショナル・ソングで、
19世紀においての「船乗りのはやし歌」として、その歴史を迎えることができます。
（「トラディショナル」とは、もしそれらが著作権登録されていたとしても、
オリジナル・バージョンが著作権有効期限を超えて存在しているものを指します。
ほとんどのトラディショナル・ソングは、最初の著作者が誰であったのか、もはや確認できなくなっています。
それらの所有権は、偽りなく公的なのです）

このフィルム・クリップを再生するには、Windows Explorerを開き、
CDドライブから“Saro Jane.mpg”を右クリックして“メディア・プレーヤーで再生する”を選択してください。
（読者の皆さんは、ゴールドブライアーズ・ストーリーの中にあるフォーテナニー・ショーの節にたどり着いた時に、
このフィルム・クリップを今すぐに観たい、あるいは後で観たい、なんて思うのでしょう。
今観て、ストーリーのその部分まで読んだら、またご覧になってはいかがでしょう）
ウィンドウズ・メディア・プレーヤーをご使用でない場合は、ご使用プレーヤーの説明を参照の上、
ムービー・クリップをお楽しみください。

グラフィック・デザイン——今東 淳雄
日本語訳——辻 睦詞
校正(日本語バージョン)——水野 直希 + 松川 陽野介
校正(英語バージョン)——ダイアン・ホルドラム Diane Holdrum

^{the} GOLDBRIARS

60年代に於ける革新的なフォーク・ポップ・ロック・グループ



ゴールドブライアーズ、1stアルバムのプロモ写真
(左から、ロン・ニールソン Ron Neilson、ドottie・ホルムバーグ Dotti Holmberg、
カート・ベッチャー Curt Boettcher、シェリ・ホルムバーグ Sheri Holmberg)

「献身」

与えるために発見しようとする私達

2022.10.27

The GoldeBriars' Story
“Whatever Happened to Jezebel?”
The GoldeBriars' Epic Years
ジェザベルに何があったの…?

目次

iii	版權—登録
v	献身
1	はしがき
1	はじめに
4	ゴールドブライアーズの歴史
6	フォーク・ミュージックについての前触れ
7	好みのフォーク・ミュージック
	章
11	I “むかしむかし”
21	II “米とバラの日々”
30	III “果敢に臨む新しい世界”
34	IV “音楽講座”
59	V “真っ直ぐ前に!”
67	VI “6人のサーカス団”
83	VII “目の前の険しい道”
93	VIII “名声か飢饉か”
105	IX “終局”
	グループのコーナー
108	写真
111	素敵なレシピ
112	手紙からの抜粋
115	ノヴェルティ・ソングその他
122	詩
126	カートのマング 独特なマングスのマング メンバー 6人の似顔絵
128	シェリのアート
	あとがき
131	音楽トリビア
132	グループ解散1年後の報告
133	概要
134	追記…1969年それぞれの状況
136	あとがき
137	2002-2004年時点でのグループメンバーと友人達について
141	ジェザベルに何があったの…?
	脚注
143	脚注1—1966年録音のドーティーの曲“Hopscotch”、ここに初公開
146	脚注2—ゴールドブライアーズの歌詞(から18曲)
165	脚注3—ドーティー・ホルムバーク“Sometimes Happy Times” について (ライナーノーツと歌詞)

はしがき

これは、“昔々”ドーティー・ジーン・ホルムバークが、ある音楽グループ“ゴールドブライアーズ”の一員として過ごした1963年2月～65年6月までの、新しさに捕らわれつつ、信じられないようなハプニングを含んだ短い旅行記、及び日記です。

また、ドーティーはこの本をより面白く、グループの軌跡をより詳しく伝えるため、姉シェリから引き継いだ切り抜き写真やイラストをここに掲載しました。

はじめに

——私のゴールドブライアーズ日記の完了後、その1年半を振り返って

私達は、過ぎ去った環境や困惑に、いつの間にか埋もれてしまった魂を見つけ出そうとしました。それはまるで大地を大胆に闊歩し真実を探求する、小さな歩兵隊のようでした。

生来の純真さで、緑の草、青空、黄色い花々を追い求め、それらを取り入れながら進みました。

それらの意義を感じ取る神秘的な心は、傷への叫び、喜び、あるいは私達が何者であるのか、何を見つけるのか、何を本当に願っているのかということについて、感情のゴール地点へと運ばれて行きました。

そして熱い石炭をかき集め——それぞれの信念またはグループ自身のため共に搜索し、ただ安定したペースで十分に私達の足元を温め続けたのです。

★—エンターテインメント業界

ショウビズ★は大きな安楽の地ではありません。例えるならば、花壇のバラといったところでしょう。すなわちバラ園では、それらが存続し増殖していくために絶えず愛され続けねばならず、バラを人に重ね合わせてみると、それらが共に順序良く育つために、人々は自他の経験を携え、絶えず各々の心を満たし続けねばならないということ、ならびに他者へのメッセージ伝達において、我々の持つ感情を把握せねばならないということをここに提示しておきます。

(そう、我々小さな人々は塔の上から、永遠にその叫びを知らせるのです!)

“たくさんの人種でその輪を鳴り響かせよう” 我々アーティストは世界を舞台とするサーカス団みたいなものだから、もし誰かがカーペット・ロールを転がし広げてくれたなら、私達はきっと自分達のストーリーを語り始めるでしょう。

過去に存在した小さなグループ“ゴールドブライアーズ”は、その世界によってあなたを成長させ、ほとんどの聴者をそのヒステリーとトラウマの中に引き入れ、やがてその終りへと導くでしょう。……でも私達の中には、まだ違う世界の続きがあるのです。

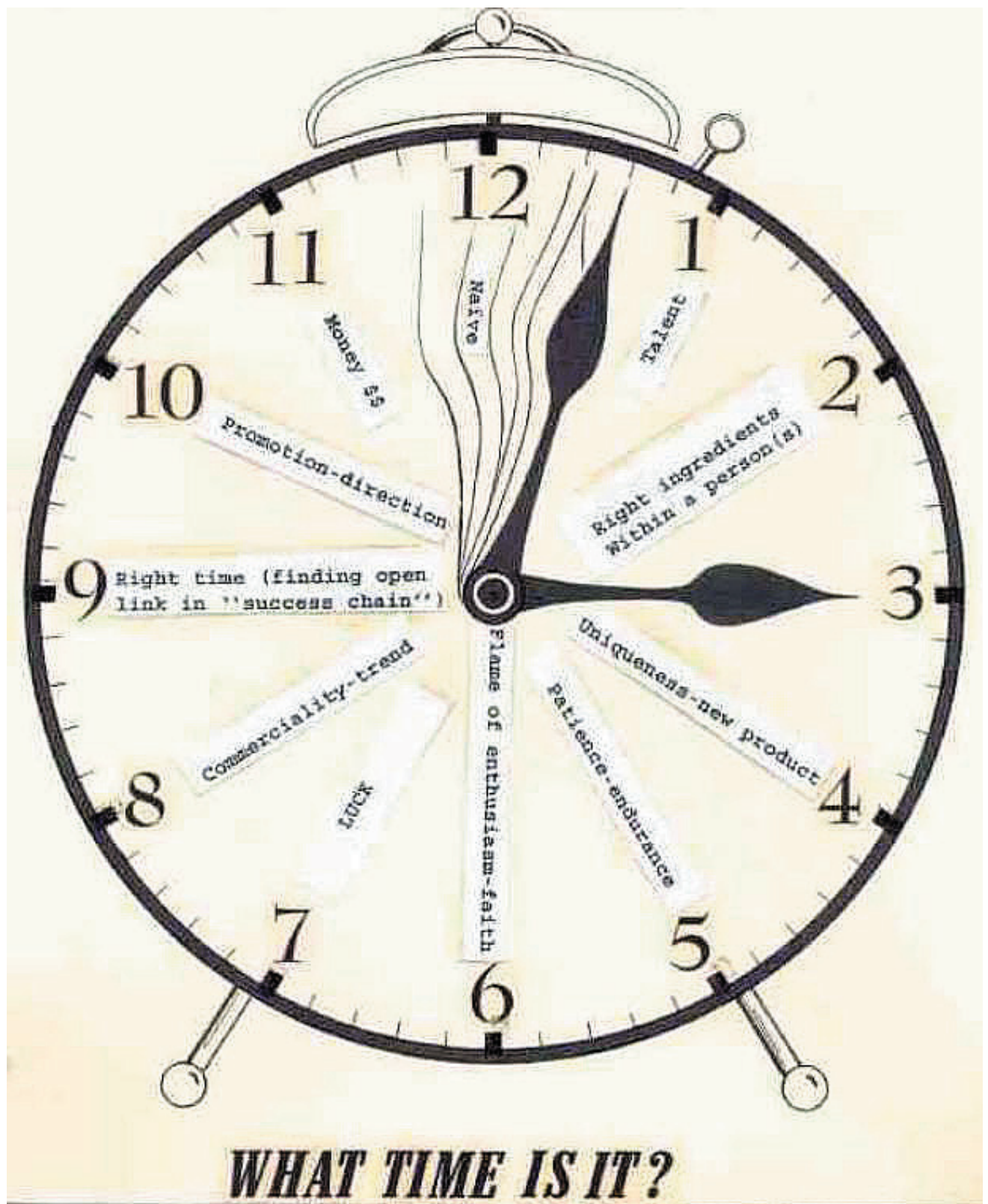
“生きる
そして
学ぶ……

それは
あなたが歩む
あなた自身の道……
誰かへと繋がっていくための”

当時の私達は、ただ紆余曲折するショウビズ・シーンの真っ只中に放り込まれた無垢な若者でした——ゆっくり用心深く歩む現在に至るために。

私の“ゴールドブライアーズ”日記は、あなたのもの。

(そして今日、真実を求めて、それぞれ自分の人生を生きているのです。……お聞き頂けるかしら?)



「これまで、またこれからも各種分野のタレントにとって、成功するための魔法の方程式なんて存在するのでしょうか。

知ってるふりさえできるかしら？
心理的な方程式を使って成功するってことに、そんなに無邪気でいられる？」

狂った時間の流れに解釈なんてあるの？

ゴールドブライアーズの歴史

結成——1963年2月

オリジナル・メンバー ——

カート・ベッチャー Curt Boettcher

…ボーカル、曲のアレンジ、リズム・ギター

ロン・ニールソン Ron Neilson

…リード・ギター、バンジョー、楽器のアレンジ

姉、シェリ・ホルムバーク Sheri Holmberg

…ボーカル、タンバリン

(グループ用に、SharonからSheriに、短くなっています)

私、ドottie・ホルムバーク Dotti Holmberg

…ボーカル

(グループ用に、DottieからDottiに、短くなっています)

1963

私の高校卒業後、全員で1963年6月にミネアポリスへ引っ越す。父の元で働くロン以外、皆は事務職に就き、就業後と週末は出来るだけ練習。

63年11月、コロムビア・レコードと契約、傘下エピック・レーベルから出す1stアルバム録音のためニューヨークへ。

1964

64年2月、“The GoldeBriars”と題された(オリジナル・メンバー 4人での)1stアルバム発売。

Columbia-Epic Album release numbers: LN24087 (Monaural) & BN26087 (Stereo)

64年8月、2ndアルバム“Straight Ahead! The GoldeBriars”(オリジナル・メンバー 4人で)発売。

Columbia-Epic Album release numbers: LN24114 (Monaural) & BN26114 (Stereo)

64年8月、ロン・ニールソンが、人生における野心への懷疑により脱退。ロンに代わり、彼の友人マレー・プランタ Murray Planta がミネソタ州ミネアポリスから。この時点でグループはサウンドを増幅することを決め、共にツイン・シティーズ(ミネアポリスとセント・ポール)から、トム・ドーホルト Tom Dorholt をベーシストとして、またロン・エドガー Ron Edgar をドラマーとして迎える。

シェリが極度の疲労と精神衰弱のため、3ヶ月半(ブライアーズの2nd、3rdアルバムのレコーディングの合間)グループを離れる。彼女に代わり、シャリス The Chalices でカートとデュエットしていたウィスコンシン出身のキャシ・ウィーヴァー Cathi Weaver が加入。キャシは、私達のジプシーのようなロード生活★に理解を示さず、婚約を期に脱退。元気になったシェリが再びグループに復帰。

★—演奏旅行

64年11月、ニューヨークのコロンビア・レコードにて、6人のメンバーで3rdアルバムが録音される。アルバムからのシングル“June Bride Baby”、B面“I’m Gonna Marry You”がリリースされる。Epic Record Number: 5-9806 アルバムがリリースされる前にグループが解散。コロンビア・レコードは、編成を変えたゴールドブライアーズでアルバムをリリースすることを私達に提案するが、グループはその申し出を拒否。(今になって惜まれるのは、全3枚のアルバムの中では、ずば抜けて革新的な作品だった3rdアルバム全編のコピーを持ってないということ)

1965 ロン・エドガー Ron Edgar —— ドラマー(1965年5月、ブライアーズを脱退して“ミュージック・マシン The Music Machine”に参加)。ビル・テイラー Bill Taylor が彼に代わって加入。

ゴールドブライアーズ解散——1965年6月

ゴールドブライアーズのレコーディング歴

アルバム

“GoldeBriars” Epic BN 26087 1964 (Monaural & Stereo versions)

“Straight Ahead” Epic BN 26114 1964 (Monaural & Stereo versions)

45’s

“Pretty Girls and Rolling Stones”/“Shenandoah” Epic 9673 1964

“Castle on the Corner”/“I’m Got to Love Somebody” Epic 9719 1964

“Sea of Tears”/“I’ve Got to Love Somebody”

*Columbia DB 7384 1964 *Released Only in the United Kingdom

“I’m Gonna Marry You”/“June Bride Baby” Epic 9806 1965

フォーク時代についての前触れ (1969年末記述)

この物語の“核”となるフィーリングを皆さんに理解して頂くために、フォーク・ムーブメントの始まりまで振り返ってみましょう……気楽なミュージシャン、シンガー、パフォーマーが、フォーク共通の表現スタイルで新鮮なメッセージを発表した、熟練の技がそこには在りました……リスナー達はアーティストの“フォーク物語”にある、彼らのアイデンティティを捕らえるのです……

★—1965年8月11日、ロサンゼルスサウスセントラル、ワッツ地区にて、酔っ払い運転で黒人男性が逮捕されたのをきっかけに起きた暴動。6日間に及び、死者34名、負傷者1000人以上、逮捕者4000人以上、100以上の建物が破壊された。

あれから日々は長期に渡り懸命に生き長らえ、遠く年月が経ちました。ロスのフラワー・チルドレンの中に生きて、ドラッグとセックスの革命や、ワッツ暴動★への市民の不安を見ながら。(私は当時、恐ろしく燃え上がるたくさんの炎を、カリフォルニアのハリウッドにあった自分のアパートの屋上から眺めていました)

世界は、以前よりも狭い袋の中にあるようで……言ってみれば、たぶん当時はもっと自由な気風があり、「爆発性の感情」みたいなものを感じることが出来て……

私達は今日、どこに心を開放すればいいのでしょうか？ ……「何しよう?」ってことが、こんなにたくさんあるんだもの……

だからこそ、このフォーク時代が意味する事をシンプルに把握したいのです。何が私達共通のフォーク・フィーリングであったのかを……

そしてそれをもっとハッキリと指摘するために、リラックスして、それを振り返る……フォーク時代を。

(楽しんでいただけるかしら?)

“好みのフォーク・ミュージック” (覚えてる?)



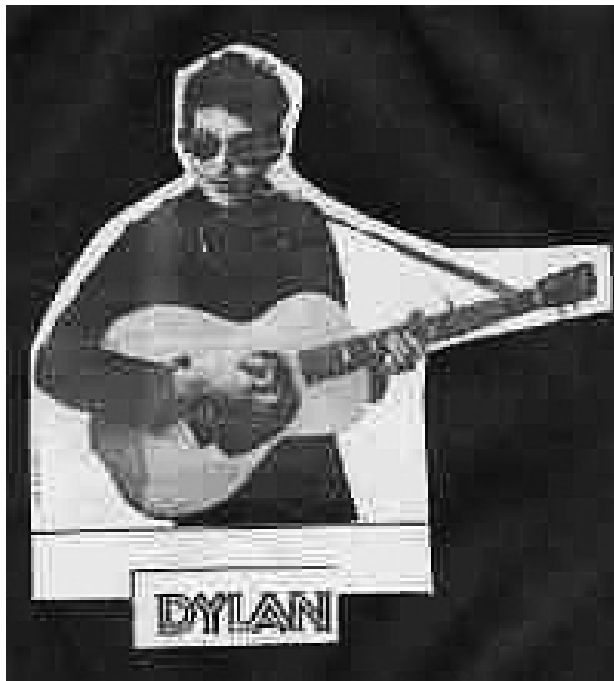
1. キングストン・トリオ THE KINGSTON TRIO

“Hang Down Your Head Tom Dooley”と“The MTA”をひっさげ、フォーク・ムーブメントの大きな主役となる……現在にも根強く影響を残す。



2. ピーター・ポール&マリー PETER, PAUL, & MARY

奥深い感情を描写した彼らのシンプルな音は、フォーク・ギター(アコースティック・サウンド)人気絶頂期に、その綺麗なサウンドで大人から子供までを惹きつけた。



3. ボブ・ディラン BOB DYLAN

嵐の様に国中を席卷した、泥臭い風貌の田舎育ちの少年。
理性で具現化し韻を踏んだ歌のメッセージ——詞の長さ
如何に拘らず——彼は多くを語った。



4. ジョーン・バエズ JOAN BAEZ

大勢のハートを魅了した、とても円熟した歌姫——そして彼女の高いモラルは、たくさんの人の心をつかんだ。



5. ライムライタース LIMELITES

家族的なムードを持つグループの“素晴らしいサウンド”——そしてグレン・ヤーボロウ Glenn Yarbrough の歌声は現在に至っても際立っている。



6. ジーニー・リッチ JEANIE RITCHE

ダルシマー(小さなハンマーで叩く、台形ボディにワイヤー弦のある楽器)を弾き、民族音楽的なスタイルで歌を山の空気の中に鳴り響かせる……フォーク時代の響き。

(写真はそれぞれ、ニューヨーク・ビルボード社の出版物から引用)

CD-Rom eBook

The GoldeBriars' Story
“Whatever Happened to Jezebel?”
The GoldeBriars' Epic Years
ジェザベルに何があったの…?

CHAPTER

I

“ONCE UPON A TIME”

むかしむかし

第一章 “むかしむかし”

始まりは、たった4人のメンバーと1つのマスコット——説明させていただきます。

昔々 1963年1月のある暗い夜、ミネソタの小さなコーヒーショップ“ル・ズー”で、2人の田舎娘ドーティー Dottie (通称 Dotti)とシャロン Sharon (通称シェリ Sheri)・ホルムバーグ姉妹は、海軍将兵の息子であるカート・ベッチャーに出会いました。カートはそこで独演していたのです。



独演するカート

シェリと私は兄ゲイリーに帰宅を促すため、ル・ズーへ立ち寄ったのでした。当時シェリはセント・ポール、私はミネソタのヒューゴに住んでいました。それは、シェリとゲイリーと私がロン・ネルソンと共に、フォーク・グループ“キー・ノーツ The Key Notes”というバンドで、小さな地方テレビ局のオーディションを受けた日のことでした。(キー・ノーツは、まだ結成して数ヶ月でしたが、いくつかの地方テレビ局のコンテストに受かり、すでに知名度がありました。セント・ポール講堂のコンテストでは1位になって、当時としては大金の50ドルを獲得しました)



The Key Notes (左から、ゲイリー、シェリ、ドーティー、ロン)

ゲイリーを見て、彼がしばらくの間、カートに魅了されていたのを知り、私達もそこに座って、この“小柄な仲間”が歌うのを聴きました。

その夜は(ほんの数人の観客で)閑散としていましたが、カートは決然たる様子でメロディを歌っています。シェリと私は、カートの持つ声の力に、かなり驚かされました。私達は、彼に合わせてハーモニーを奏で始めます。

何が起こったか把握しないうちに、コーヒーショップ経営者の一人ポール・ヒュイットが、ステージでカートと一緒に歌うよう私達に促しました。冗談だと思ってそこに笑って座っていましたが、なんと彼は、真面目に私達のコートを脱がせてステージのカートの横に立たせてしまったのです。

混乱した中で、私達はお互い紹介し合い、この“若者”がミネソタ大学の一年生だと知りました。

シェリと私は、子供の頃から続けてきた(病院や療養所で演奏をする)慈善活動の傍らで、キー・ノーツとして歌ったり、ナイトクラブでデュエットして“Mississippi Mud”、“Feudin’, Fussin’ & A’Fightin’”、“Third Man Theme”といったオールド・フェイバリットを歌ったりしていました。ナイトクラブでは暫くの間、ジャズ・ハーモニーでのアカペラを歌い、自分達のことを“ホルムバーグ・ハイライト・シスターズ・フロム・ヒューゴ・ミネソタ”と名乗っていました。

ステージ上の私達は、いつも歌っているようにハーモニーを重ねながら、皆で数曲を歌いました。私達は全員、その荒削りなブレンドにとっても興奮し、歌い終わると全員が“その楽しみのため”に、いつか自分達が一つになることを予感していました。……そうして次の日曜日にシェリと私は、デルタ・トウ・フラタニティー会館で奉仕活動していたカートに会いに行ったのです。

'Key Notes'

Sing For Fun

"Folk singing is taking the place of rock and roll, and we're helping it," a folk singing enthusiast explained Friday evening. The folk singer was Sharon Holmberg who sings with the "Key Notes", a folk singing quartet which made its second Centennial appearance at a High School dance Friday.

The "Key Notes" are local young people. Sharon, her sister, Dotty, and her brother, Gary hail from Hugo where their parents, Mr. and Mrs. Robert L. Holmberg, live. Mr. Holmberg owns a radio shop in White Bear Lake. The fourth member of the quartet is Ron Nelson, a friend who lives in Minneapolis. Dotty is a senior at Centennial High. Sharon works for an insurance company, Gary is putting himself through the U., and Ron is a junior at West High.

Though the group has been singing together only since August their singing experience goes back farther than that. Dotty and Sharon have been singing old favorites for church groups and children's hospitals for several years. The group has already chalked up



RON NELSON AND DOTTY, SHARON, AND GARY HOLMBERG

some solid successes. It has entered three talent shows and placed first in all three. It has sung at the St. Paul Auditorium, Prom Center, LeZoo Coffee Shop in Minneapolis, the Walter Zudd convention in Minneapolis, at the West Junior High School one hundredth anniversary celebration, and at the State Fair.

Last week the "Key Notes" sang several folk songs over Radio Station KUOM, and they will be appearing on the Bill Carlson Show on WCCO TV this Saturday.

All performers have to adjust to the unexpected, and the "Key Notes" are no exception. There

was the time Ron forgot his banjo—they were in a contest, but they still won first place. "That's how important my banjo is," quips Ron.

"Folks songs are for listening—not to dance to," says Dotty. Many of them tell stories, and they have a lot of depth and feeling." The "Key Notes" work out their own arrangements. They hope to stay together for at least two years, since it takes that long to become a successful group. That they enjoy singing together was quite apparent to the Centennial students who heard them Friday night.

歌う楽しみ

「フォークはロックンロールの地位に取って代わり、私達はその手助けをするわ」——熱狂的なフォーク歌手は金曜の夕べにこう語る。そのフォーク・シンガーとは、二度目のセンテニアル高校ダンス・パーティーにて、四人組フォーク・グループ「キー・ノーツ」で歌うシャロン・ホルムバーグ。

「キー・ノーツ」は地方の若者グループ。彼らの両親ロバート・L・ホルムバーグ夫妻の住むヒューゴからやってきたシャロン、妹のドーティー、兄のゲイリー・ホール。ホルムバーグ氏はホワイト・ベア・レイクでラジオ屋を経営。このカルテット4人目のメンバーはロン・ニールソンで、ミネアポリスに住む友人だ。ドーティーはセンテニアル高校4年生、シャロンは保険会社に勤務、ゲイリーは大学に在籍中。

グループで歌い始めたのは、つい去年の8月からで、彼らの歌唱歴となるとそれよりずっと長い。ドーティーとシャロンはここ数年、好みの古い歌を教会団体や小児科病院のために歌ってきた。既にグループは、堅実に幾つかの

成功を得ている。3つのタレント・ショーに参加し、全て1位に輝いた。これまでにグループはセント・ポール講堂、プロム・センター、ミネアポリスのルーザー・コーヒャー・ショップ、ミネアポリスのウォルター・ザッド・コンベンション、ウェスト・ジュニア・ハイスクール百周年祭、ステイト・フェアで歌った。

先週「キー・ノーツ」はラジオ曲KUOMで数曲を歌い、今週土曜日にはWCCOテレビのビル・カールソン・ショーに出演する予定。パフォーマンスというものには予想外のハプニングが付き物だが、「キー・ノーツ」も例外ではなく、ロンがコンテストでバンジョーを忘れる事件があったようだ。が、彼らは1位を獲った。「僕のバンジョーが、どれほど重要か、ってことだネ」と皮肉るロン。

「フォーク・ソングは聴くためのもので、踊るためのものではないわ」と、ドーティー。「それらの多くにはストーリーがあり、奥行きと感情を持っているの」「キー・ノーツ」は自らのアレンジもこなす。グループが成功するために、少なくとも二年間は一緒に活動したいと言う。共に歌い楽しむ彼らの様子は、金曜日の夜の彼らを観たセンテニアルの生徒達にはとても明白だった。

「キー・ノーツ」 サーキュレイティング・パインズ紙 1963年1月24日

最初に覚えた2曲は“Pretty Mary”と“Puff the Magic Dragon”。カートは楽譜が読めない私達に、それぞれのパートを歌って教えてくれました。生まれつきハモリが得意なシェリは、たくさんの自己流ハーモニーを付け加えていました。

(新聞より——「キープ・ウォーム・インサイド・ザ・シャレットは、週末のシュガー・ヒルズで行われるスイス式週末活動で、ミネソタ大学生400人が集うビジネスの主要な組合。外気は華氏20度以下*近くだが、シャレットはミュージシャン、歌手、うなる暖炉、たくさんの食料で溢れた」)

★—華氏20度=摂氏-7度



スイス・シャレット(西ミネソタ)での“ジャム・セッション”とライブ演奏
キー・ノーツ&ゴールドブライアーズからゴールドブライアーズへ移行の時
(左から-ゲイリー、シェリ、ロン、カート)

一緒にやり始めて新しいサウンドを探っていくと段々いい感じになり、正式なグループへと発展しました。(ゲイリーにはキー・ノーツに加わる以前から既に別のフォーク・グループ、ストウアウェイズ The Stowaways があり、そのメンバー達にグループ在籍の意思を確認された彼は、ストウアウェイズの方を優先し、それによってカートにグループ参加へのドアが開かれたのです)

私達は3時間ほどグループの名前について考え、“シェナンドーズ Shenandoah's”やら“ゴールド・ナゲッツ The Gold Nuggets”といったアイデアを経て、響きがユニークという点だけでなく全くフォークグループ名らしくないという理由から“ゴールドブライアーズ The GoldeBriars (混乱を避けるため、“e”は発音しない)”と名乗ることに決めました。それ以降、誰もスペルを正しく表記してくれず名前さえ覚えてもらえない事実から、いかに変わった名前をつけてしまったかを思い知ります。人々は私達を“ゴールド・バグス Gold Bugs (虫)”、“ゴールド・ブリッカーズ Gold Brickers (さぼり戦士)”、“ゴールド・バーガーズ Gold Burgers (ハンバーガー)”、“グリーン・ブライアーズ The Green Briars”、“ボールド・ブライアーズ Bold (ハゲ) Briars”、“ゴールド・ブラダース The Gold Bladders (膀胱)”といった楽しい名前呼びました。

グループ名の意味を訊かれたなら、“Gold”は何かしら特別なイメージ、“Briar”は何かしら平凡なイメージとして、“フォーク時代”におけるフォークの様な——そして、真ん中を“e”でくっつけることによって、特別なイメージと平凡なイメージをくっつけて意味を成すように。ちょうど私達の音楽がフォークソングを歌うグループとして始まりながら、単に普通のフォーク・グループとしては捉えられない、ちょっと“変な”存在であったように。

もし私達が、主にピーター・ポール&マリーの曲を演^やり続けるなら、シェリと私が“ピーターとポール”で、カートが“マリー”役になるということも決めました。私達がミネソタ大学でグループの練習をしている時、幸運にもキャンパス・グラウンドでひょいとピーター・ポール&マリーが告知無しのフリー・コンサートをやったのです。彼らのグループとしてのカリスマ性とその独特なフォーク・サウンドは、私達にとっても強く印象づけられました!

私達が、一味違ったボーカル・サウンドを持つようになって以来、かつて大衆メディアでは歌われなかったような曲にそれを用いて、表現したいと思うようになりました。カートのオリジナル曲“My Song”から、それは始まったのです。(当時カートは、いくつかのオリジナル曲を書き貯めていました)

“My Song”

Written by Curt Boettcher

(Girls sang ooh while Curt sang lead)

If I were a king, I'd sing a song of power
And if I were a butterfly I'd sing a song of joy—
Sittin' on a flower

(We all sang in harmony)

And if I were a swallow, I'd sing a song of love
And if I were an angel, I'd sing in God's heaven
above

(Song changed to minor key Girls sang ooh while Curt sang lead)

But if I were a liar, gambler or a thief
My song would be of trouble, sorrow and grief

(We all sang in harmony)

But I am so lonely, so sad, and shy
That my heart stopped singing
And my song passed me by

(Song went out with “ooh”s and “ahs”)

“My Song”

カート・ベッチャー 作

(カートがリードボーカルをとる間、女性コーラス達はウーと歌う)

僕が王様だったら、権力の歌を歌うだろう
そして僕が蝶だったら、喜びの歌を歌おう
花に腰かけて

(全員でハモって)

そしてツバメだったなら、愛の歌を
天使だったなら、天国の歌を

(曲がマイナー・キーに変わり、女性コーラス達はウーと歌う)

でももし、僕がうそつき、ばくち打ちや泥棒だったなら
僕の歌は悩み、悲しみ、そして嘆きになる

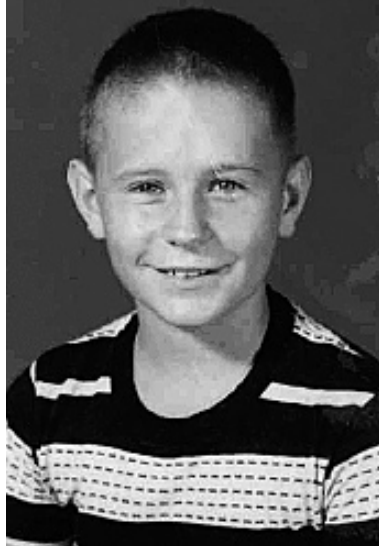
(全員でハモって)

でも僕はとても孤独で、とても悲しく臆病で
そんな心が僕に歌うのをやめさせる
そして僕の歌は通り過ぎてしまったのさ

(曲は「ウー」と「アー」で終ってゆく)

私達は毎週末、大きな音が出せる場所ならば、どこでも練習しました。伴奏は、まずカートが弾くマーチンのフォーク・ギター、そしてシェリが叩くタンバリン。3人のゴールドブライアーズ結成2週間後、シェリと私は、既に解散していたキー・ノーツのメンバーだったバンジョーとギター担当のロン・ニールソンに音を聴いてもらうために、彼を練習の場に連れ出しました。すると、ロンがサウンドのバックアップを付け足すようにギターをかき鳴らして数分間ふざけまわり、私達がゴールドブライアーズ4人目のメンバーとして彼を迎え入れた時点で、グループは完成したのです。

子供の頃の写真



CURT



RON



DOTTI



SHERI

——私達の子供服は祖母が小麦袋からこしらえたもの。

……かわいいでしょ？



見つけた写真、赤ちゃんの従姉妹ドナ、ゲイリー、ドーティー、シェリ

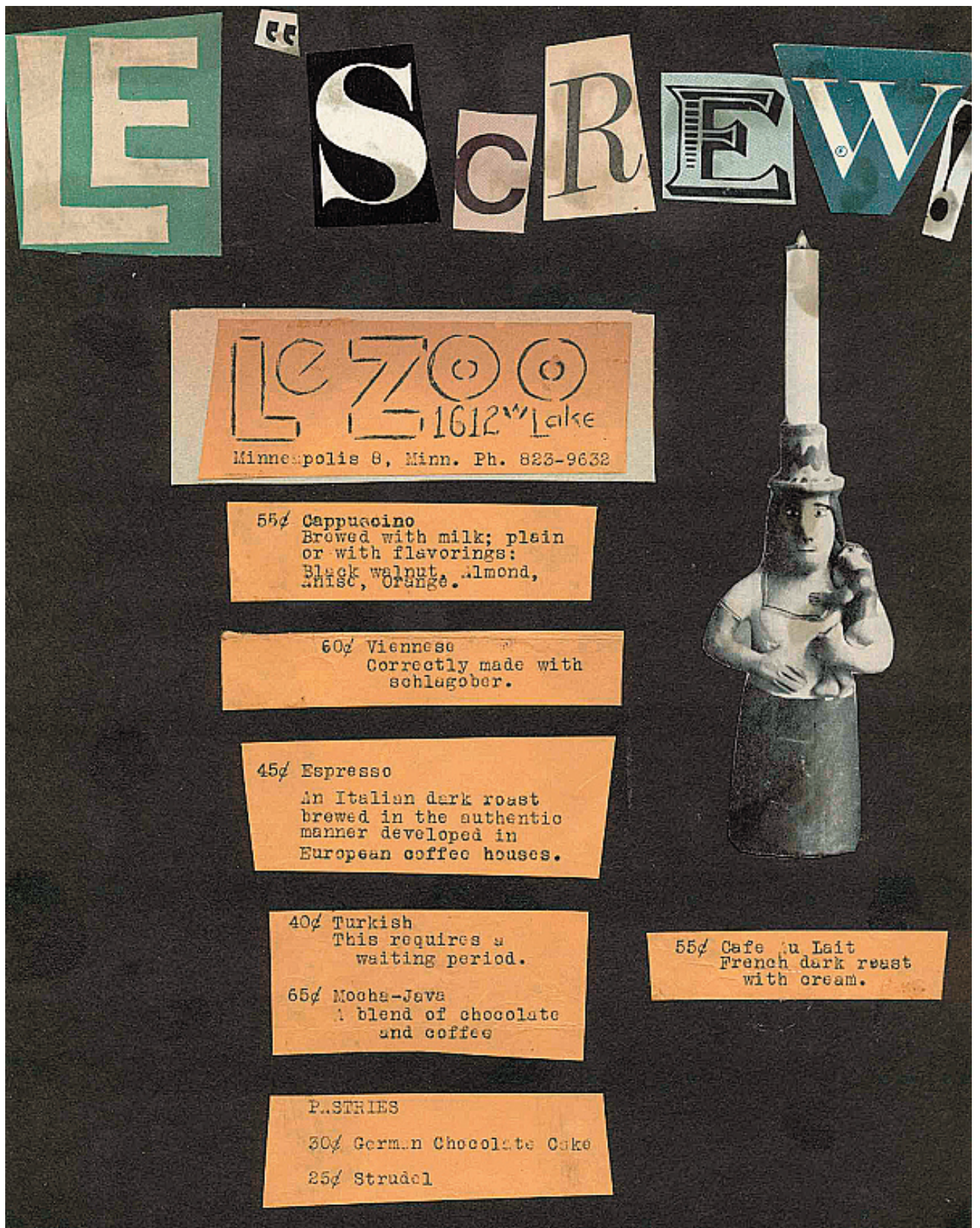
私達はとても年齢の若いグループでした。18才になるカート、19才のシェリ、16才のロン、私は17才。デビューは、ル・ズー・コーヒーショップ……

“ねじ込み物語”(ゴールドブライアーズのスクラップ・ブックから引用)

「ル・ズーのオーナー達はこのグループの結成を誰より熱望し、その意向によってステージ上で形成された。それに従って、早くもゴールドブライアーズ結成の4週間後、彼らの“たくらみ”で、お披露目としてステージへと放りこまれ、WCCOテレビ番組“ビル・カールソン・ショー The Bill Carlson Show”へ出演する機会が与えられた(グループがル・ズーのマネージメントで受けた唯一の宣伝)」

夏、利益の見込みそうな、あるブッキングにより、カートはミネソタ大学を辞める準備をし、シェリはセント・ポールの保険会社を辞め、(ドーティーとロンはまだ高校生、)グループは“ヘダール・エンタープライズ Hedahl Enterprises”(ル・ズーのオーナー達によって設立された、ゴールドブライアーズのプロモーションとマネージメントのための会社)とのマネージメント契約の準備に入り、車無しの夏のロード(どさまわりツアー)に備えました。レパートリー、ステージ用材料、中でもとりわけお金の事(ル・ズーからの未払金トータル\$500)が気にかかっていたけれど、私達は見かけ倒しな即席の成功に望みを託し、浮かれた状態でした。レコード契約、スター、映画契約などを夢見て……

言うまでもなく、夏が近づくにつれ、いくつかの果たされない約束が置き去りになり、見え聞こえもしない彼らのサポートに私達4人のフォークシンガーは立ち往生。たちまち暗雲が立ちこめましたが、まだ希望は捨てていませんでした。



先の約束で、私達は、自分達がいかに“盲目的な”状態にあったのかが、ようやく分かりました。でも若く純真なグループが、どうやってそれを学ぶことができたでしょう。クラブのオーナーらが、相変らず週給の未払金\$500以上を延滞し続けても、私達は信じ続けました。でも、結局いい加減な人達のことを信じすぎていたということです。……その後に及んでも人々は私達をがっかりさせ続け、華々しいだけじゃない陰しいショウビズ界というものを、私達はやっと学び始めました。



"FIRSTS"

1st pictures taken



1st club played



1st album cover



はじまり

CD-Rom eBook

The GoldeBriars' Story
“Whatever Happened to Jezebel?”
The GoldeBriars' Epic Years
ジェザベルに何があったの…?

CHAPTER

2

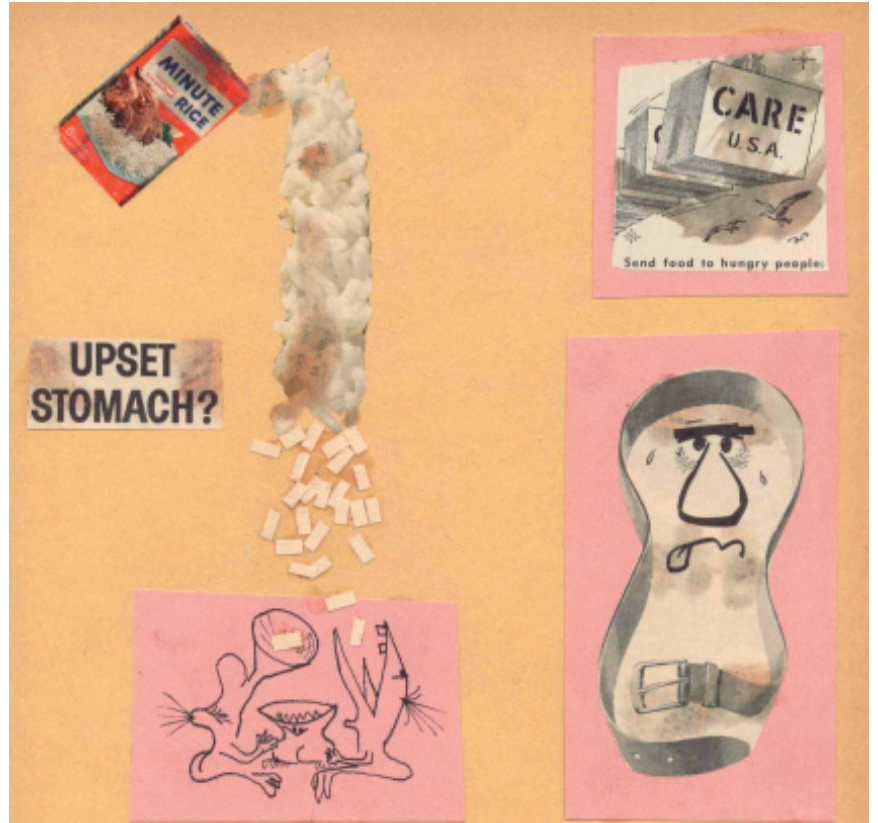
“DAYS OF RICE AND ROSES”

米とバラの日々

第二章 “米とバラの日々”

★—約12kg。1kg=約2ポンド

私の高校卒業後(1963年6月)、夏の仕事を得る作業に着手し、ゴールドブライアーズのサウンドを組み立て続けます。見つけたほとんどの仕事は全て、申し込みの時点ですで見込みが無く、早くも“崩壊第一期”を迎えることになります。そんなわけで、私達はお金を借りてアパートに引っ越し、25ポンド★ほどの米を袋買いして、約3ヶ月で20種類もの米料理を食すという“米の祭典”を幾度も開きました。



胃を壊す?

ご飯の作り方

1. 水4カップ
2. 塩1つまみ
3. 米1カップ
4. 1、2、3を合わせ火を通す。ご飯が出来るまで火にかける。

全ての米料理に変化をつけるため、生魚のお頭や、海草スープ(最もよく使ったのが日本の“だしの素”)を添え、お金に余裕があれば肉やチーズを加えます。思えばこの事が、母の料理に対する感謝に繋がりました。来る日も来る日も米料理だけの食事は、そんなに悪くはなかったけど、次第に味の感覚が無くなってきました。夕食はいつも同じ種類のビタミンを摂っているような感じでした。父親の海軍配属により日本生活の経験があるカートは、日本料理に精通した、良き料理アドバイザーでした。

数ヶ月間に及ぶ職探しで、全員が職にありつけました。それぞれの職種——シェリは植物の種会社、カートはトラクター会社、私は小麦会社に。私達、まるで農業デパートを始めたみたい。

その頃、私達に5番目のメンバーとして肥沃^{ひよく}の女神ジェザベルが加わりました。この木製のアイドルについてお話ししましょう。ジェザベルの歴史は恐らく、“精力旺盛な”ミクロネシアの原住民の間で、ヤシの切り株を彫った物に始まります。第二次世界大戦中、ロンの父親が兵役後に太平洋の戦地から彼女を運んで来ました。役割はゴールドブライアーズの正規マスコット。まず、幸運を呼ぶお守りとして、ロンとカートがジェザベルをグループに持ち込みました。そして、ル・ズーで行われていた“オーナーらとの決別の日々”のショーで、ロンとカートが私達女性メンバーを驚かそうと、ジェザベルをステージ上に置いた事が、最初の出会でした。彼らの思惑どおり私達は驚かされはしたけど、歳の数で私達を圧倒するその“年季の入った女性”を、意外にも気に入ってしまいました。

どうもジェザベルがグループに安心感をもたらしてくれている、ということに気づき、幸運を運んでくるという役割で彼女は正式メンバーに任命され、グループの幸運のシンボルとなり……時が経つに連れジェザベルは、ささやかな愉しみを私達に与えてくれたり、あからさまに憤りを表現するなどして、私達に対するたくさんの注目や評判を呼び込みました。

ちょっとした収入があれば、“グループの壺”にそれを入れ、賃貸料、食費、返済金、私達の最初の車51年式ドッチ購入などのために貯金していました。この車はブサイクで、まるで灰色の戦車みたい。私達はこのドッチを“THE”号と名付けました。この名前は、車の横に大きな黒字で“The GoldeBriars”とペイントしようとしていた時に思いつきました。車に“THE”の文字を塗った後、グループ名を塗るのは安直すぎるということになったのです。人から「THE、何?」と訊ねられたら、「THE 車」って答えよう……町を走る時、そんな感じで“THE”号について論議したり、人から問いかけられたりしたのを思い出します。



私達最初のアパート

夏になり、セント・ポールとミネアポリスでのゴールドブライアーズのプロモーションのために、マネージャー探しを始めました。

ジョン・ハーニー John Haeny は、ジュディ・ヘルジランド Judy Helgeland とマーク・ホーレンキスト Mark Hollenquist を介して、ゴールドブライアーズの面々に出会います。ル・ズーのウェイトレスであるジュディがマーク・ホーレンキスト(地元フォーク・グループのメンバー)に話し、そこから彼のマネージャーへと情報が伝わり、ジョンへと繋がりました。“新しい”、あるいは“変わった”フォーク・グループがあるという噂に、ジョンの才能発掘の好奇心が目覚め、数日後の夜、その日のショーのトリを務めるゴールドブライアーズを、ル・ズーの小さなテーブルで見ることになったのです。

ショーの後でジョンは私達に、レコード発売を前提とするゴールドブライアーズのレコーディングに興味がある、と話しました。ゴールドブライアーズには既にメジャー・レコード会社との契約がある、というル・ズーのオーナー達による失礼かつ不当な吹聴のせいで、危うくジョンとのレコーディングの話が潰れそうになりましたが、私達は彼らには従わず、才識あるジョンの考えを喜んで受け入れました。ル・ズーのオーナー達は、彼らのモノポリー・ゲームが危険な状況にあると感知し、ぶざまにも慌てて代理人を立て、その力を最大限に使い、契約を完全に元に引き戻そうとしました。私達は、より深くジョンと付き合うにつれ、ル・ズーとの因縁から逃れるのを彼なら助けてくれるかも知れないと実感したので、マネージメントを引き受けたいという彼の申し出を喜んで受け入れました。彼のマネージメント会社名は“コンテンポラリー・タレント Contemporary Talent”。それ以後、ル・ズーとそのオーナー達によるマネージメント会社は消滅し、ゴールドブライアーズは通称ママ・ジョンのマネージメントの元、彼のサポートにより、順調にその活動をスタートさせたのです。

★—ミネソタで最も有名な、互いに近いこの2つの都市は、ツイン・シティーズ “Twin Cities”と呼ばれる。

★—ミネソタには1万を超える湖とたくさんのウォーター・スポーツがあり、この祭りは巨大な架空の動物像のパレードなどで盛り上がる。

★—フーテナニーとは聴衆参加型のフォーク・コンサート

最初の夏の共同作業は、ミネソタ二大都市★であるミネアポリスとセント・ポールでのチャリティ・コンサートやちょっとしたギグなどを行うことでした。ジョンはゴールドブライアーズが仕事を獲れるようにと、アル・シーハン・ブッキング事務所のオーディションを受ける手助けをしました。このブッキング事務所を通しての最初の仕事は、ミネアポリスの各界のトップ達による架空の社交性に彩られた、“ミネアポリス・アクエニアル(水の祭り★)”と呼ばれる無秩序の祭典で、2週間に渡ってミネソタの有名ホテルやカントリー・クラブで、たくさんの酔っ払いや好まざる人々のために、遮二無二演奏を続けました。

コンテンポラリー・タレントは“ミッドウェスト・フーテナニー★・フェスティバル”や“ミネソタ大学の歓迎週間”の仕事、また弁護士会、ミネソタ・ホワイト・ベア・レイクでのフーテナニー、(セレモニーの長であるKDWB TV局のハル・マレーのいる)セント・ポール・ミッドウェイ・ショッピング・センターでのフーテナニー、(“セブンティーン誌”モデル達との)デイトンズ・ファッション・ショー、ミッドウェイ・スタジアムでのWDGYフーテナニー、サウス・セント・ポールでのWDGY提供のフーテナニーなどの仕事にゴールドブライアーズをブッキングしました。



Brother Gary

カートはゴールドブライアーズのリーダー格で、シェリや私の意思を確かめずにグループとしての決断を下しました。ある時期、ほんの短い期間でしたが、カートはゴールドブライアーズのサウンドに4声ハーモニー(恐らく男声低音 baritone)が欲しいと言っていました。そこで、シェリと私の兄であるゲイリーが挑戦すると、私達姉妹の声とうまくブレンドし、ゴールドブライアーズに完璧なハーモニーを付加すると思われましたが、カートは、ゲイリーの百万ドルの声に興味を示しませんでした。

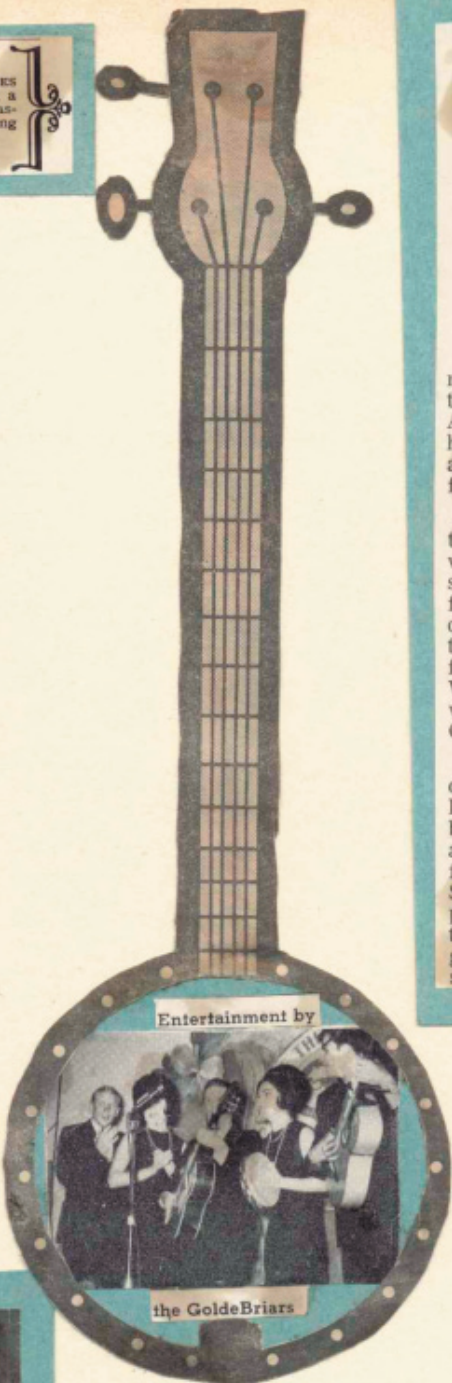
急報——ゲイリーは20thセンチュリー・フォックス・レコードでレイ・モリーナ Ray Molina と共に、シングル1枚をレコーディングしました。Gary and Rayとして発売された彼らのシングル曲“Why”と“Meaning of My Mind”が、百万ドルの声を持つゲイリーの、唯一のプロとしてのレコーディングです。



1963年パデッド・セルでのフォーテナニー

hoo-t'en-an-ny (hōt'ēn-an'ē), n. [pl. HOOTENANNIES (-iz)], (orig. in sense of "dingus," "thingumajig"; a fanciful coinage, used also as derogatory epithet; assimilated in form to *Hootin' Annie*). [Slang], a meeting of folk singers, especially for public entertainment.

THE PARKETTS
PRESENT
THE
MIDWEST
HOOTENANNY
FESTIVAL
SAT. SEPT. 14
8:00 P.M.
ST. LOUIS PARK HIGH



Entertainment by



the GoldeBriars



"THE GOLDEBRIARS"

The "GoldeBriars" are one of the most exciting new folk groups in the entertainment industry today. Although not easily done, they have developed a sound, a style, and a image without parallel in folk music.

Together for over half a year, they previously have worked with various other folk groups, or as singles. Therefore, when they formed "The GoldeBriars," each individual brought along with their talent, a sizeable background in folk music and entertainment. What resulted from their merger, was just as expected, "THE GOLDEBRIAR SOUND."

The "GoldeBriars" are composed of Curt Boettcher, who is group leader, lead vocal, and does the bulk of the groups arranging. Dotti and Sheri Holmberg, supply their fine voices to the "GoldeBriar Sound", and Ron Nielson, who supplies additional accompaniment on the Martin guitar, Goys Classical guitar, and Vege long neck 5 string banjo.



Feminine voices contribute to the blended, balanced sound produced by the Goldbriars at the St. Louis Park gathering.

Dayton's



3:00-4:00 FASHION SHOW with the SEVENTEEN models! It's SEVENTEEN'S "Holiday Hootenanny" Fashion Show, with commentary by Editor Anita Blanchard, songs by the GoldeBriars folk group, and exciting fashion for teens modeled by the SEVENTEEN models and Dayton's Teen Boards. River Room, Cedar level.

4:30-5:30 Repeat performance! SEVENTEEN'S "Holiday Hootenanny" Fashion Show with the same great stars! River Room, Cedar level.

80th

ANNUAL MEETING

Honoring the Past Presidents of

INDEPENDENT INSURANCE AGENTS OF MINNEAPOLIS

112 - Hi. 7-9266

Ta. 2-2703

Jul 1-5513

COURTESY CARD

This will admit the bearer and party to the

Glendale Supper Club

Introduced by *Lee Nolan*

Arrange Your Own Refreshments
Setups and Beer Available

Open Wed. thru Sun. from 5:30 P.M.



S. Entertainment - "The Goldebriars."



カートは代わりにトム・ピーターソン Tom Peterson を4声目に、5番目のメンバーとして迎えました。正しい音程も取れず真っ直ぐに声も出せない彼を、なぜカートがグループに引き入れたのか理解できませんでした。彼は金髪で青い眼、キュートないい人だったけど、グループに入る理由としては十分ではなかったはず。その後グループの活動が軌道に乗ってきた頃には彼は脱退し、その歌の相性が悪かったのは、やはり明らかでした。(トムは前のページの内の2つの写真に写っています)

この頃カートとシェリと私は、ヘネピン・アームズ・アパートに住んでいました。私達女性はジュディ(元ル・ズーのウェイトレス)と、カートはエドワード・レイク Edward Lake とトム・ピーターソンと、それぞれ部屋をシェアしていました。

カートのゴールドブライアーズ・スクラップブックから引用——「ヘネピン・アームズで過ごした時間はグループとしての絆を強め、さらには我々を大きく包みこんで、生涯の友人となる愛情でお互いを理解し合った」

夏が過ぎ、ゴールドブライアーズの新しいフォーク・サウンドへの移行についての話し合いが始まります。サウンドを成長させるため、よりたくさんの曲を学びました。流しのフォークシンガーからも幾つかのヒントを得ました。(学生時代に習った私の速記術が役に立ち始めます)。ジーニー・リッチ Jeanie Ritchie (と彼女のダルシマー)とかの古い民俗音楽のフェイバリット曲、他にもフォーク・グループのアルバムや友達の曲から、その原形が分からなくなるくらいにカートがボーカル・アレンジを施し、そのカートのアレンジャーとしての才能がグループによって音楽的に表現されて、ゴールドブライアーズのレパートリーに加えられる、といった具合に学んでいきました。

ジョンのコンテンポラリー・タレントの舞台裏には、デヴィッド・ハースク David Hersk という人物がいました。デヴィッドの両親は、ゴールドブライアーズの最初のデモを録音したゲイアティ・レコーディング・カンパニー Gaiety Recording Company の経営者で、ジョンがエンジニアリングとプロデュースを担当しました。デヴィッドは、ゴールドブライアーズやフリントヒルズ・シンガーズを収録した、世界初の正方形ステレオ・ソノシート盤製作といった奇抜なアイデアを持っていました。これは7"-3/4 × 7"-1/4(インチ) の大きさで、33-1/3回転で再生されます。



ゴールドブライアーズ、
“ママ・ジョン”と
“ダビデの星”を獲得



我々の正方形ステレオ・ソノシート盤(音質良好)

このレコードに収録されたゴールドブライアーズの2曲は、“Rollin’ Stones”と“Old Time Religion”、フリントヒルズ・シンガーズの2曲は、“Blowin’ in the Wind”と“Come Along”。この正方形ステレオ・ソノシート盤を持ってデヴィッドは、ゴールドブライアーズの売込みと販売を行い、そしてグループが受けた3つのメジャー・レコード会社からのオファーへの扉を開きます。Dot Records、Mercury/Phillips、Columbia Records からオファーを受け、結局コロムビアと契約することになり、同時にエピック・レーベル epic (コロムビアの子会社)からのアルバム発売が決まりました。

それから、事態はとても早く進みました。可能な限りお金を貯め、ファースト・アルバムのレコーディングのために、1963年11月、私達はニューヨークへと旅立ちました。

ロンはまだ16歳で、高校にもう一年間通わなければならなかったのですが、修学スケジュールの調整をする必要がありましたが、数力国語を話すとても知的な彼にとっては、高校に在学中であるということは、何ら問題はありませんでした。

CD-Rom eBook

The GoldeBriars' Story
“Whatever Happened to Jezebel?”
The GoldeBriars' Epic Years
ジェザベルに何があったの…?

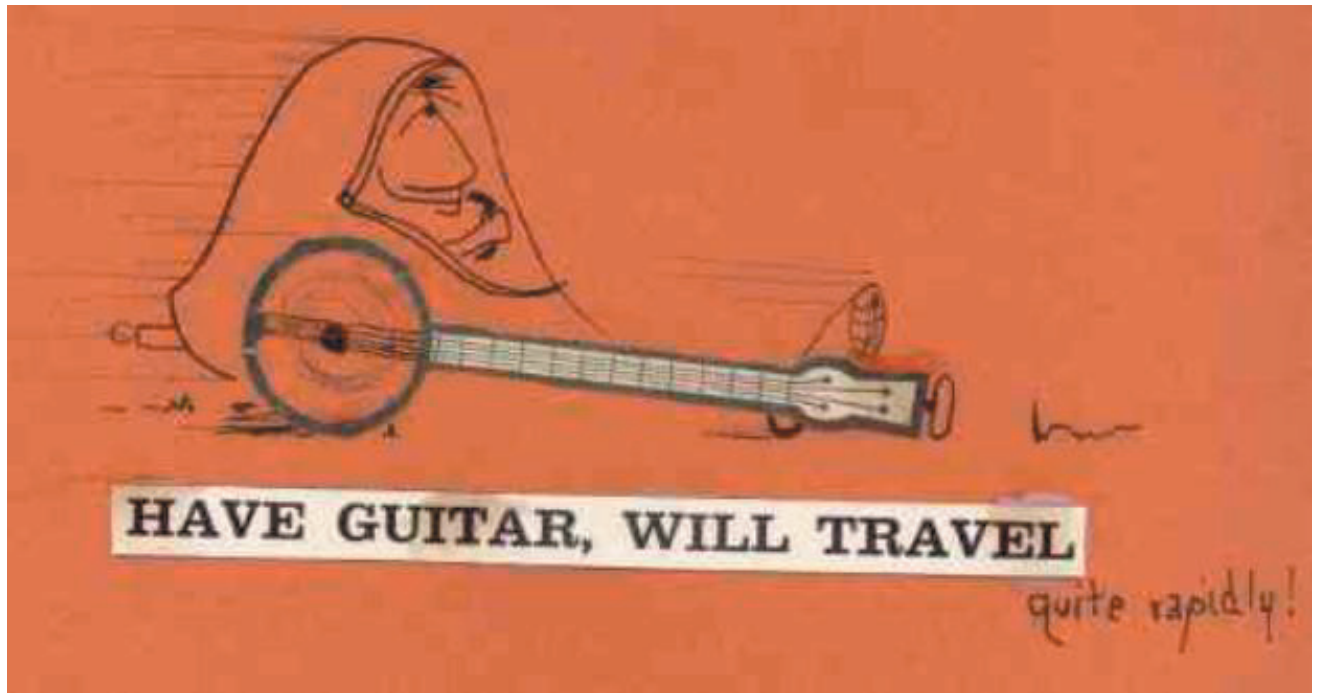
CHAPTER

3

“OUR BRAVE NEW WORLD”

果敢に臨む新しい世界

第三章 “果敢に臨む新しい世界”



カート一画 ギターを持て、旅に出よう（かつ飛ばせ!）

寒い土曜の朝、“ゴールドブライアーズ”と“ママ・ジョン”は、51年式ドッチ
“THE”号へぎゅうぎゅうに詰め込まれました。

キスで皆に別れを告げると、“THE”号はヘネピン・アームを離れてどんどん進
んで行きます。

引用——離脱(ゴールドブライアーズ・スクラップブックより)

スーツケースが車内の床に敷き詰められ、実際そんなに狭苦しくはなく、
一種のリクライニング・セダン車のような状態。細くて長〜い足のロン!!
きっと誰かがタバコに火を点ける度に、夜逃げの車か、火事か、ゴミの
山みたいに見えたはず。(ゴホゴホ!!)

最初の休憩は、カートの故郷ウィスコンシンのオウ・クレア。彼の祖父
母と一緒に、懐かしい味のおいしい料理を囲んで食事をする。食事後、
彼らにサヨナラして出発し、道路に大量のゴミを撒き散らしながら州を
またぐ。方々の休憩場所ではウェイトレス達を歌で楽しませ、90マイ
ル(約150キロ)までスピードを上げる毎に1クォート(1.14ℓ)のガソリ
ンを燃やしながら、ロンの運転で突き進む!

シェリと私はニューヨークに行くって事でワクワクしていました。それまで
ミネソタから外に出た旅といえば、たった一度だけウィスコンシンに行った
だけで、このニューヨークへの旅で、確実に新しい世界に突入できる確信があっ
たからです。もちろん移動手段は、“THE”号だけが頼り。ところで、ゴール
ドブライアーズ4人にジェザベル、マネージャーと手荷物を、この戦車みたい
な車の中へ積み込む様子がどんなだったかって? 長旅の経験が無いシェリと

私は、トレーラーも無いし運び人もいないのに、所持品のほとんど全部をスーツケース、紙袋、箱、バスケットいっぱいを持ち込んでしまったのです。(笑)

“THE”号にトランジスタ・ラジオを吊り下げ、低い天井ギリギリまでアンテナ線を張り巡らせました。車のフロント・ボードに、飢え凌ぎの野菜袋を3つ置き、足を放り出すためのスペースを野菜袋の中やダッシュボードの上など、方々に確保しました。足の置き場が悪い所もあったけれど……。

シェリと私は、州と州との変わり目が見たいがために、旅のほとんどを起きて過ごしました。約20時間の旅の末、本当にミネソタを脱出してしまった事に感動しました。

引用——ニューヨーク・シティ到着(ゴールドブライアーズ・スクラップブックより)

「ゴールドブライアーズと、(既に)白髪のマネージャーは、日曜日の午後ニューヨークのヴィクトリア・ホテル前に到着。28時間にも及んだ長旅の終わり。「ウー」とか「オウ」とか「あたしのガードルどこかしら?」とか何だか言ってる得意げなニューヨーカーにさえ、路肩で“THE”号を休ませる6人とジェザベルが、何となく敬われているような気分がした」

「2つのバスルームと2つ半のベッドルームがあるホテルの続き部屋を確保すると、我らギャングは荷を解き始め、風邪をひいたカートはビタミンCと解熱剤を飲んで寝た」

ゴミのようなビルの群れや、ラッシュ時の歩道にひしめき合って歩く人々の滑稽な姿を見ることで、まず、姉にとってのニューヨークは大きな落胆でした。でも、初めて地下鉄に乗った時の、古風で趣のあるグリニッチ・ヴィレッジの最初の光景、洋服店、劇場、そして初めてレコーディングで訪れた30番街のコロムビア・スタジオは、私達の生活に多大な変化と興奮を与えました。

ニューヨークは、まるで“初めての何々”といった類の本みたいに、知識の玉手箱でした。男同士で珍しい関係を結ぶ男達の世界の事がとてもショッキングでした。小さい頃、人がおかまについて話していたけど、そんな人は世界中にほんの僅かしかいないと思ってました。成人誌への幻滅とたくさんの不幸な結婚を見た経験から、私はそれまでの人生において、セックスに関する事を全て避け続けていました。理解するいい年頃に、うぶじゃなくなってから性教育の本を自分で読んでみようと思っていたのです……(19才の頃、それまで知らなかった事を知って何と驚いたことか!)

ニューヨークではたくさんの常識の違いがありました。その内の一つ、ニューヨーカー達がよくオーダーする(予めミルク入りで出される)レギュラー・コーヒーが、私達の間にちょっとした議論を呼びました。自分をクールに見せかける手段として、私達はブラック・コーヒーを頼むべきだって……。カートは、大抵その手は通じると言いました。日々一食の予算に見合うお気に入りの食事は、48番通り7番街タツズ・ステーキハウスで、当時たった\$1.19のステーキ・セット(ステーキ、ベイクド・ポテト、ロクフォート★・ドレッシングのシェフ・サラダとガーリック・トースト)。ちょっとお金に余裕がある時は、全員デザー

★—羊のミルクからできた柔らかいチーズ

トにチーズケーキを食べます。そこで食べていた肉が、実は熟成のために1週間以上も放置されたものだと従業員から聞かされるまでは、毎日そこへ通いました。それ以来、自分達が実際に食べているものを分析しつつ、新しい食事スポットを探すようにしました。

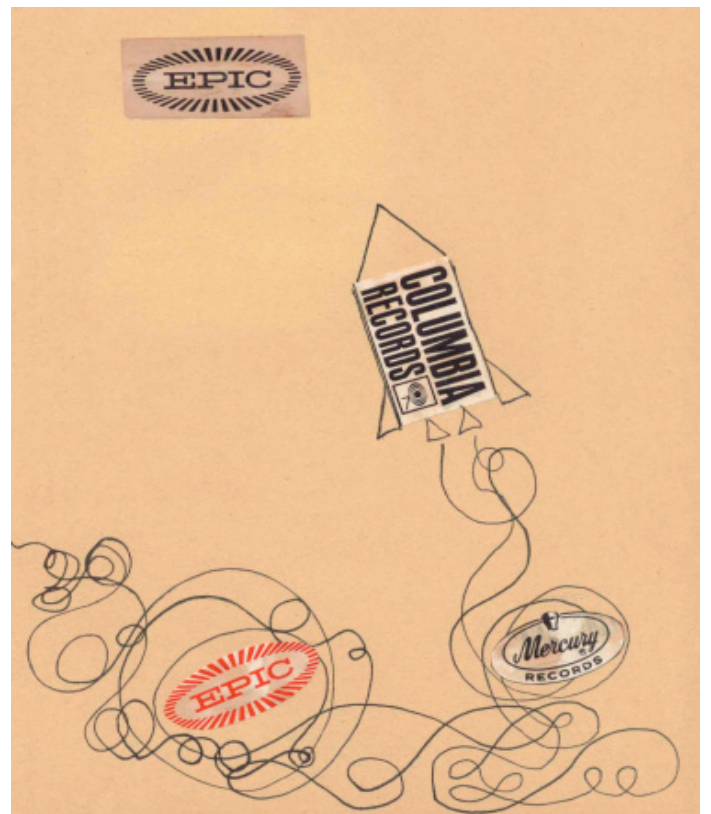
私達が中西部独特の鼻にかかる発音で「our」と言うと、何となくニューヨークでは外人みたいに聞こえました。特にシェリと私。そんなミネソタ訛りがあるって自覚はありませんでしたが、「b-a-a-a-g」と言って、一袋のポップコーンを注文すると、典型的な農民だっと思われたようです。でも、私達にはニューヨークの女性達のアクセントが大袈裟で騒々しく聞こえたし、ニュー・ジョイズィー(ジャージー)の人達のは、もっと変に聞こえました。

ニューヨークはまるで、世界中の歩道が交わる交差点みたい……込み合う街の中に、たくさんの専門語や言語が入り混じっています。シェリは都会に放り出された恥ずかしがりな田舎のそばかす娘、カートとロンはいつからニューヨークにいるのか分からないような知性派、私はどこに行っても丸々太ったエスキモーのおてんば娘みたいに見られました。

引用——(ゴールドブライアーズ・スクラップブックより)

「ニューヨークで最初に思ったのは、人々がそれほど英語を喋らないということ。ロンとカートはスペイン語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、ヒンドゥー語、日本語で話した。これらたくさんの言語が試されながら使われた」

「初めての地下鉄経験は夜中で、何か、ちょっと変った不気味さを感じた。夜のグリニッチ・ヴィレッジは、漫遊者への罠へと様変わり」



CD-Rom eBook

The GoldeBriars' Story
“Whatever Happened to Jezebel?”
The GoldeBriars' Epic Years
ジェザベルに何があったの…?

CHAPTER
4
“MUSICAL CHAIRS”
音楽講座

第四章 “音楽講座”

ニューヨークの第2日目、ゴールドブライアーズはエピックのスタッフ達と対面し、その夜コロムビア30番通りスタジオで行われる、最初のレコーディング・セッションへと向かいました。そこで一緒に仕事をした人達は全員、今まで出会った中でもとてもいい人達ばかりで本当に驚きでした。その愛着ある面々とは……プロデューサーのロバート・モーガン Robert Morgan、エピック総務部長のレン・リヴェイ氏 Len Levey、ロルフ・ハリス Rolf Harris（オーストラリアでの“Tie Me Kangaroo Down”ヒット・シンガー）、エンジニアでいつも笑顔のフランク Frank、ベーシストのノーマン・キーナン Norman Keenan（彼は、その後の私達のABCフーテナニー出演を予見していた）、カッコいいラス、借り主、お茶を運んでくれるエディ。



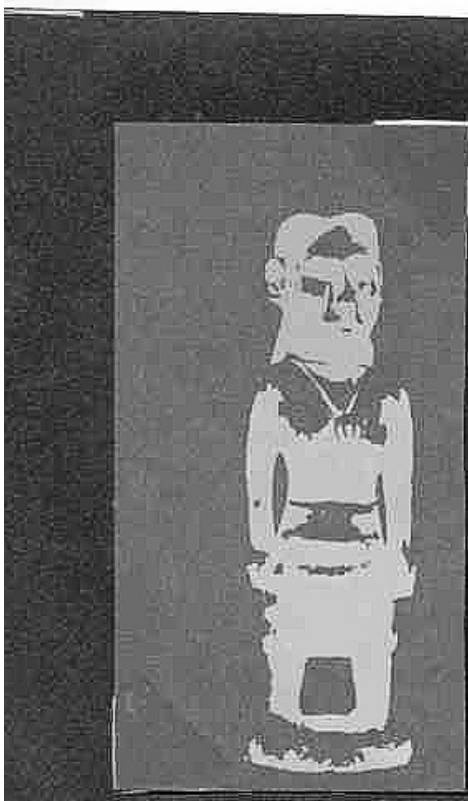
ロルフ・ハリスの挿絵 録音中のカートとシェリのスケッチ



INTRODUCING . . . THE GOLDEBRIARS ***

EXCLUSIVELY ON EPIC RECORDS

*** AND JEZEBEL, TOO



レコーディング・セッションとエピックのアルバム宣伝



HERE ARE GREAT NEW POPULAR LP'S!



LN 24114 / BN 26114*

Includes "Sea of Tears," "Sweet Potatoes," "Ride That Chariot" and others.



LN 24100 / BN 26100*

Includes "Red River Valley," "Tumbling Tumbleweeds," "On bama Bound," "The Trail" and others.



LN 24087 / BN 26087*

Includes "Railroad Boy," "Ain't Tumbling Tumbleweeds," "Shenandoah" and others.



RECORDS

AN EXCITING DIMENSION IN VOCAL ENTERTAINMENT

*Stereo.

©1963, World Reg. T.M. PRINTED IN U.S.A.

レコーディング初日の夜から半日となる翌日11月22日(1963年)、ケネディ大統領が暗殺される日までは、全てが順調に進みました。当時の私達の気持ちを言い表すのはとても難しいけれど、誰もが見てとれるように皆が打ちひしがれ、心の中に鳴り響く音楽などあり得ないという状態でした。ただ涙あるのみ。ケネディ大統領が暗殺された事を知る前、ニューヨークの歩道を歩いていた私達は、たくさんの人が泣いているのを見て不思議に思いました。何があったのか尋ねようとレストランに入ると、その時まさに、その悲惨なニュースが流れていたのです。とても気分が沈んだ、不気味な日でした。

その夜のレコーディングは、事件の重々しさから抜け出すのはとても大変だと分かっていましたが、プロとしての心得「ショー・マスト・ゴー・オン!」の言葉通り、私達はやり遂げました。



暗殺直後に誰かが描いた、ケネディのスケッチ(“ラーマンスキ Lermanski”と思しき画家のサイン)

レコーディング当時は、まだフォーク・ミュージックが流行っていました。エピックは次の人気フォーク・グループとして、ゴールドブライアーズに期待をかけていました。まだ誰もその地位を獲得していなかったのです。確かに私達はフォークソングを歌うけれど、かなりポップなスタイルでやっていました……。 “Railroad Boy”や“Mumblin’ Word”とかにジャズ・ハーモニーを取り入れていたし、たまにゴールドブライアーズのサウンドは東洋的だとも言われていました。確かにそれは言い得て、カートは日本滞在中、日本の音楽に興味を持っていました。彼は1枚目のレコーディングでボーカル・アレンジをして(シェリのパートは彼女自身のフィーリングを活かしつつ)、彼とロンで自らの楽器アレンジもしました。ゴールドブライアーズが迎えたゲスト・ミュージシャンは、ウッド・ベーシストのみでした。レコーディングが終了する頃には、私達の間には大きな信頼と興奮が生まれました。発売1ヶ月前、ビルボード誌とキャッシュ・ボックス誌がゴールドブライアーズのアルバムをプッシュしました。エピックはゴールドブライアーズのために、とても洗練された形で1stアルバムからの4曲入りシングル(45回転)をラジオ局にプロモーション展開してくれました。“He Was a Friend of Mine”、“Mumblin’ Word”、“Shenandoah”、“Old Time Religion”です。

ジェザベルと一緒に写った私達のプロモーション写真の全てに、“近日発売”、“もうすぐエピックから新作”などと印刷され、ジェザベルがいいプロモーション材料になりました。

Good luck can be a pinch of salt thrown over a shoulder, a four-leaf clover or a rabbit's foot. But to The GoldeBriars, the exciting new Epic folk group, good luck is a shady lady from the Marshall Islands. Her name is Jezebel. She wears an elephant bell around her neck, and very little else—as you can



see. Before joining The GoldeBriars, Jezebel presided as a fertility goddess in the South Seas. She has more spice than salt, more curves than a four-leaf clover and more warmth than a rabbit's foot. The GoldeBriars never, never move without her—and she can't without them.

ジェザベルとエピックの
プロモーション写真

幸運のお守りと言えば、肩に撒くひとつまみの厄除け塩、四つ葉のクローバー、もしくはウサギの脚。しかしエピックからの素敵な新人グループ、ゴールドブライアーズの場合は、ミクロネシア諸島からやって来た、謎めいた女性像だ。彼女の名前はジェザベル。象牙の鈴を首にまとい、ご覧の通りとても小さな体である。ゴールドブライアーズに加わる以前の彼女は、南方の海で肥沃の神として奉られていた。彼女は塩以上の効力を持ち、四つ葉のクローバーより幸運を招き、ウサギの脚より温かみがある。ゴールドブライアーズは決して彼女を手放すことなく、彼女もまた彼らの元を離れないだろう。



最初のエピックからのアルバム及びラジオ・プロモ用シングルの
宣伝材料



FRESH!
IMAGINATIVE!
&
SUPERSTITIOUS?

新鮮！
想像力に富み！
そして
迷信深い？



以下の文は、エピック社のバイオグラフィーからのグループ宣伝文です。

エピック・レコード・バイオグラフィー 1964年2月
“ゴールドブライアーズ”

グループ名に特定の意味は無く、「木製のアイドル像にして寡黙なパートナー、ジェザベルは5人目のメンバー」だと彼らは言う。サウンドは新鮮で晴れやか、すこぶる健康的。全ての楽曲アレンジとその音楽スタイルに影響を与えたものは、ロックから日本の歌舞伎音楽にまで及ぶ。メンバー達のプロとしての経験が、ミネソタのル・ズーというコーヒESHOPのステージと、ネブラスカ州オハマでの5日間のステージに限定されるのは、「その地に何軒もショーのためのコーヒESHOPがある」という理由から。カート・ベッチャー、ロン・ニールソン、シェリ・ホルムバーグとその妹ドーティーらが結束を固めてからは、壮大かつ一風変わった新しいタイプのフォーク・グループとして活躍する。その湧き上がる熱意と対抗できるものは唯一、今月発売されるグループ自身のデビュー・アルバム“The GoldeBriars”のみであろう。

サウンドのルーツがどんなものであろうと、斬新さにおいては、他のほとんどのグループがゴールドブライアーズのそれよりも、成長に少し時間が掛かってしまうであろう。

「ロンとシェリと私が……去年1月のある晩、ル・ズーに立ち寄ると、カートがソロで歌っていたの」とドーティーは語る。「あの晩、何が起きたって言ったらいいかよく分からないけれど、席で歌ったりステージに上がって一緒に歌ったりしたの」

4人はその場で、全てにおいてゴールドブライアーズとなり、たちまち14週間に渡るル・ズーとのマネージメント契約が結ばれた。「去年の夏にもそこで仕事をしたけど、彼らから十分な支払いが無くて、未払いがしばらく続いたおかげで、食べるものも月々 25ポンド(約12キロ)の米しか無くて、思いつく米料理はすべて作ったよ」と料理担当のカート。「日本での米生活には慣れてたけど、あんなに米料理が毎日続くとちょっとね……」

カートは日本生活で経験した以上の米料理を覚えた。彼は他にもフロリダ、サンディエゴ、カリフォルニア、ミネソタ、ワシントン州ウィドビー・アイランドに住んだ経験がある。「父が海軍の役人だから、ひとつ場所に長く住んだことがなくて」カートは日本での出来事が、自身の音楽に多大な影響を与えたと感じている。日本で訪れた様々な土地や、当時に興味を持ち始めたジャズ、モスクワ・ラジオ放送から聞こえてくるものなど全てである。さらにはその地で弾き始めたギター、海兵隊員が持つ西洋人氣質、歌舞伎音楽に学んだこと、DJ経験、広島にある小さな町★で女性シンガーと部屋をシェアしていた日々聴いたラジオ番組。フォーク・ミュージックの持つ素朴さや素直な部分に惹かれたカートは、ウィスコンシン高校の最上学年でギターを始めた。その後、語学専攻でミネソタ大学に入学、ル・ズーでのライブも始める。

★—中学時代の2年間、彼は岩国に住んでいた

十代前半から音楽にのめり込んでいったカートは、多岐にわたる才能があり、それらは科学、語学、マンガ、絵画、振付けや演劇にまで及ぶ。「引越し続きであまり友達ができなかったから、多分こんな色んな事に興味を持ったんだと思うよ」

少年時代の孤独さゆえに何でも持ち合わせているカートは、音楽以外でもその能力を発揮する。極東で学んだ書道の筆遣いや水墨画の技術にも熟練し、さらにオリジナルのマンガ“Mungs”も創作。フランス語、スペイン語、ラテン語、日本語、ヒンドゥー語も身につけた。

20歳のシェリ・ホルムバーグと妹ドーティー 18歳はロサンゼルスに生まれ、ミネソタ、セント・ポール近くのホワイト・ベア・レイクに育つ。「よくタップダンスを踊っていたわ」とドーティー。「お呼びがなくても近所中にボランティアで、シェリと二人で歌うショーをしに出かけたわ」

その後しばらく二人で地方の教会で歌って、ミネソタ州ホワイト・ベアの人気者になり、慈善公演、昔からその地に住む人々の家、孤児院などの要望に応えるようになる。「ちょっと保守的な催しを求められてそこに出席くんだけど、何曲か教会合唱曲を歌ったら、ポップなのやフォークソングまで演っちゃうの。いつも気に入ってもらえたわ」

彼女らはロン・ニールソンに会う1962年8月まで、アカペラで歌っていた。高校タレント・コンテストで歌うシェリとドーティーのデュオが、アカペラでの出演を好まれなかったのが、彼女達の兄を通じて伴奏担当のロンに出会い、歌った事もない曲を3週間で練習し、見事にコンテストで1位を勝ち取った。「そのまま彼と一緒に練習を続けることにしたの。それまで何か物足りなかったから。ル・ズーでカートと出会うまでは、そのグループ、キーノーツでやってたの」

ゴールドブライアーズ最年少メンバーは、バンジョー担当17歳のロン・ニールソン。アイオワ州ダヴェンポート生まれ。「サンフランシスコからサンディエゴまでのカリフォルニア中あちこち」で育った。その後、家族はミネアポリスに越す。幼い頃には絵画と彫刻に興味を持ったが、後にドラムとビブラフォンを始め、ロックやジャズまで様々な音楽を演奏し始める。「ちょうど5弦バンジョーを弾き出したのが、フォーク・ミュージックに触れるきっかけ」と彼は話す。

ジェザベルは5番目の、そして少なくともゴールドブライアーズにとっては最も不可欠なメンバーで、マーシャル諸島からロンの父親によって運び込まれたマスコットの彫刻像。「とても魅惑的だったから」と名付け親のカート。グループをより豊かにする幸運をもたらし、謎めいていて、愛くるしい静かな魅力を醸し出す。

ギター担当のカートはアレンジをこなし、作曲もする。「僕の曲は多少、英国的なものやアパラチアン★のメロディに通じるものがあるけど、作曲やアレンジについてはジャズ、クラシック、ロック、さらに日本で学んだ歌舞伎音楽にも通じているんだ。ポイントは、フィーリングを高めるという点と、それぞれの曲における詞だね」

フォークの背景を知るのは大事だが、かと言ってフォーク純粋主義者になる必要はないとゴールドブライアーズのメンバー達は考えているようだ。「民族的な視点からも物事を学んだりはするけど、度を越えると時世や新しい音の感覚を失うからね」(バイオグラフィ終り)

(宣伝文の記述というものは必ずしも正確ではない。私達を例に挙げると、プロモではカートのスペルが、“C”から“K”に間違えられている。また、ロン・ニールソンはリード・ギターとバンジョー担当、カートはリズム・ギター担当が正しいところである)

1stアルバムのタイトルはシンプルに“The GoldeBriars”に決定。レコーディング場所のニューヨーク・コロムビア・スタジオは元々は古い教会で、その非常に高い天井は、美しく自然でアコースティックなゴールドブ라이어・サウンドを高めるのに一役を買ったことで、私達は、なぜコロムビアがこのビルを自社レコーディング・スタジオに選んだのかが分かりました。ジョニー・マティスやパーブラ・ストライザンドも、ここでレコーディングしました。歌う若い3人のメンバーは、壮大に響くそのサウンドの変化に驚きました。時々、自分達が大きなコーラス隊じゃないかと聴き違えるほどでしたが、さらにレコーディングでは、ボーカル・ラインをなぞるようにオーバーダビング★をしました。

★アパラチア地方—北ジョージアからはるか
ニューイングランドへいたる山岳地帯

★—重ね録り

STEREO/BN 26087



MONAURAL/LN 24087



“The GoldeBriars”

(1stアルバムの曲目)

“Railroad Boy”
“He Was a Friend of Mine”
“Come Walk Me Out”
“Alabama Bound”
“Pretty Girls & Rolling Stones”
“A Mumblin' Word”
“Old Time Religion”
“Long Time Travellin”
“Shenandoah”
“No More Auction Block”
“Sing Out Terry O'Day”

通常ほとんどのレコーディングというものは1日1曲のペースですが、「ゴールドブライアーズのレコーディングはとても早く進む」とコロムビアのプロデューサーが言いました。だから1stアルバムが発売される頃には、既に次のアルバム用の数曲もマスターテープ缶の中に収められていました。

★アーティスト&レパートリー——誰にどの曲を歌わせるかを吟味し当てがう仕事

急報——近頃ロンが思い出させてくれた事で、1stアルバムの全てのレコーディングが終わると、A&R★担当エピック・プロデューサー、ボブ・モーガンが私達を彼のオフィスへ呼び、違う2種類のバージョンのレコーディングを聴かせました。1)歌のオーバーダブ無しの鮮明で純粋なサウンド、と、2)歌のオーバーダブありの天使のようなコーラス・サウンド。ボブ・モーガンはどちらがゴールドブライアーズ最初のアルバムのサウンドとして相応しいか、カートに判断を求め、最終的に彼は後者を選びました。グループの競争心と、当時のフォーク・サウンドとの差別化を図り、グループがより際立つための判断でした。私達のサウンドが、いかにしてマスタリング★作業を通じて確立されたかを示す瞬間でした。

★マスタリングレコーディングにおける音の最終処理

ニューヨークでのレコーディングに向けて旅立つその前に、グループがステージで歌う衣装のイメージを決める必要があり、皆で髪を黒く染めました。

シェリと私のヘアースタイルは、ゴールドブライアーズがミネアポリス、デイトン・デパートでのセブンティーン・モデル・ショーで演奏した当時に出会った、とても有名なモデル達に影響されたものでした。彼女らのシンプルで洗練されたヘアースタイルに憧れ、みずばらしい髪形を捨てて、彼女達のように素敵に見えるように努力しました。洗練さを打ち出すため、カートとロンは黒いブーツを履き、全員で黒のタートルネックを着ることにしました。

エピックは、ゴールドブライアーズが“新しいフォークの顔”になれると踏んでいました。何故なら1stアルバムが64年2月に発売された当時、既に“ビートルズ”が最初の訪米を果たし、彼らのアメリカ侵攻が始まっていた時期だったからです。ビートルズは好きだったけれど、当時その人気のせいで、ほんの少しのアーティストの新譜しか注目されなかったことが残念でした。しかもビートルズは黒のイメージ——黒服、黒いブーツ、さらにカートとロンにそっくりの黒髪。当時のニューヨークにおいて、私達はまるでビートルズの誤解の受け皿のような存在になってしまっていたのです。……がっかり!!

ゴールドブライアーズの1stアルバムは、他の新人グループよりはたくさん売れたけれども、エピック側の期待に完全には応えられませんでした。しかしながら幸運にも、1stシングル“Shenandoah” / “Pretty Girls”が、キャッシュ・ボックス誌の月間イチオシ曲に選ばれました。“Shenandoah”はアメリカの5大都市でビッグ・ヒットとなり、セントルイス州とミズーリ州のポップなラジオ局では、ビートルズの“I Want to Hold Your Hand”を抜いて1ヶ月間1位をキープしました。

ゴールドブライアーズは、フォーク・ファンのためのABCのテレビ番組“フーテナニー・ショー”の、テネシー州ノックスビルでの収録の出演依頼を受けました。初めての全国放送にメンバー全員の足は緊張で震えましたが、その経験の良きも悪きも楽しむことができました。私達が好きな“Saro Jane”を演奏できるのは嬉しかったけど、タイトな収録時間や、いつものゴールドブライアーズらしいボーカル・アレンジでの演奏ができなかった事などベストな状況とは言えず、演奏は華々しく映りませんでした……どんな場においても、私達のサウンドに妥協を許すべきじゃなかった!

その時私達は、ゴールドブライアーズに何が起ころうとしていたのかハッキリと分かりました……実はそのショーのプロデューサーはフーテナニー・ショーに出演したグループ全てを管理し、偉そうな態度で出演者全員を扱っていました……出演料についても同様でした。

Hootenanny Show in Full Rehearsal

By KAYE FRANKLIN VEAL

Shortly after dawn today, a fascinating array of lights and cameras began turning an arena on the U-T campus into the magic world of a television stage.

By mid-morning, music filled the air completely.

All the action stemmed from crews of the ABC television network and various performers getting ready for the two “Hootenanny” shows that will be filmed at U-T tomorrow and Wednesday.

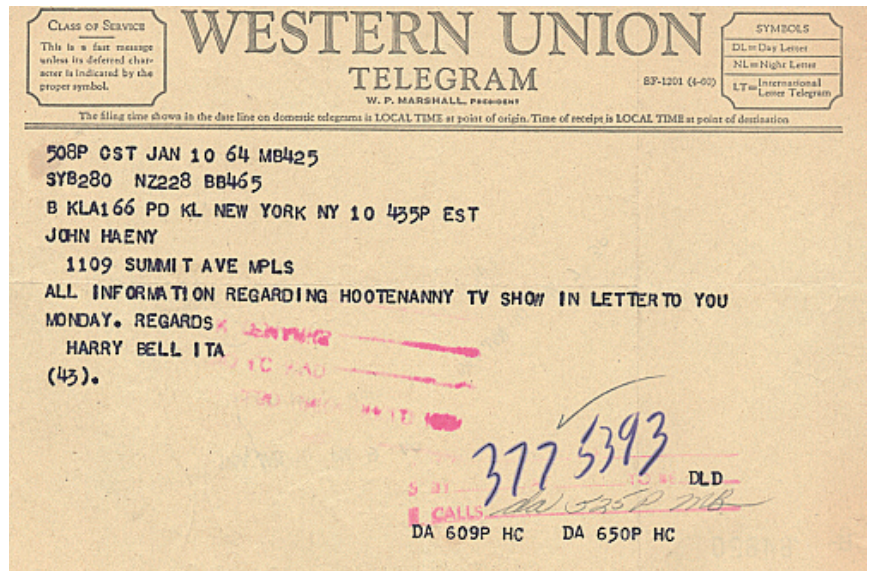
Guitars Heard

Throughout the arena of the C. E. Brehm Animal Science Building flowed the strains of guitars tuning up for rehearsals. From here and there came sounds of a few banjos. A bass player thumped away and a drummer rapped a multitude of sounds from his hides.

The crew was in a frenzy of activity, with lights being adjusted, cameras focused, cords strung about, and performers waiting around for their turn to rehearse.



FOLK-SINGING FOUR — This quartet, known as the GoldeBriars, strike out on the chords of one of the songs they will sing on camera for the U-T



この時点でジョン・ハーニーが、仲違いのため私達のマネージャーを降りていました。ジョンが管理していたゴールドブライアーズの財務をめぐって、カートと彼との間に利害の対立があり、ジョンが抜けることについては、互いに話し合った結果だったとカートは述べました。私はこれらの事実関係をひとつも確認しませんでした。彼は突然いなくなったのです。私自身ゴールドブライアーになりきるのに精一杯で、仕事や金銭的な事について質問するどころではありませんでした。ただ私に言えるのは、今ふり返ればジョン・ハーニーとデヴィッド・ハースクこそが、ゴールドブライアーズのコロムビアとの契約を手助けしてくれた人物だということです。カートが手を下した原因である、ジョンによるゴールドブライアーズの財務状況が一体どんなだったのか、私には分かりません。コロムビア契約下のグループへの前払い金や、ジョンと組んでからの全ブッキングから派生したお金やらについて、カートは私達とジョンとの直接的な橋渡し役でした。

フーテナニー・フィルムの収録日は1964年1月21日で、共演グループは、カンバーランド・トリオ The Cumberland Trio (ノックルビル市テネシー大学のタレント)、ビル・モンロー&ザ・ブルー・グラス・ボーイズ Bill Monroe & The Blue Grass Boys、ホーマー&ジェスロ Homer & Jethro、ドク・ワトソン Doc Watson、ジーゼンズロウ・ブラザーズ(・コミックス)&ジョアン・トリヴァー(声の大きなバラード歌手) The Geezenslaw Brothers (comics) and Joan Toliver、ピート・ファウンテン&セレンディピティ・シンガーズ Pete Fountain & Serendipity Singers でした。

(ABCフーテナニー・ショーは、63年4月～64年9月まで放映された番組で、米国の様々な大学にて収録された。1964年、ABCはフーテナニーを打ち切り、新しい音楽番組“シャインディグ!”をスタート)

もしゴールドブライアーズに優れたマネージャーがいてくれたなら、私達のイメージとそのサウンド・スタイルを守り、プロデューサーに全ての主導権を奪われなくて済んでいたかも知れません。

番組テーマ曲、フーテナニー・サタデー・ナイト・ソングの歌詞も、私達全員が放映前に覚えておくべきだったのでしょう。



1964年1月21日フーテナニー・ショーのテーマ曲を合歌（ゴールドブライアーズは下段中央）

急報——時は過ぎて1990年初頭、カート・ベッチャーのバイオグラファーとして知られるドーン・イーデンより、1964年1月のフーテナニー・ショー出演時のゴールドブライアーズの映像がシェリと私に寄贈されました。番組収録当時は現代とは違って、TV番組を録画できる便利なビデオカメラが無い時代だったので、その貴重なフィルムがまだ残っていたこと、さらにそれを誰かがドーンに手渡していたということに驚きました。（画像は少し荒れざみですが、音声はしっかりしています） 私がこれを見て1つ言っておきたいのは、昔の白黒TV放送では誰もが5kgほど太って見えるということで、普段からエスキモーの赤ちゃんみたいにまん丸ほっぺの私を、このフィルムで皆さんに5kg増で観られたら……実際は肥満じゃなかったのに、紹介でズームインされた私って180kg近くあるように見えるじゃないの!!!

さらに急報——2003年、ゴールドブライアーズ・ファンからのEメールのお陰で、カンバーランド・トリオのメンバー、ジェリ・ハスキューの所在が明らかになりました。フーテナニー収録時、カンバーランド・トリオはゴールドブライアーズと一緒にいて、とても親しくしてくれました。ジェリ・ハスキューはこの本のために、フーテナニーの写真を提供してくれました。ところで、最近カンバーランド・トリオは再結成して、2001年9月9日テネシー州ノックスビルのピジュー・シアトル・センターでコンサートを行いました。その模様はこちらで見ることができます。 www.cumberlandtrio.com



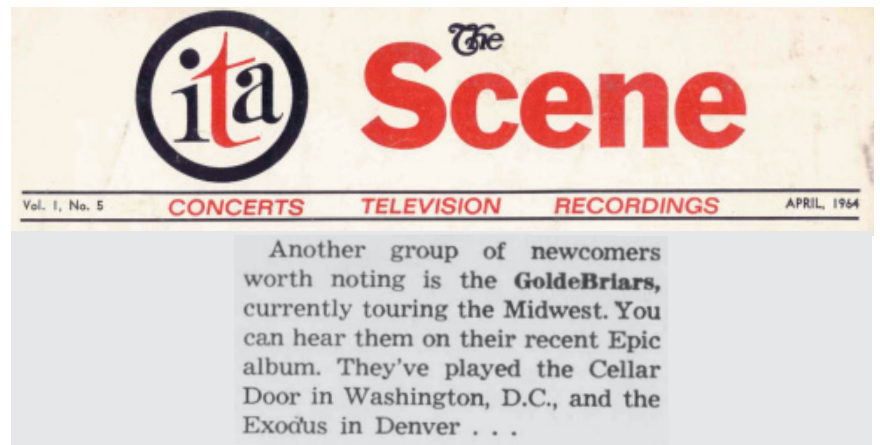
カンバーランド・トリオ 1964年1月21日 ABCフーテナニー・ショー

(左から、ジム・シャプトリン Jim Shuptrine、ジェリ・ハスキュー Jerre Haskew、アンディ・ガーヴェリック Andy Garverick、トム・キルパトリック Tom Kilpatrick)

最初のニューヨーク滞在中、ゴールドブライアーズは大手ブッキング事務所ITAと契約しました。初めて新しい事務所の幹部に会った時、慣れない世界に触れた私は、まるで映画でも観ているような感覚を覚えました。葉巻を持った賢そうなスーツ姿の人が威厳を持って歩く姿を見る度に、「彼らは生身の人間じゃなくて映画の中の人かも……」と思えました。

決して忘れられない思い出があります。事務所の社長がシェリと私に近づいて、それと知っていてふざけながら「おっ、君達は姉妹かい?」って訊いたので、私達もそのおふざけに応えて「いえ、兄弟よ」と返すと、彼は笑みを浮かべて葉巻に火を点けたのでした。

もう1つお伝えするべき新人は、現在中西部をツアー中のゴールドブライアーズに他ならない。そのサウンドはエピックから出たアルバムで聴ける。彼らはワシントンD.C.のセラー・ドアー、デンバーのエキソダスを回ったところだ……



ニューヨークに行った当初、私はそれまでスター達について気にしたこともなかったので、誰一人スターの名を知りませんでした。ただ3、4歳の頃から人前で歌ったりするのが好きだっただけ。もし、あるがままに振る舞う私が、何の仕事で有名なのかすら知らないスターを紹介されたとしても、たぶん微笑んで普通に挨拶を交わし、そのまま、その場を立ち去ったでしょう……私のそんな状況を見て、戸惑った人がいたかも知れません。

思いのほか、事務所は急速に仕事のブッキングを始めました。ブッキング事務所があるのはいいけれど、まだプロらしいステージ・アクトができないグループには不向きでした。そして残念ながらゴールドブライアーズはそんなグループの1つでした。レパートリーはたくさんあったけれど、ステージでのトークは全てアドリブでやっていました。ステージではメンバーそれぞれがバラバラの態度だったので、たまに観客は呆然として、何がどうなっているのかわからないといった感じの夜もありました。

ステージでは、こなれたアドリブ風トークを繰り返すようなことはしていませんでした。事務所のセティングにより、ゴールドブライアーズはただ単に、客寄せのおとりとして、新人発掘の場で知られたとても有名なニューヨーク・ブルー・エンジェル・クラブへと駆り出され、当時ヒット曲“Tie Me Kangaroo Down”を歌っていたロルフ・ハリス(同じくエピック所属)のゲストとして出演しました。いくら演奏慣れしたゴールドブライアーズでも、ステージ上でのギクシャクした立ち振舞いまではとてもカバーできませんでした……ゴールドブライアーズをショービズ界の常識に当てはめて見ようとする人々に対して、居心地悪く感じている私達に、どうやって彼らを気分良くさせることができた

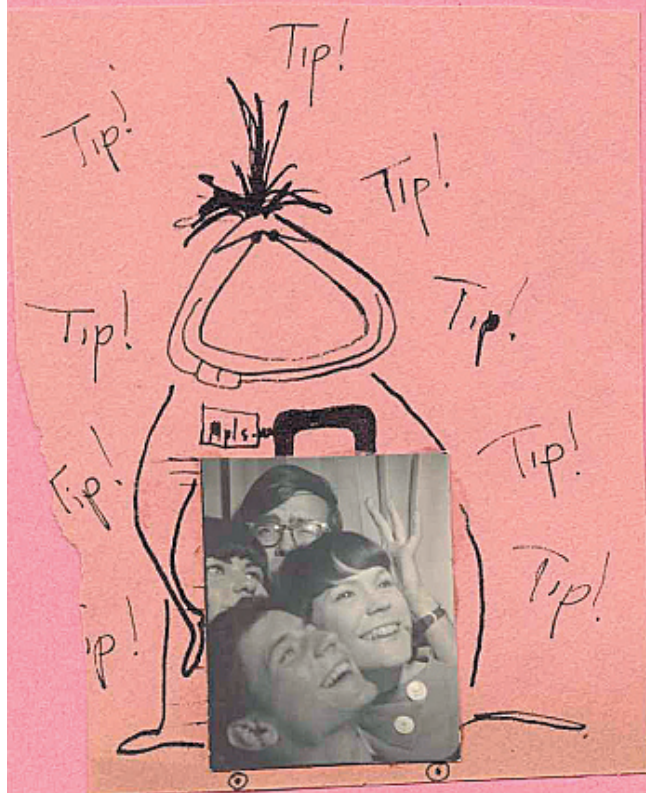
でしょう。そのショーでシェリと私は、イメージ戦略のため高いヒールの靴を履いていたので、ステージ上を堂々とは歩けませんでした……バランスを取れずに震える姉妹の4本の足が、あなたにも容易に目に浮かぶでしょう。ロンは曲名を二度も紹介しそうになって怖気づき、マイクに向かってぶつぶつ、「僕って緊張してるのかな」と言ってしまったので、観客にまで、そのぶざまな現実を晒してしまいました……そしてカートは「僕らにステージ・アクトがしっかり身についていれば」という思いで懸命にショーを進めました。演奏中の恍惚が立ち切られ、ステージを下りる時、まだ私は別世界にいるようで相変わらず足は震え、数箇所ある出口に向かって間違った方向を彷徨い、壁をよじ登ろうとして……こう叫びました。「どうやってここから出るの?」……人を本当に一晩中思い出し笑いさせた初めての経験、それがその晩のぶざまなステージ・アクト。そしてこんな風に言われたかも知れません。「それでも……ショウビズなの??」

引用——(ゴールドブライアーズ・スクラップブックより)

「全部が全部、ニューヨークはまるで「気体」、違う面が見てみたい」

NEW YORK! NEW YORK!





フォトブースでの私達の写真とカートのマンガ



★—ジェームス・ヘンドリックス James Hendrics、ティム・ローズ Tim Rose、キャス・エリオット Cass Elliot から成るグループで、後にマグワンプス The Mugwumps [ザル・ヤノフスキー Zal Yanovsky、ジェームス・ヘンドリックス、キャス・エリオット、デニー・ドハティ Denny Doherty] へと発展する。さらに2つのグループへと分岐し“ママス&パパス”(ジョン・フィリップス John Phillips、デニー・ドハティ、キャス・エリオット、ミッシェル・フィリップス Michelle Phillips)と“ラヴィン・スプーンフル”(ザル・ヤノフスキー、スティーヴ・ブーン Steve Boone、ジョー・バター Joe Butler、ジョン・セバスチャン John Sebastian)へと発展する。ゴールドブライアーズはステージの合間や、その日の最終プログラム終了後にはシャドウズ・クラブへと走り、彼らとジャム・セッションするのでした。

……そしてステージ・アクトが下手なゴールドブライアーズは、イリノイ州ノウ・ウェア・クラブ Know Where Clubとかニューヨーク、ワシントンD.C.の幾つかのクラブの仕事にかかり、完璧な演奏とステージ・アクトの組立てに励みました。演奏に訪れたワシントンD.C.のフォーク・クラブ、セラー・ドアでは、私達の未来に通じる人脈を紹介されることになります。その人達とは、“We’ll Sing in the Sunshine”で知られるゲイル・ガーネット Gale Garnett と、彼女のベース・プレーヤー、キース・オルセン Keith Olsen です。通りを下った所にあるクラブ、シャドウズでは、“モダン・フォーク・カルテット”、“ビッグ・スリー★”、ジュディ・ヘンスク Judy Henske に出会います。

急報——ボールルーム Ballroom (60年代後半の、カートのソフトロック・グループ)のアルバムのライナーノーツで、カートがゴールドブライアーズのサウンドについて、ママス&パパスを引き合いに出しています。「僕ら(ゴールドブライアーズ)は、ママス&パパス・サウンドのきっかけになってるんだ。ジョン・フィリップス、キャス・エリオット、ザリー(ヤノフスキー)は、絶大なる僕らのファンで、両グループが同じ町で演奏する時はお互いのショーを観賞し合ってたよ。(当時キャスとザルはマグワンプス在籍)——彼らはいつも僕らをステージに上げて一緒に歌ってた。彼らがママス&パパスになって、ゴールドブライアーズと同じ様なハーモニーでやってて、とても興味深かったよ」

一貫してずっと同じ仲間と競争し歩み続けると、多様なショービズの世界さえ、とても狭く感じるかも知れない。



フーテナニーのTV放送を含む東部での活躍の後、イリノイ州ジョリエットの昨晚ノウ・ウェアのステージ。今週彼らの新しいアルバムが発売される。このとても現代的なグループのノウ・ウェアでのステージは、日曜日で閉幕する。



at the
shadows
MODERN
FOLK
QUARTET
**JUDY
HENSKE**
3125 M St. Georgetown
337-9714

Late Shows: Fri. and Sat. 12:15

Now Appearing

The GOLDBRIARS
plus
Folk Comic MIKE BORAN

34th & M, Georgetown — Reservations 337-3390
Dick Cerri's hootenany — 7:00 Sunday

ゴールドブライアーズ初の、クラブでの演奏は大ウケではありませんでしたが、私達のちょっと変わったレコードを売るために、ユニークなステージ・アクトで聴衆にアピールする必要があると気づきました。不慣れなステージ・アクト対策に、マネージャーであるバート・ブロックは私達を育てる立場にありながら、なかなかその重い腰を上げようとはしませんでした。そこでゴールドブライアーズは、直ちにボブ・ゴールドスタイン Bob Goldstein (ヒット曲“ワシントン広場の夜はふけて”の共作者)との契約にサインし、MCを含むステージ監修を彼に任せることにしました。



Bob Goldstein

彼はゴールドブライアーズ・サウンドとメンバー個々の性格を把握した上でステージ・アクトを組み立て、特製の彼の曲とグループ自作のポップ・ソングとで、私達のステージを輝かせました。ボブとの初仕事は、フロリダ州のマイアミとココア両ビーチでの公演に始まりました。世界的なバカンス地として有名なフロリダに行くことで、全員の気分が盛り上がっていました……グループが抱える悩みを1つ解決できた事で、ちょっとした休暇を兼ねたワーク・スケジュールになっていたからです。しかしフロリダ公演に向かう1週間前、支払いも終わってない2台目の^{ゴールドブライアーズ}G・B・カー、63年式プリマス・ステーション・ワゴン^{ゴールドブライアーズ}を友人が壊してしまったのです！ だから少ない予算にちょっと上乗せして、飛行機でフロリダへと向いました。

マイアミに到着し飛行機を下りる時、ジェザベルの足が私達の目の前にボロリと落ちました……迷信が事件に結びつく悪い前兆じゃないかと、私達は心配でした。

フロリダの自然を^{いけい}畏敬し、それを満喫して、シェリは摘み取ったサボテンの花をくくん嗅いでリフレッシュし、終いにはその花を顔一面に貼りつけてしまいました。

初めて見たあの海の景色を私は決して忘れない！ ただ立ち尽して、じっと見続けていました。果てしなく続く、あんな大きな一面の水を見たことがなかったからです。ミネソタ州だって一万の湖を持つ大地と呼ばれているのに、ここフロリダ州でもたくさんの湖が見渡せるなんて。カートとロンは魚みたいにはしゃいで、シェリと私を波跳びに誘いました。楽しいけれど海水が目にしみるので、私はすぐに岸へ戻りました。ビーチタオルの所まで辿り着き、体を拭く前にタオルの砂を振り落としていると、水辺からシェリが荒れ狂ったバウファローの様に突進して来て叫びました。「振り落とした貝殻はどこ？ ……コンタ

クト・レンズを置いていたのに!」 砂に埋もれてしまったコンタクト・レンズを
シェリが諦めた後、私は彼女がレンズ・ケースを忘れて来てしまったことを知
りました。それでシェリとカートの思いつきで、開いた貝殻にコンタクト・レ
ンズを1つずつ入れておいたということだったのです。

★—セカンド・アルバムのジャケット写真P.59
参照

フロリダ公演の終わりには、ゴールドブライアーズの衣装が3ピースにグ
レードアップされました。女性メンバーは、よりモッズ・スタイルに近いイ
メージになりました。床まである丈のスカートに黒のタートルネックが1つ目
のセット、もう1つはチュニック(袖の短い上着)と黒いレオタードにベレー
帽。男性メンバーの衣装はそれとは全く違って、黒いスラックス、黒と別の色
のブーツ、黒のタートルネックの上に、ちょっと変わったチュニック姿(ミ
ネソタの仕事着ワイシャツから作られる……シャツの袖と襟を切り、縁を縫っ
て、別々のアースカラー★に染め上げたもの)。たくさんのステージング・イメ
ージもまた、多才なカートによって創造されました。

私達で、とれてしまったジェザベルの足をくっ付けて治してあげました。ス
テージ・ディレクターのボブは「何て不可思議なサーカス団に加わってしまった
んだろう」って様子。マイアミでは、プール付きのリッツィー・モーターに泊ま
り、全員の部屋にTVとエアコンが備え付けてありました。シェリと私は、バ
スルームにあるビデの水を、すんでのところで飲んでしまうところでした……
ちょっと恥かしい話だけど、ビデの使い方はカートに教わりました。

ショーの前の晩にはいつも、男性メンバーが私達に、彼らの衣装をアイロン
するようにせつきます。彼らがアイロンがけできないことを、この時に知り
ました。女性って、化粧と髪結いに時間が掛かってしまうものだから、さらに
アイロンがけをするととなると、それはもう大急ぎです。旅行用アイロンを携帯
してたけど、モーターではいつもアイロン台探しに苦労しました。そんなわけ
で、天井以外ならどこでもアイロン台に使っていたので、どこかにアイロンを
置き忘れて、しょっちゅう足にヤケドをしていました。

ボブがゴールドブライアーズのリハーサル・スケジュールを毎日しっかりと
組んでくれたので、ステージ・アクトの流れがきちんと出来上がっていきまし
た。でも、スケジュールをこなした頃、私は体調を崩してしまいました。
米の日々以来のアンバランスな食事で、とうとう健康が維持できなくなっ
てしまったのです。ある晩のショーが終わると、私にどっと体調不良が襲い掛
かり、何の予兆も無しに涙が溢れ出て止まらなくなってしまいました。そして
次の日、医者に診てもらったところ、貧血だと判りました。(血中の鉄分不足)

きっと、ゴールドブライアーズ結成以降の食事習慣が余りにも貧しすぎたの
でしょう。お金が入って、たまにいい食事をしたとしても、おかずを色々注文
していながら、結局は本当に肉体が望んでいた肉や鉄分を摂っていなかったよ
うです。

ショービズ界では誰も病気だなんてことは公表しないものだ、と全員が悟り、
熱きゴールドブ라이어として毎晩ファンの前に現れる決心をすると、私は肝
臓に栄養分の注射を受け、サプリメントを続け、もっとしっかり休みを取るよ
うに努めました。

靴ポート物語



「冒険的で風変わりなプロモーションは、タレント達に地団太を踏ませ、観客達を待たせ続ける……とにかく、これから物語が始まります。マイアミの晴れやかな……(待たせてごめんなさい、今さっきトイレの水が溢れちゃった)或る日の出来事」

★Huntley-Brinkley Report—
1956～70年、NBC局の看板ニュース番組

かつてゴールドブライアーズは果敢に、自由奔放なプロモーション活動に喜び勇んで挑みました。どんな風にそれを切り抜けたのか、“靴ポート物語”はそんな物語です……

眩しい晴れの日、とあるゴミ貨物船は綺麗に片付けられ、そこに靴ブランド、トム・マッキャンの輝かしいブランド・ネームがプリントされた巨大な旗が掲げられました……新しい交通機関の発達によって。そう、このような形態で行われるショーには妙な事件が付き物、そしてここがゴールドブライアーズのステージとなる場所なのでした……

トム・マッキャンの靴のプロモーター達がこのアイデアを持ちかけ、マイアミ・ビーチからローダーデイル・ビーチ帯を周る“靴ポート”に、彼らのプロモート隊と、私達の専属ライター・ボブと一緒に搭乗して、プロモーション活動が行われました。海岸で遊ぶ人々はゴールドブライアーズの歌を聴けるという仕組みなのですが、幾つかの靴店が宣伝に雇ったタレント達(私達に便乗して自分達への注目を集めようとしている!)も、靴ポートに同乗していました。

ゴールドブライアーズは、カメラ・スタッフによって海岸からフィルム撮影される事を承諾しました。彼らは私達の往航をフィルムに収め、ハントリー・プリンクリー★のようなニュース・シリーズとしてTV放映する予定でした。私達とトム・マッキャン側との口約束で、TVニュース及び船上のゴールドブライアーズをクローズアップした映像のオンエアが決められていました。

フロリダ第1週目の私達は、照りつける太陽の下で一瞬だけ陽に当たると、エビがピュッと動いたように後ずさりして、日なたを避けるため全員が長ズボン・長袖シャツ・帽子という姿になりました。全員で日除け対策を考えつつもでしたが、シェリと私はサンダルを履いていたということをすっかり忘れていて、裸足の状態でも何か履いているような靴紐の日焼け跡が、くっきりと二人の足に残ってしまいました。

私達は、船には熱心な靴のプロモーター達しか乗っていないという事に気付きました。灼熱の太陽、十分な酒、置かれた食べ物、月だけが描かれた何の表示も無いドア、忘れられたゴールドブライアーズの旗、悪い音響システム、口パクで演奏される(グループ持参の)ゴールドブライアーズのLPに客達が触れぬようガードすらされてないレコードプレーヤー、そして吹きつける海風によって起こるトラブル……レコード針がLPの音溝から外れてしまっ、リハーサルもショーもめちゃくちゃでした。たった1曲を完奏するにも格闘を続け、私達はまるで走り回るネズミみたいな有り様でした。

全3時間の航行のうち2時間が過ぎた頃、トイレの必要を感じたシェリと私は、海岸から小さなボートを出してもらおうと、パーティー・タイムでほろ酔いの靴プロモーター達に無線連絡を要求し、そのついでに岸からお菓子を持ち込むことができました。小さなボートで靴ポートへと帰る時、シェリと私は靴ポート上で起こった困った出来事を思い出して、ウケまくっていました。

皆を乗せた靴ポートが目的地へと近づくにつれ、ゴールドブライアーズは船の周りでちゃぶちゃぶ戯れる心地よい波の音に合わせて、船の真ん中で船乗りの歌を歌い始め、楽器と体を徐々に押し合うようにして、しばらく熱い演奏を続けました。

航行が終わる頃、浜辺で遊ぶ人達がこちらに手を振るのが見えたので、再びスピーカーの電源を入れて音を鳴らし、心から歌を歌っている風に微笑みかけましたが、強すぎる海風に波が荒れて、レコードが吹き飛んでしまいました……

こうなったらまず何を救い出すべきなのか——レコードか、楽器か、はたまた自分達自身か……浜辺で遊ぶ人達は、靴ポートが岸へ近寄って彼らの安全を脅かすのを恐れ、船に向かって旗を振り続けていました。この元ゴミ貨物船は、バンケーキを投げ合った後のように荒れ放題! 大きな音を出すのが違法行為だったために、酔っぱらった靴プロモーター達は沿岸警備隊からスピーカーを止めるよう指示されたので、その音楽製作に関わったゴールドブライアーズ専属ライター・ボブ・ゴールドスタインはついに、彼らのための曲を今後書くことができなくなってしまったと思いました。そして、その演奏者ゴールドブライアーズは歴史から確実に抹消される? ……助けて～!!……

結局このフィルムは、ボブのアパートでホームパーティーする時にだけ、ひっそりと放映される寂しいニュース番組になりました。……左右の靴がまともに揃った状態で家に帰ることさえできなかった、荒れ放題の旅でした。 おしまい

こうしてマイアミでの演奏を終え、もっとマイペースで進んで行けるように、私達のエネルギーを蓄える地となるココアビーチへと向かうのでした。靴ボートのショーでは短期間のリハーサルで声を傷めてしまい、結局振り返れば、美味しい料理と休暇以外に何が得られたのか分からないような旅でした。使いすぎたのどの傷み……検査に行ったところ、全員が春の花粉症とウィルスにやられていることが判り、余計に病んだ気分でした。よって演奏旅行のフィナーレではアンコールはおろか、ショーの早期キャンセル以外に何も得られませんでした。健康を取り戻すまで、私達は3週間仕事から離れました。“靴ボート物語”はココアビーチで語りぐさになり、私達はフロリダを後にしました。(そして眩きました。「ああ、ジェザベル、何てジnkスを運んでくれたのよ!」) 病が去ると、次のプロジェクトである新しいアルバムのレコーディングへと移りました。

The GoldeBriars' Story
“Whatever Happened to Jezebel?”
The GoldeBriars' Epic Years
ジェザベルに何があったの…?

CHAPTER
5
“STRAIGHT AHEAD!”
真っ直ぐ前に!

STRAIGHT AHEAD! THE GOLDEBRIARS

Sea of Tears
MacDougal Street
I've Got to Love Somebody
Jump Down
Sweet Potatoes
Haiku
No More Bomb
Queen of Sheba
Joy, Joy, Joy
Castle on the Corner
Zum Gale Gale
Ride That Chariot



“Straight Ahead!”

(2ndアルバムの曲目)

“Sea of Tears”
“MacDougal Street”
“I’ve Got to Love Somebody”
“Jump Down”
“Sweet Potatoes”
“Haiku”
“No More Bomb”
“Queen of Sheba”
“Joy, Joy, Joy”
“Castle on the Corner”
“Zum Gale Gale”

64年6月の時点でフォーク・ブームは廃れかけていたので、サウンドは2ndアルバム“Straight Ahead!”に向けてポップ・フォーク・ロック路線へと進化を遂げます。



2ndアルバムのアーティスト写真より(長い月日に写真が傷んでいます)

ビートルズを始め、誰も彼もゴールドブライアーズと同じ様な黒髪スタイルをした、イギリスからの色んなグループがアメリカン・チャートに進出してきたので、ゴールドブライアーズの2ndアルバムのジャケット写真は金髪でいこうと決めました。シェリの金髪はOKって感じだったけれど、私の金髪は違和感があって、ぎょっとしてしまいました! (鏡を覗くと知らない人が映ってる感じ、分かるでしょ?) カートとロンは私の金髪を見て、苦笑いで「ショービズだねえ!」なんて言うし。そんな感じで2ndアルバムのジャケット撮影の前日、もう使える予算に融通が利くわけでもないのに、メンバー全員で美容スクールに行きました。「仕上がり文句を言わない」という契約書にその場でサインさせられて、ますます不安になり、さらにその結果はと言えば、全員がしかめっ面という有り様だったのです。男性メンバー達の頭は、まるで髪が色褪せているみたいだし、シェリは金髪のせいで肌が青白く見えるし、私の髪は麦わら状態。私の髪をいじった美容師は、新しい技法を試したと言うのですが。ああ、フォトグラファーに顔を合わせて何て言ったらいいの! 家に着いたシェリと私は必死で髪の手入れをして、私は、たくさんの枝分かれした毛先を切りました。黒髪に染め直した男性メンバーは、二度と金髪にしようと思わなくなりました。翌日、アルバム写真が撮影され、2人の金髪と2人の黒髪、そして興味深く結果を見守るマスコットが写真に収まりました。

2ndアルバムのレコーディングが終わると、それにふさわしいサウンドが得られただけでなく、棒キャンディーのお楽しみがある宿泊先、クリストファー・ホテルを見つけることができました。使える予算内で宿泊地を考慮し、トラック運転手の滞在先のメッカなるこの場所で、私達は3ヶ月分部屋を予約をしました……なんとか持ち堪えている、といった様子の古いホテルです。

クリストファー・ホテルは、埃だらけで背高の菓子箱のようで、(クリストファー・)コロンプスの時代に建てられたみたいに古びていました。しゃがれ声のトラック運転手、別ホテル掛持ちの売春婦、そして極貧ゴールドブライアーズには、うってつけの場所でした。

ある日のホテルでの出来事、茶色く長い髭に裸足の絵描き老人が、大広間を挟んだ部屋のドアの向こうからこちらを覗き見ていたので、シェリと私は我を忘れて彼の様子を見ていました。あなた方の絵をお描きしましょう、というそのお爺さんからの申し出を断わるまで、私達二人はその景色を見続けました。

このホテルの看板は“H”の文字が欠落しているので、厳密に言うと“オテル”。オテルは、グリニッチ・ヴィレッジにある専属ライター、ボブのアパートの道を隔てた所にあり、そこには、一日一食生活のゴールドブライアーズにとってはご馳走の、棒キャンディーの販売機が設置されていました。少しの期間、私達はボブの部屋に寝泊りしていましたが、人数が多いのと所有物が邪魔になることから向かいのホテルに引っ越しをした、というわけです……とにかく、プライバシーもそれぞれ必要だったってこと。引っ越しによって、彼と一緒にやる毎日のリハーサルが始まっても、両者の時間を確保できていたお陰で、随分と健康的な関係が保てました。私達が越して来たばかりの頃の彼のアパートは、ただの長い大広間のような状態でしたが、時が経つにつれ、部屋は彼独特の持ち味で、すっかりコレクター・アイテムだらけのユニークな装いとなり、当然のことながら、そこは正に彼の才能表現の場と化していきました。

ニューヨークに着く前から比べると4〜5キロも痩せて、か細くなってしまったシェリ、出発時は私より重かったのに可哀相……せめて棒キャンディーをと、たくさん食べました。ロンの好みは、ピーナッツバターとジャム入りでした。

2ndアルバム“Straight Ahead”は、1stアルバムのフォーク・ポップ路線ほどシンプルな作りには留まりませんでした。よりたくさんの助っ人、楽器、アイデアが入り交じっています。参加ミュージシャン達のお陰で、ヴィブラフォン、ハーブシコード、チューバ、ドラムスといった楽器が加えられました。ティンパニのチューニング作業が、あんなに複雑だったなんて初めて知りました。

専属ライターが予めレコーディングまでに友達を紹介してくれました。“Candy Man”、“Lollipop”、“Judy’s Turn To Cry”を書いたベヴァリー・ロス Beverly Ross です。彼女はゴールドブライアーズのサウンドを気に入り、私達もとても彼女のオリジナル曲を気に入ったので、彼女の曲“MacDougal Street”(少年と少女がグリニッチ・ヴィレッジで出逢う歌)を2ndアルバム用にレコーディングしました。カートがソロで歌う曲は、これ以外にも、日本の俳句に影響を受けたスタイルの彼のオリジナル・ラブソング、“Haiku”という曲があります。

以下は、2ndアルバムの裏ジャケットにボブ・ゴールドスタインが記したアルバム紹介文です。

引用——ゴールドブライアーズ The GoldeBriars (“e”をお忘れなく)は、ジュディ・ガーランド、アンドリュース・シスターズ、ボブ・ディラン、そしてスコッチ・テープで知られるミネソタで結成された。待てよ! それでは十分に説明できていない。彼らの結成は、メッカやカスバでもあり得た筈だ。でも、もし彼らの故郷が退屈なハリウッドや冴えないニューヨークのような所だったら、この結成はあり得なかっただろう。グループの公正なるスポークスマン、カート・ベッチャーが故郷の環境について語る。「とても熱い場所さ。信じられるかい? ミネアポリス周辺には凄いシンガーが何人もいて、小さなクラブやコーヒーハウスで競演するんだ」

★一メジャーなブロードウェイに対し、タイムズスクエア周辺で実験的なショーを展開するオフ・ブロードウェイがある

引用——このアルバムの曲の素材はオフ・ブロードウェイ★・ショーからポップ・ミュージック、R&B、古いフォークソングにまで及ぶ。カート曰く、「僕らが曲を取り上げると、それらはたちまち“ゴールドブライアーズ”のサウンドになる。あるプレイヤーが曲の素材を台無しにしてピアノの鍵盤を叩いていたとしたら、そういう人の演奏って、きっと僕らが弾くコードとは違うし、選ぶビートも違ってね」

引用——ここからは少し、ジェザベルについて語っておこう。彼女はいつも彼らの傍にいて、背丈は彼らの足の半分、マーシャル・アイランドからやって来た肥沃^{ひよく}の女神だ。話題にされるのが大好きで、実際、彼女のゆったりとしたお腹はその満足感で脹らんでいるらしい。何でも最近のゴールドブライアーズに起こった災難の類いは彼女のせいらしく、彼女に嫌な部分があるとすれば、それは自分に気を引くための、そのつまらない手段である。ジェザベルからの攻めを封じつつ、新しく二人のゴールドブライアーズ・メンバー(楽器)がこのアルバムに参加した。エルマー・エレファント・ベルが“Zum Gale Gale”のレコーディングで重要な役割を果たし、ウィニフレッド・タブラ・ドラムは“Queen of Sheba”で聴ける。

カートとロンは地下鉄での冒険が好きで、時間があるとよく乗っていました。カートがグリニッチ・ヴィレッジの骨董市で買い物した時のこと、彼が誰かへ贈り物として買った小さな陶器のカエルを皆に見せようと、ポケットに手を伸ばしたところ、誰かがそのカエルとの交換品として、彼のポケットに氷の袋を滑り込ませて、びっくりしたカートは慌ててポケットから氷を引っ張り出しました……何て不公平な取引きだこと!

そんな折、ニューヨークでの2ndアルバム・レコーディングが終わり、シェリがグループを離れる決心をしました。私を守ってくれる人がいなくなってしまった! 当時は、精力的なスケジュールのせいでシェリが精神的に参ってしまったんだと思っていて、彼女が初恋のカートに拒絶されたという事実、私は気が付きませんでした。

ゴールドブライアーズがミネソタからニューヨークへと旅立つ頃、まだ18歳の私には、知り合って数ヶ月の婚約者がいました。彼はとてもいい人でしたが、旅が始まってミネソタ以外の生活を知るにつれ、まだまだ自分が人生について学び足りないということに気が付きました。まだ結婚というものがよく分かっていなかったのです。その後、ワシントンD.C.のパーティーでジョン・マニーメイカーという印象的な名前の青年に出会った時、早過ぎた婚約を解消しました。

初恋の終りや断絶は、とても心痛むことです。その後、身をもってそれを知ることになりました。ある無名のミュージカル・タレントの本性に気付くまで、私はずっと彼に悩まされ続けたのです。(水瓶座生まれの私にはいつも小さな自分の世界があり、なかなか他人の内面にまで気が及ばないのです)

たくさんの人が私に、彼には何人もの別のガールフレンドがいると警告しましたが、恋に落ちた私はそれに耳を貸さずにいました。そして、事実を知って打ちひしがれました。特に酷かった思い出は、カリフォルニアでのパーティーで彼と一緒にいた時のこと、傷心した私はお酒に酔ってモーターまで車を飛ばし、明かりも点けず部屋に入って壁の角っこにぶつかり、目に青アザを作ってしまったことでした……翌日にTV番組サム・リドル・ショーのライブ収録を控えていたのに! (医者は目のアザに何も手当てをしてくれなかったので、TV撮影には化粧を厚く塗ったり冷やしたりして対処しました)

こうしてシェリと私は、「成長は傷みを伴う」という教訓を得て、その傷みを分け合ったのでした。

(シェリは3か月間グループを抜けました)

一方、シェリに代わってキャシ・ウィーヴァー Cathi Weaver (ウィスコンシン、オークレア出身)がその代役を務めました。彼女は以前、ミネソタでカートとデュエットしていたので、カートがシェリの穴埋めにキャシを頼ったのです。幸運にも、彼女の金髪とシェリに似た声は、ゴールドブライアーズのイメージに合いました。ゴールドブライアーズ初めての映画撮影にもキャシはシェリの代役を務め、フィルムはフロリダ(再び!)のマイアミで撮られました。映画タイトルは“Once Upon a Coffee House”。ゴールドブライアーズが目立つような様々なシーンの出演企画とテーマ曲が、私達に与えられました。

急報——2002年にインターネット上で、マイク・デューゴ Mike Dugo による60年代アメリカン・ガレージ&サイケのフィルム・データベースが見つかり、彼は“Once Upon a Coffee House”にこんなコメントを載せていました。“Once Upon a Coffee House” 発行——フレッド・バーニー・プロダクションズ Fred Berney Productions 1965年製作、監督——シェパード・トロープ Shepard Traube、出演グループ——ゴールドブライアーズ、フリーウィーラーズ The Freewheelers。ハリウッド・スタッフがマイアミのコーヒーハウスのウェイトレス歌手をフィルムに収める。

“Once Upon a Coffee House”

Words & Music by Carl Yale

Chorus:

Hey diddle dumpkin pumpkin pie
Bluebirds sing buttermilk sky
Hey diddle dumpkin cat and mouse
Once upon a coffee house

Verse 1:

Once a little cat came to town
Saw the sights and looked around
He spied a shapely pretty little mouse
Followed her straight to the coffee house

Verse 2:

The mouse sang songs and played guitar
The cat, he watched her from afar.
Wishing there, with all his might
He were the guitar she held each night

Verse 3:

One night by chance she smiled at him
The strings of his heart went, Bim-Bam-Bim
He knew it was love, and me oh my,
You should have been there to see the fur fly

Verse 4:

Now if you go to the coffee house
You're sure to see this cat and mouse
Making the big love scene duet
Like Romeo and Juliet

“コーヒーハウスで”

カール・イェール 作詞・作曲

ほらほらごらんよ カボチャ・パイ
青い鳥はバターミルクの空を歌う
ほらほらごらんよ ニャンコとネズミ
コーヒーハウスの物語

ある時ニャンコが町に来た
辺りをぐるぐる見回して
かわいいネズミに忍び寄り
コーヒーハウスへ付けてった

ネズミがギターで歌うのを
ニャンコはこっそり見つめてた
ドキドキひとりで思ってる
ネズミのギターになりたいな

偶然ネズミが微笑んで
ニャンコのハートはピンバンピン
おやおやニャンコは恋してる
毛皮もすっ飛ば勢いさ

コーヒーハウスへ行ってみな
ニャンコとネズミが君達に
デュエットしながら歌い出す
彼らはロミオとジュリエット

映画出演は、ゴールドブライアーズの活動に栄光を与える出来事でした……
まあ、まとまりのない大忙しの撮影でしたが、カートは他の出演者が歌う曲の
アレンジに無償で協力するため奮闘し、私は喉にポリープまでつくって、映画
に使われもしない曲のために積極的に声で加勢しました……医療費はスタッ
フ持ちで！ 映画の一場で、私はアドリブで「じゃ、私がタンバリンを振るわ！」
と言うと、ウケたディレクターがそのセリフをクローズアップで撮り直したい
と言いました。でも、アドリブでやったのと同じように出来ると思う？ ……
もちろん、ダメでした。

カラー映画だったので、出演者は全員ステージ用に化粧を塗りたくられました。
それまで私は口紅を塗ったこともなく、TV用の紫色を塗られて、まるでワイ
ルドな20年代風の骨董品のようでした。ステージ化粧をしたカートとロンは、

まるでインディアンみたいでした。映画のテーマソングは、コーヒーハウスで恋に落ちるネコとネズミの物語……子守唄タイプの曲に、カートによるゴールドブライアーズのアレンジが施されると、素晴らしく特別な感じに仕上がりました。

何とか、私達にとって初めてのその音楽的な映画が完成し、ジョーン・リヴァース Joan Rivers とも知り合いになりました。映画が終わると、また少しお金について賢くなりました。合法的な形で将来に保証が付いたのです。それから1、2年後、ユナイテッド・アーティスト社がその映画を買い取って配給する予定だと、誰かがプレイボーイ誌で読んで教えてくれました……けれどこれが映画について最後に聞いた話。(今、とてもこの映画が観たくって。クラシック名画に成り得たかも知れないのに!)

★—アカデミー賞受賞者に贈る金色の像

急報——2004年3月……いくつかの“Once Upon a Coffee House”のデータベースをインターネット上で見つけ、さらに検索し続けると、その映画のプロデューサーであるフレッド・バーニーのEメール・アドレスを見つけました。その後すぐに連絡をとることができ、彼が映画“Once Upon a Coffee House”を所有しDVDに変換していた事も分かったのです。そして1週間の内に、そのDVDを入手することができたわけです。今、どうやってこの映画の感想を書こうかしら……当時の撮影の舞台裏を見ていただけて、これまでずっと、そのフィルムを見るチャンスがなかったけれど、本物の60年代のストーリーや配役の型にはまった演技を楽しんでいる自分の姿が、そこにあって……とてもコミカルでした。若き日のジョーン・リヴァース演ずる、コメディ・バンドの“ジム・ジェイク&ジョアン Jim, Jake & Joan”や、彼女のオスカー★・ブランド級の演技を観て、とても楽しむことができました。そして、エンディングのピザの投げ合いシーンは、とても信じられないほど愉快でした!

この映画は、キャシ・ウィーヴァーがゴールドブ라이어として活動した時期のものであり、私が彼女の写真を持っていないので、この本に掲載できなかったのです。この映画が彼女の姿を確認できる唯一の媒体なのです。映画の中で、ゴールドブライアーズが出て“Honey Bunny”(台本にピッタリの曲)を歌うシーンを観たとき、自分が金髪で歌っていた時期の思い出に引き戻され、すごく戸惑ってしまった! 他のシーンで、カートが数人のバックシンガーを背景に靈歌を歌い、その声の素晴らしいこと!

数ヶ月後、私達はキャシにゴールドブライアーズの持ち歌やステージングを教えるため、バージニア州マクレーンでカートの両親と一緒に生活することになりました。クラブでの出演のブッキングを心待ちにしていたのですが、ついにその話は来ませんでした。夏が終わると、私達は再加入の準備ができたシェリをミネソタまで迎えに行きました。シェリ復帰のタイミングでキャシは婚約し、フィアンセの元へと去りました……キャシにはゴールドブライアーズのジブシー生活が合わなかったみたい。

こんな風にして“初期の活動”が幕を閉じました。(63年1月~64年8月)

CD-Rom eBook

The GoldeBriars' Story
“Whatever Happened to Jezebel?”
The GoldeBriars' Epic Years
ジェザベルに何があったの…?

CHAPTER

6

“SIX-RING CIRCUS”

6人のサーカス団

第6章 “6人のサーカス団”

本編の日記の部分にはエンピツのアイコンを付してあります



1964年9月11日…金曜日——午前12時半(ゴールドブライアーズの新メンバー、トム・ドーホルト Tom Dorholt との最初のミーティング)

よし、再出発だ! ゴールドブライアーズのメンバーが増えました。ジェザベルの魔法の力を借りずに6人のメンバーになって、カート、シェリ、私はさらに結束を固めました。

音楽で成功するという野心の萎えてしまったロン・ニールソンは、ゴールドブライアーズを脱退してミネソタへ帰りました。その際ロンはカートに、ジェザベルはこのままグループと一緒に連れてっていいよ、と言いました。そうして私達はシェリを迎えにミネソタへと向かいました。サーカス団みたいな生活は、必ずしも皆にとって好ましいわけじゃなかったのね!

楽器を増やしてもっと革新的に進んでいこうと決め、ドラマーとベーシストを迎えました。加入メンバーは、野心に溢れたジャズ・ドラマー、ロン・エドガー Ron Edgar と、クラシック上がりでロンの演奏スタイルに似たリード・ギタリスト、マレー・プランタ Murray Planta、そしてミネアポリス出身のベーシスト、トム・ドーホルト Tom Dorholt です。楽器を増やすことで、確固たる“ゴールドブライアーズ流ロックンロール・サウンド”の基礎を固めようとした。ビーチボーイズとビートルズの音楽の間にある隙間を埋めようと、皆で力を合わせて頑張りました。



6人のメンバー達、左から、トム・ドーホルト、マレー・プランタ、ドーティー、シェリ、ロン・エドガー、前方に座るカート

お米と安ギャラで雇う新メンバー達と共に、ようやくイカしたサウンドを手に入れると、次のプロセスとして、新しいマネージャーを慎重に探しました。そのうち一人の男がゴールドブライアーズに興味を示してくれました。アル・グロスマン Al Grossman という人物で、ピーター、ポール&マリーのマネージャーをやっていました。その2日前に“I’ve Got to Love Somebody”/“Castle on the Corner”のシングルがリリースされて、大々的な宣伝で全米ヒットにな

らないものかと願っていた頃でした。私達の予想では、セントルイスではいい線いくんじゃないかと思っていましたが、ミネアポリスには期待していませんでした。(自分の出身地でのプロモーションに問題があるって、どういう事?)

次の週、楽器ウィニフレッド(タブラ・ドラム)とエルマー(エレファント・ベル)の管理を快く引受けてくれたボブ・ゴールドスタインが、カナダのウィニペグで交わされる新しい契約のために、1週間助っ人としてミネアポリスに来てくれる事になりました。

トム・ドーホルトとのミーティングは約2時間を要し、向こう数ヶ月後までのロードツアーについて話し合いました。



9月15日…火曜日——夕食に人気ナンバー 1の米料理を食べました。(しばしば馳走してくれたり、リハーサルでお世話になった)ミセス・プランタが中華風玉子あんかけご飯を作ってくれて、それを強引に「マン・チュウ・イェン」と呼ばせました。

やがてグループのイメージは、基本的に元の4人プラス何人かの助っ人というイメージになり、ルックスはよりジブシー風になりつつありました。男性メンバーは全員黒髪(坊ちゃん刈り風などもあり)に片耳ピアスという姿です。

急報——彼らがしていた片耳に金のピアスが、その後の時代に流行るなんて誰も予測しなかった!

カートが、ピアスはジブシー風のイメージのためと言ってたけれど……シェリと私はイヤリングをしませんでしたが、マレー、ロン(アルファルファ——天然パーマだったので、このあだ名)、トムは、そのイメージのためにピアスをさせられました。トムはその痛みに耐えきれず、彼が恐れる医者から鎮静剤を処方されてたかもしれません。

髪が伸び、脱色部分が下がってきたので、私は黒髪へと染め直しました。もともと私の髪は濃い茶色だから、この髪染めはそんなに大変な事ではありませんでした。シェリも私も、ジブシー・ルックを強調するために髪の色を暗くしたのです。(もっとそれらしくするために、何人かハゲ頭のジブシーがいればよかったかしら)



9月19日…土曜日——(300キング・ストリート・クラブでの初演の夜) いつものように予定は変更されて、今回はどこに来たでしょう? ……サウス・キャロライナ州チャールストンです!

前の水曜日、ブッキング事務所に呼ばれ、チャールストンに出来た新しいクラブで土曜日から全4週間、演奏することを告げられ、それによってウィニペグでの契約がキャンセルされてしまいました。いったん計画が組まれると、私達には参加を吟味する余裕などありません。52年式ビュイック・ボム(新しくゴールドブライアー・カーになった、木のドアが付いた太っちょの古いステーション・ワゴン)で無事にチャールストンに到着しました。6個のスーツケース、

楽器類、アンプ、食料、その他もろもろのガラクタ、疲れでボロボロの体になった6人のメンバー達。ミネアポリスからぶっ通しで約36時間……雨のドライブは大好きでした。山を滑り落ちるように下って行けるからです。

私達はミネソタから、木曜日の夜にチャールストンまで走破しようと、狂ったように走りました。シェリは秘書の仕事を1日で辞めるはめになり、アパートをこっそり抜け出したので、経営者が残りの家賃を請求しに追いかけて来るのを怖れていました。いつものように破産状態の私達は、カートがニューヨークから送金してもらってガソリン代を調達し、彼のお母さんに電話してチャールストンでのライブ衣装イメージを伝え、それらを郵送してもらいました。ミネソタにちょっと遠出する間、ステージ衣装はヴァージニア州のカートの両親の家に置いてきたので、次のステージのために衣装を仕込む十分な時間がありました。カートのお母さんがシェリと私のために、幾つかの衣装を縫っておいてくれたので、とても感謝し彼女の才能を誇らしく思いました。

ロンとマレーが加入してからまだ2週間、トムはたった3日間という短い期間で、どうやってゴールドブライアーズがサウス・キャロライナのクラブで上手くショーをこなせるのか、まだ誰にも分かりませんでした。トムはベース・パートの難しさに気が動転しただけでなく、一晩で3回も彼の髪をカートが染め直したせいで、頭皮がかなりボロボロになって少し腫んでいました……かわいそうに！彼の髪はもともと明るい色なのに、どうして一度で染め上がらなかったのかしら。彼は既婚で3人の小さい子供がいたので、言うまでもなく彼の奥さんは、さほど演奏旅行に賛成ではありませんでした。ところで彼は変なことをする人として知られています。ルートビアをたらふく飲んでトランポリンして、15秒間ほど目が廻った、と彼が話してくれたからです。まったく妙な体験だと思わない？

サウス・キャロライナ州チャールストンに到着。現地では皆がゴールドブライアーズを温かく迎え入れてくれました。これから演奏する300キング・ストリート・クラブを所有する、RCA所属グループの“ウェイファラーズ THE WAYFARERS”の面々です。クラブが始まってまだ約1ヶ月。ウェイファラーズ以外のグループがそこで演奏するのは、ゴールドブライアーズが初めてです。ちょっと変わった出来事が1つありました。ゴールドブライアーズはこの地ではマイナーな存在。普段は偏見を持たれない私達だけど、ここではちょっと妙な雰囲気でした……というのも、月曜日まで衣装が届けられず、土曜日のステージ初日には汚れ物を着て演奏しなければなりませんでした。長旅のせいで、汚れ物がしばしば異臭を発していたのです。

やれやれ、アンプのセッティングって大変！ステージで紹介されて演奏開始まで15分も掛かってしまいました。改築されたばかりのクラブのステージがとても暗く、アンプのソケットを差し込むのには困難な状態だったのです。何一つスムーズにいかない！



9月21日…月曜日——先日ローカルTVで3曲の口パク演奏がオンエアされたので、だんだん客入りが良くなってきた。



「疲れた～」その晩でステージは3日目……ようやくオフ日になった! これまでのところショーの結果は上々。でもこれは300キング・ストリート・クラブに集まって来る、巨大都市チャールストンに住む客に対しての結果……。この街には時間が止まったような古風で小さなビルばかりがあり、高層ビルは無い様子。道路標識、カフェテリアの標識などが目につく。連なる団地、グッディー・ハウス・レストラン、上流階級の通り、スワンプ・フォックス・イン★など独特な光景が目止まる。物静かなたくさんの人々が、まるで何か隠し事でもあるかの様に歩いてる。この風土が気だるく、のろまな雰囲気を作っているのだろう。昼夜となく、ミネソタ州と比較してみた。

活動の場はスナッグ(サワヤカ)・ハーバーへと移ります。チャールストンから10マイル離れたフォリー・ビーチを臨み、海からおおよそ3区画分ほどの場所。宿は、こんなに爽やか!って言いたいけれど、湿気のせいでよく眠れない事が声に影響を及ぼすし、洗濯された布団のシーツも生乾きみたいな状態だったので、すぐチャールストンに戻りました。ボブ・ゴールドスタインとゴールドブライアーズ(“ゴールド”同士)は、この地のほとんどの契約において、一緒に活動しました。私達はクラブで毎日リハーサルをしました。今のところショーは成功しています。ゴールドブライアーズ独自のアレンジ演奏をはさみつつ、私達姉妹の音楽経歴を歌う“Mississippi Mud”という曲の寸劇を披露し、テッド・マック・アマチュア・アワー★みたいに仕上げました。そしてシェリと私がこの曲に、軽いタップダンスを付けたオリジナルのアカペラを披露しました。カート、シェリ、私で、アクセントとしてジャズ・ボーカル・アレンジを施し、ジブシー風タンバリンを加えたエキゾチック・バージョンでの演奏です。登山帽のハックルベリー・フィンみたいにしばしば裸足で歩き回るマレーが、親しみやすいソロ・パートを歌って人気者になりました。



この文は、昔カートが言っていた事を思い出しながら……カートの両親の家にジェザベルを置いていくことにした。不運をもたらしたのは彼女であるということに対して、皆が疑う余地は無いと感じたから。もし誰かがジェザベルの行方を訊ねたら、こう答えよう。「彼女の機嫌が治まるまで待ってるの」(自分達の状況を保ちながら……それが、ちょっとした安心)

今朝、エレガントな白い馬がよその庭で芝生を食べているのを見た。ミネソタではこんな光景を見た事がない。まだアルファルファと呼ばれているロン・エドガーも、私達の生活をバラエティ豊かにしてくれる。彼が運転する時はいつも、道路への集中が彼に催眠術をかけてしまうらしく、目的地じゃない場所に迷い込んでしまう。ロンが運転する時に車中で寝てしまった人は、目覚めると、どこか知らない場所に車が停まってるから、びっくり仰天……とは言うものの、町によって道の繋げ方や番号の付け方とかがそれぞれ違うものね。



イランドの裁判長の息子であり都市の主要商人でもあるナサニエル・ラッセル氏によって、1809年に建てられた家。とても荘厳な建物で、観光ツアーが毎日行われている。新聞用にゴールドブライアーズのグループ写真をここで撮ることになった。ゴールドブライアーズがこの歴史的宮殿を使用するための許可を取るのを誰かが忘れたため、イライラした女地主が私達にくっついて来て、カメラ・アングルの隅っこにチラチラ入ってくる。私達は螺旋階段でポーズをとったが、ボブの素早い撮影テクニックに女地主は成す術もなく、この難を私達は無事に切り抜けた。2回目のローカルTV収録のため、その場所からスタジオへ大急ぎ。相変らずのごちゃごちゃスケジュールのお陰で、間に合わなくなりそうだった。ライブ後に出演した夕方のローカル・ラジオには時々間に合わず、ラジオ局とグループを同時に宣伝する特別なラジオ・スポットを、タイムテーブルをずらしてもらって収録した。チャールストンではこんな具合で、このラジオ局や、護身用の銃携帯など、大きなビジネスについて学んだ……最新ニュースによると、パトロール中に店で強盗をはたらいた4人の警官が裁判中であるという——それって立場が逆じゃない？



9月26日…土曜日の夜——ゴールドブライアーズの演奏は、混乱と驚きに溢れたステージで知られている。度が過ぎるのも困りものだけど、1.)コード進行が乱れる、2.)アンプのトレモロ・スイッチが見つからない、3.)音が歪んだアンプ、4.)キーを間違えてギターを弾く、5.)誰か男性メンバーのスポンのチャックが開いてる、6.)カボ★の位置を間違える、7.)シェリの靴が脱げてスタッフのところへすっ飛び。「ないしょ、ないしょ」

★—ギターに取り付けて、キーを調節する器具。カボタスト



10月5日…月曜日の夕方(300キング・ストリート・クラブでのライブが始まって3週目)——ジブシーって流浪するのよね。グループ・メンバー全員とボブは、チャールストンで2つ目の宿、シティ・ホテルを追い出された。支配人は、男性メンバーらの格好、耳のピアス、私達のロング・スカートを見て、他の客の目障りになると判断。この件は、夜のショーで笑いを取るネタとなる……妙なことにその後、私達を追い出したホテル支配人がショーを観に来た……そんな特別な夜に、彼がその“追い出されネタ”を会場で聞いていたというわけ。

★—ラムベースのトロピカルなカクテル

チャールストンでの3週目最後の数日、私達は全員モーテルに泊まりました。もてなしは非常に親切。カートとトムは夜毎、アザレア・ガーデنزという場所のプールを使用していました。二人とも“ゾンビ★”という強いカクテルで酔っ払って、夜のプールでとても楽しそうにしている……ぱっちりステージ衣装を着たまんまで。それぞれの部屋にあるミュージック・ボックスという機械が私達を楽しませてくれました。機械からはリラックスした交響楽が流れるだけでなく、15分毎にホテルの宣伝アナウンスが割り込んできます。数日は寝る前に聴いてみたくなる、こんな感じ……「ごらんください、床一面のカーペット、磁器製の洗面台、心地よい大きなベッド……そして小さなものに目を凝らしてください、和やかなカメ虫達がお客様のスーツ・ケースやベッドでくつろいでおります」(たぶん、このフレーズは私達のスピーカーのみから流れている)私達は必ずモーニング・コール・サービスを利用しました。男性メンバー達は起きずに、二度も仕事に遅刻……このモーテルは地理的に最も便利な所あって、さらには客全員にちゃんとしたサービスが行き届いていました。そうね、私達はバラエティ豊かに、この宣伝放送に一味違う音楽を付け加えなきゃね。

南部の料理に気付いた事。心温まり、かつ情熱的。チャールストンの初めの2週間、どのレストランがリーズナブルでいい店なのかを知らず、入った店のほとんどがダメな店で、おまけに一度、全員が食中毒になってしまいました。その晩、特にカートは衰弱して独りで楽屋に残り、その後に急いで病院に行きました。ありがたいことに、今回の宿の食事はとてもいい。ボブはゴールドブライアーズを助けるために、最初の3週間チャールストンに滞在してくれました。ボブも私達も、すでにこの町のたくさんのことに深く感動していました。皆の感傷的な思いは段々と大きくなって、その気持ちは、ボブがニューヨークへ戻る前に書いた美しい曲“チャールストン”によって表現されました。

“CHARLESTON”

You won't stay away from Charleston
Once you've ever traveled there
For there you come face-to-face
With life that leads a different pace:
While ahead the whole world plows-
Charleston pauses, Charleston bows.

You won't stay away from Charleston
It's that 'something' in the air
So once you've left, you will find
Charleston lingers in your mind
All the time ? everywhere.

(BRIDGE)

These are the things we'll remember-
Things we always will recall:
The sound of laughter through half-closed shutters,
A shaded, cobblestone lane,
A vendor hollering "Swimpee, swimpee"
'Zalea gardens splashed with rain

You won't stay away from Charleston
No! No matter where you roam
So when you're tired of seeing
Cities that have no reason for being,
Charleston says ? Come home!
Come Home!

Published 2004
Take Home Tunes/ASCAP

“CHARLESTON”

離れられないチャールストン
一度行ったら忘れない
そこにあなたは向き合って
生きるペースを見つめるさ
世界がどんどん変わる中、チャールストンは
いつも変わらず、お辞儀しながら迎えてくれる

離れられないチャールストン
そこには「何か」があるんだよ
離れてみれば分かるだろう
恋しくなるのさチャールストン
何時でも、何処にしようと

思い出してる事がある
呼び起こしている事がある
半分閉まったシャッターが、洩らす愉快的な笑い声
丸石畳の道の影
叫ぶ商人「えーらっしゃい」
ザリア(アザレア)の庭にはねる雨

離れられないチャールストン
方々旅して歩いて
くたびれ儲けもあるもんさ
街の暮らしに飽きたなら
チャールストンが呼んでるよ
お帰り! ここへお帰り! と

チャールストン・ラジオ局は1週間にわたって、“300キング・フライデー・サブライズ”と題されたショー初演のコマーシャルを、30分毎にこの美しい曲“Charleston”と共に流してくれたので、クラブにはそれに興味を示した客が、怒涛の如く押し寄せて来ました。“Charleston”を演奏した時、オーディエンス達の反応は圧倒的で、クラブは涙と笑顔に溢れていました。

300キング・ストリート・クラブでの演奏写真①



300キング・ストリート・クラブでの演奏写真②



右上の写真の金髪の娘——マレーのファン

300キング・ストリート・クラブでの演奏写真③



★—ギターの弦の音をひろうマイク

★—開放弦が何かのコードになるように
作られたチューニングのこと

ボブがニューヨークに帰る頃には、ショーは観客が見違えるほどに改善されていました。今回は、新しいゴールドブライアーズがどんな楽器を使い、カートが初期ゴールドブライアーズから使っている古いアコースティック・マーチン・ギターの音を、どんな風にアンプで鳴らすかというテクニクについてのお話です。ギターの性能による場合もありますが、たまにいい音のギターがあるなかで、カートのマーチン・ギターは、かなり特別な音がするとメンバー全員が感じていました。だから、彼はギターのボディの内側にピックアップ★をつけて、そのままの素敵な音をアンプで出力しました。マレーは新鮮な奏法でギルド・ギターを弾き、トムは“飴りんご”と呼ぶ赤いハチミツ色のフェンダー・ベースを弾き、ロン・エドガーはグレッチのドラム・セットを叩きました。彼はインド楽器のタブラや、同じくインド楽器のエレファント・ベル、トライアングル、その他にも不思議な打楽器を操り、たくさんのアーティスティックな音を演出し、ジャングルのようなドラム・セット全ての打楽器を、しなやかに叩きこなしました。相変わらず、シェリも時々タンバリンを叩きます。ごく稀に、ギターはオープン・チューニング★で演奏されました。このチューニングは特別なムードを醸し出し、ヘヴィー、不気味、またはサスペンスに満ちたサウンドを表現できるので、ゴールドブライアーズが得意なレパートリー“Woman At The Well”や“East Virginia”を演奏するときには、これを使うのです。有名なフォーク・シンガー、ジュディ・コリンズは、たくさんの持ち曲をオープン・チューニングで弾くことで知られています。

ボブ流の鍛錬による毎日のリハーサルのお陰で、ショーは急成長を続けました。プロらしい要素を身に付けた私達のショーは、ボブまたは彼のブロードウェイの友人によって演出され、幾分ブロードウェイ・ショーに傾倒したものへと変化を遂げました。それは私達がとても楽しめるもので、ボブはゴールドブライアーズのショーの寸劇にまで精を出してくれました。彼はその後、ブームを呼んだ“THE LIGHT WORKS”と呼ばれる自作の寸劇で、有名になりました。この劇には、彼と何人かで書いた“At the Light Works”というテーマ曲があり、ショーには芸術的なパートナーによって創り出された、たくさんのユニークなカラーがありました。

驚きのニュース!!! ホテルを斡旋してくれた男性が、チャールストンの旅行エージェントに選ばれました。それを知って私達は笑顔を送ることしかできなかったけれど、彼ならばきっと人々にとても素敵な旅行をさせてあげられることでしょう。先週末、レディ・バード・ジョンソンが“ヴィレジャーズ The Villagers”というグループの余興を前面に押し出した“ザ・チャールストン・スペシャル”という選挙活動を引っさげて、チャールストンにやって来ました。ヴィレジャーズは以前にゴールドブライアーズのショーを観に来てくれて、その後1年ほど連絡を取り合っていました。彼らは全員、ニューヨークに隣接するノース・キャロライナ州の出身です。

チャールストンでの最後の数日——ああ、残りの日々が過ぎ去ってしまった! 限られた時間に、やる事がたくさんあったけれど全部をこなしました。もちろん睡眠不足で。アンプ、楽器、特殊な旅行カバンを運ぶトレーラーの調達にヤキモキしていましたが、それに同情した友人ルーサーの助けで、出発予定日の日曜日にやっと1台確保できました。ジェザベルが悪いジンクスをもたらすと

★—梅毒

強く信じて以来、グループに新しいマスコットを見つけようと決めていました……そして見つけたのがクマ！ 何とも可愛らしい、生まれて5週目のネコくらいのはやっただけ、いつか北極グマみたいに成長するかも……どなたかご存知？……はてさて、幸運にもその成長はスパニエル犬ほどの大きさにとどまりました。これはキンカジューもしくはハニーベアーとして知られるブラジル産の動物です。この(男の)子の名前をブギ・ウギか、ただのブギーにしよう決めました(南部の言葉で“ブギ・ウギ”が意味するもの★を知って驚きました)。購入してからのブギーは時々、環境の変化から下痢を伴う病気になりました。大きな茶色の目、とんがった鼻、金茶色の毛。私達は彼を愛して止みませんでした。

ブギ・ウギの生態……キンカジュー

★—約50cm

★—120cm

夜行性哺乳動物、“ハニーベアー”としても知られる。メキシコ南部からブラジル中央部のマットグロッソ州にいたる温暖な熱帯の森林に棲息、メキシコ先住民はこの動物をミコ・レオンもしくはモンキー・ライオンと呼ぶが、サルでもなければライオンでもなく、またサルを狩ることもない。名前の起源は南アメリカのチュピ・インディアンに辿ることができる。学名はポトス Potos、語源はポト Poto、中央アメリカ先住民の言葉で動物を指す。特に興味深いのは、キンカジューとインディアン達にポットゥー potto と呼ばれるアメリカ・キツネザルが、多くの点について類似しているということ。にもかかわらず、キンカジューはアライグマ科である。キンカジューは長い胴体に短い足を持ち、柔らかく厚い毛に覆われ、毛は模様のない明るい金茶色、頭から胴体まで20インチ★、短い顔に丸みのある頭、小さな耳、尖った鼻、大きな目を持つ。均等な先細り状のシッポは強さを表す。体より少し長く、むき出しになった先っぽで巻きつけ、物を掴むのに4フィート★をそれで補う。南国の森林の中、サルのように木から木へと飛び移ることを好み、ごく稀に地上に降りる。



私達のマスコット、ブギ・ウギ

★一棒状の積み木取りゲーム

最後の昼のステージは、叫び——イェー、またしても少女達がやってくれた!! 大々的にこの地でファンクラブを募ると、少女達がすぐに気付いて小さなかん高い声を上げました……疑う余地無く男性メンバー達を愛しています。ヘラジカ顔の娘(熱心なファンなのに、誰かがあだ名を付けた)と彼女のお母さんは、知り合って以来およそ25枚のナッツ・ケーキを焼いてくれて、メンバーそれぞれにもプレゼントをくれました。シェリには子羊(ショーで演る、安全パイの曲“Mary Had A Little Lamb”に^{ちな}因んで)を。カートには手榴弾(私達の曲“*No More Bomb*”に因んで)を。ロンにはエジプトのガイド本(私達の曲“*Queen of Sheba*”に因んで)を。トムにはピックアップ・スティックス★(ショーでの安全パイの曲“*Sticks and Stones*”に因んで)を。マレーには汽車のおモチャ(彼が度々ステージ上でギターを用いてやる「ガタンゴトン」に因んで)を。私には台車(ドリー。グループが得意な曲“*The Dolly Song*”に因んで)を。

“300キング”でのショー最終日では、グループの持ち曲全部を披露しました。アンコール曲“*Charleston*”を歌うと、ラストショーを觀に来てくれたお客さん達全員が立ち上がり、本当に泣いていました。まるでサヨナラ・パーティーみたいでした。その演奏後には、次の木曜日で21歳になるシェリのために、皆で“*Happy Birthday*”を合唱。日曜日の午後1時頃にチャールストンを発つ予定でしたが、クラブの人達が私達のためにパーティーを開いてくれたので、月曜日の午前3時まで出発できませんでした。フランク・アンド・ケイ Frank and Kay (私達の次に“300キング”で演るデュオ)、クラブのバーテンと彼の奥さん、たくさんの友達、そして最も重要な人物である、チャールストンでの最後の週に知り合ったサマー神父に、別れの挨拶をしました。私達は、とても立派な彼を“私達の神父”として公認しました。私達は、チャールストンの主要ラジオ局のナンバー1リクエスト・グループのまま、この地を離れました。



★一歌やダンス、ドラマなどから構成された
軽快なテンポの音楽劇

10月31日…土曜日(1964年)——午後、私がいるこの場所——他でもない(カートの両親の住むヴァージニア州マククリーンの)ベッチャー家。グループが仕事をしていない時にいる場所って、なかなか想像つかないでしょう。彼のご両親が、私達“ジプシー・サーカス団”にどれだけ我慢してくれていることか。彼らはとても親切にしてくれる。前の日曜日の晩、グリニッチ・ヴィレッジのリトル・フォックス・シアターで、ポップ・ゴールドスタインがゴールドブライアーズのために準備してくれたレビュー公演★は、彼がショービズ関係者200人を招待してのショーだった。ショーは、ブッキング事務所以外の人にはとても好評だった……必死な私達にとって事務所の人は頼れる人達なのかな……現在ブロードウェイ公演のほとんどのケースで、ポップ・フォーク・ロック・グループもしくはジプシーのイメージとして表現されてるゴールドブライアーズのことを、事務所は相変わらず、この風変わりなグループをちゃんと紹介できないでいる……人は私達を、どこか知らない所から舞い降りて来た奴らみたいだ、と言う。きっと独自のパフォーマンスを目指す上で参り出してくる、並外れたユーモア・センスが、間違った印象を人に与えてしまうのでしょう。

グループ解散から数年後の見解として——自分達らしい無邪気さ、ブロードウェイ関連の世間離れした特殊な仲間達、風変わりなボーカル・スタイルとグループのサウンドのせいで理解されなかったのかしら……その時代には早過ぎた……そして、とても珍奇なジプシー風イメージのせいもあったみたい。

私にとってのステージで最もエキサイティングな瞬間は、オーディエンスとのやりとりでした。まるでグループとオーディエンスの間に、温かいバイブレーションの輪が波打っているみたい……感情が行ったり来たりする感じ。

ピーター・ネロのマネージャーが、私達の新しいマネージャーという仕事に興味を示してくれました。新しく出たシングル“*I’ve Got to Love Somebody*” / “*Castle on the Corner*”はフィラデルフィア以外ではまだヒットしていない様子で、あまりオンエアもされていませんでした。でもイギリスでは2ndアルバム1曲目の“*Sea of Tears*”が、文字通り涙がポロリと零れ落ちるように何の特別なプロモーションも無しで発売されましたが、それにもかかわらず1週間で3プレス分以上も売れたということを仕事仲間が教えてくれました。

ブロードウェイ・レビューの後、ボストンにあるアウトサイド・イン・クラブでの公演を事務所がブッキングしたので、どうやら今回は確実にゴールドブライアーズのことを売り込んでくれたのだと思いきや、実際には彼らは、ゴールドブライアーズのことをどう分類していいのかわからないのか、このユニークなグループのために何をしたいのか、いまだに理解していなかったようです。レビューを終えた後、寝る間を惜しんで、すぐさまボストンに向かいました。ボストンまではそれほど時間もかからずに着きましたが、目的地の住所を忘れてきてしまい、クラブを探し当てるのに4時間もかかってしまいました……ニューヨークで、出発を急ぎすぎた！ おまけにボストンで誰に尋ねようか、その場所を知らなかったのです!! いったん会場へ着いたのはいいけれど、その光景を見てガッカリしました。いくつかのテーブルの真ん中にある小っちゃなステージにピアノ1台が置かれただけの、ピアノ・バーのような場所だったからです。結局、一晚だけの演奏に終わり、実は事務所が私達のことを“厳格なフォーク・グループ”であるとクラブに伝えていたのです……そんなグループじゃないのに!……その後、カートとシェリがブッキング事務所に怒鳴りに行ったので、私はどんなことになるのかを案じていました。



11月4日…水曜日——5日間の演奏契約でチャールストンの300キングに舞い戻る。クラブに採用されていたコメディアンが不評で、街へ逃げ出したようだ。300キングの支配人ミッキーが私達のボストンでの仕事の事情を聞きつけ、「それならばコメディアンが空けた演奏日の穴を埋めて欲しい」との要望。喜んでその申し出を受け入れた。6人とクマちゃん分の食いっぶちと楽器代が確保できて嬉しい。(収入が月々の支払いに追いつかない)

ゴールドブライアーズは、とてもいい評判を得ました。ラジオ・TVや街中に貼られたゴールドブライアーズの再演を示すポスター宣伝には、こう書かれていました。“人気に応え、ゴールドブライアーズが帰って来た”(実際の感覚は、まだ最初の公演が終ってないって感じだったけれど) 私達が“ダッジョ”と呼ぶサマー神父は、ゴールドブライアーズがすぐに町に戻ってくるのを祈ったと言いました……確かに、よく祈ってくれたものです。彼には、また、すぐにでも私達がこの次の仕事を取れるようにお祈りをしてもらいたい。なぜならば私達は、それほどに“給料”というものを熱望していたからです。

少し前にシェリと私は、チャールストンから何人かの少女達が送ってくれた手紙をニューヨークで受け取りました。手紙には、「彼女達が非常給水ポールに描いた“シェリと私”の絵が、雨で流れ落ちてしまったので、今度は油性の絵の具で描き直した」と書いてありました……さらには地方紙がこのことを取り上げてくれました。送ってくれたカラー写真には、アーティスティックな給水ポールが写っていました。2ndアルバムのジャケット写真をお手本に、かなり正確に描かれたその絵を見て、とても驚きました。なんとジャケット写真で私達姉妹が着ていたロング・スカートまで、きっちりと描かれていたのです。



ゲイル・ガーネット Gale Garnett (“Sing in the Sunshine”を歌う女性)のベアシスト、キース・オルセン(シェリの新しいボーイ・フレンドで、かつてはジミー・ロジャース Jimmy Rodgers のベアシスト)は、親切にもチャールストンへの旅の資金を出してくれました。グループ・カー“ウッディ”号に、7人も人間が強引

に詰め込まれた状態を想像してみて！ ありがたいことに運搬用トレーラーもあり、取り替えてから1ヶ月目のバッテリーで、まだ持ち堪えています！ タイヤ1個は、もはやパンク状態！

300キング・ストリート・クラブは豪華になっていました。この2週間でちょっとした贅沢品や新しいシート、照明、より良いサウンド・システムが設置されたのです。近日中にカーペットも敷き詰められる予定です。ところで、私達のいない間に、クラブで一騒動あったと聞きました。警察の手入れを受けたのです！ サウス・キャロライナ州にはとても特殊なアルコール規正法があり、クラブでの酒類の売買が違法です。ビール販売は許されていますが、強い酒はダメなのです。300キングはこの規制を真剣に受け止めず、強い酒も販売していました。さらにアルコールの販売許可期間も満了になったまま、更新を忘れていたようです。でも私達は、この一件がショーに興奮を加味するに違いないと分かっていました。



11月5日…火曜日——夜にチャールストンの友達が、私達に娯楽が必要だと判断し、マグニフィセント・シックス The Magnificent Six という、サクソ、ベース、ドラムス、エレキ・ギターで編成されたグループが出演するロックンロール・クラブ、“マーチャント・シーマン・クラブ”へ案内してくれた。クラブの人は私達が来ているのを知って、ステージで演奏するように促した。——その時の私達、とても上機嫌……長いグループの歴史で初めて、我を失うほど振る舞われたお酒に酔っ払って……演奏しているときより幸せ気分。自分の楽器やアンプが無かったので、そのバンドのもので何とか演奏してみたけれど、いつもとは全く状況が違っていた。カートはエレキを持ってバンジョーみたいな音を出し、ドラムはブリキ缶みたいに高くチューニングされてるし、シェリの持ったタンバリン★は救世軍のものみたいだし、マレーときたらかわいそうに、ギターが足りずに弾くことも出来なくて……皆で疲れ果てるまで踊った。サマー神父も加わって、ジルバや“シャグ”と呼ばれるチャールストン・ダンスを踊ってくれた。

★一神を賛美するために叩く、リボンのついたタンバリン

今回のチャールストンの契約演奏の昼のラスト・ショーの時にいた、ファンゴールドブライアーの少女達が帰った後は、騒々しいG・B・ボーイ達が彼女達に取って代わりました。昼のショーの後、私達がモーテルに着くまで、彼らは群がっているだけでなく、メンバー全員にケーキを用意してくれていました。そこで、ある少女がマレーの下着姿を拝もうと、さりげなくG・B・ボーイ達のモーテルの部屋ゴールドブライアーに紛れ込みました……彼のベッドに潜り込むためです。チャールストンにはすでに、G・B・カルト達も存在していました。髪を染め、片耳ピアスを開け、袖無しのゆったりした上着を着た4人組の少年達です。次の目的地ウィスコンシン州ミルウォーキーの2週間の演奏契約を交わした直後のことでした。

CD-Rom eBook

The GoldeBriars' Story
“Whatever Happened to Jezebel?”
The GoldeBriars' Epic Years
ジェザベルに何があったの…?

CHAPTER

7

“ROUGH ROADS AHEAD”

目の前の険しい道

第7章 “目の前の険しい道”

“Move Out We Gotta Get There”

Song by Curt Boettcher 1964

Refrain:

Move out we gotta get there
Move out we gotta get there
Look sharp, we're gonna split hair
We're off, but we don't know where
You know, we're rollin' so you better look out
Our car is smilin' so you better look out
Confusion reigning, so you better look out...

Well, we're driving down the highway
in our GoldeBriar car
We got a big flat tire, so we don't go far
We pull off the road to get the tire jack
But when we look in the back
we can't find where it's at

Repeat Refrain

We're packin' up the car with our boxes and stuff
It's bustin' at the seams but it still looks tough
With the weirdoes hanging out,
Like a junk man's cart
We rev up the engine,
Cause we're ready to start

Repeat Refrain

“そこに向かって動き出せ”

カート・ベッチャー 作詞・作曲 1964年

※

そこに向かって動き出せ
そこに向かって動き出せ
視線鋭く、髪を掻き分け
行こうぜ、道先知らぬまま
我らの走りを見るがいい
ほうら車が笑ってる
とんだ厄介待っている……

よしハイウェイを突っ走れ
ゴールドブライアー号
でっかいパンク・タイヤだぜ、遠くにゃ行けないよ
道を駆け抜け捕まえる、タイヤ泥棒を
でも振り返っても分かりゃしない
何処なのか

(※繰返し)

荷物を車に詰め込むぞ、何もかも
つぎはぎだらけのボロだけど、タフなのさ
変人乗せて突っ走れ
くず野郎を乗せて
エンジンぶるぶる絶好調
準備は出来てるぜ

(※繰返し)



11月8日…日曜の夜(テネシー山脈にて)——

今、ガレージに引き上げられた52年式ジプシー・ワゴンに乗かって、どのパーツが悪いのかを考えてる！ 今朝チャールストンを発ってから、トラブル続き。新しいバッテリーとタイヤを出発前に交換したばかりなのに、トランスミッション★のくたびれか、密閉部分が壊れたのか……車の事はよくわからないけれど、5マイル★走る間に7.5リットルほどのトランスミッションの液とオイルが流れ出たので、丘で車を押してガソリン・スタンドを探した。

★—ギア・チェンジ

★—約8km

何もかも文明化が進んだ現代に生きてるせいで、山中で車のトラブルに遇ったりすると、私達はただのでくの棒状態になってしまうんだということがわかりました。ボロ小屋トイレに出くわしたり、洗濯物を窓辺に干したり、その他いろいろな場面でそうなるでしょう。現在、こんな場所に住むたくさんの人達

は、どうやって生活に十分なお金を稼いでいるのか、私にはわかりません。聞く話によると、まだ多くの人がタバコやトマトを贅沢品としている……そんな彼らが、隠れた才能でコーン・ウイスキーを作ったりする……驚いた事が1つあって、多くのボロボロのほったて小屋の横には、最新の車が駐車されてあるのです。きっとそれは、ものすごく後にまで支払いがあるであろうローンを組んで手に入れたものなのでしょう。ところで、私達はもうこれ以上車が押せないという状況になったので、ガソリン・スタンドまで車を運ぶレッカー車が必要だと判断しました。最寄りのガソリン・スタンドに行くまでの助けを借りようと、この一団の中で人目に晒すのに最も適した容姿のペアである、キースとシェリの二人を、ヒッチハイク要員として選出しました。残りの全員は、人目に付かぬように茂みに隠れ、トラック運転手がキースとシェリに乗車を許してくれるのを待ちました。二人が戻って来た時、彼らは、車に乗せてくれた男の話をしました。古いオーバーオールとサスペンダー姿にショットガンを持った、かなり怪しい男だったそうです。彼らは男に話しかけられた時点で、何やら無事にガソリン・スタンドまで送ってもらえそうにないと感じたけれど、その予想通り、人質のような状態になってしまったのです。二人がスタンドでレッカー車を借りると、その男は、私達の壊れた車の場所まで二人が運転することを要求しました。しかし二人は、ガソリン・スタンドの店員にその男のことを話し、無事にレッカー車で、私達の場所まで二人で戻って来れたというわけです。

私達に変わった事が起こる時はいつも、ボブ・ゴールドスタインには、とても鋭い直感が働きます。そう、彼はこのミルウォーキーへの旅が悪夢のような事態になる夢を見たのです。それはいいけれど、事がうまく運ぶために、月曜の晩に向けて何をしたらいいのか私には分かりません。

★—高架高速道路

★—ガスなどの漏れを防ぐパッキング



11月10日…火曜日(テネシー山脈からシカゴ・スカイウェイ★へ)——11月9日、テネシー州ニューポートの安い小さな山岳ホテルに泊まらねばならない。車のトランスミッションに、新しいガasket★と密閉シールが必要で、朝になって部品を入手するまでホテルで待機。でも、日曜日に開いている自動車修理場はほとんどない。いつものように皆、いくつかのユニークなことに気付く……人口5千人のニューポートには“スーパー・キャブ・カンパニー”という独特なタクシー会社があり、塗装なしの屋外トイレみたいな建物の前に、55年式フォードが1台停めてある。歩道を歩いてもほとんど人に会わないが、もし会えば、彼らはライフルを持っているか拳銃を腰に携えている。ここって乱暴！ 1年中が狩りのシーズンなのね。トムは、噛みタバコを噛む、縮れたニンジン色の髪^そのデブ女に気を取られ、歩道を逸れて、轢かれて危く足を失いそうだった。

★—約16km

トランスミッションが直り、再び出発したのは午後6時でした。その時、また不運の兆候がありました。ニューポートを10マイル★ほど離れると、新しいはずのバッテリーが切れてしまいました。今回は、冷却タンクのポンプ・パッキングから噴き漏れる水を抑えつつ、入手したチャージ・ケーブルで必死にバッテリーを復活させました……そして、ウサギの糞みたいな小さな物が浮いて、とても臭いバーリーク・エンジン・オイルを1本注入すると、驚いたことに漏れは治まりました。インディアナ州東部ゲイリーでオーバーヒートしたまま、ミルウォーキーへと旅を続け、再びバッテリーをチャージした後は、シカゴ・スカイウェイに着くまで突進です……皆が思っていたことは一つ、今回で

トレーラーをダメにしてしまうんじゃないかってこと……そして、その発想に皆が笑った瞬間に、左前のタイヤがパンクしてしまいました。カートがスペア・タイヤを取りに車を降りると、がっかり。チャールストンで新しいタイヤを買ったとき、店の作業員が、車の後ろにスペア・タイヤを取り付けるのを忘れていたのです。相談の結果、カートとマレーがタクシーに乗り、ガソリン・スタンドまでタイヤを買いに行くことになりました。

さらに混乱！ シカゴ・スカイウェイ上のセンター・アイランド辺りで、猛烈に飛ばす両脇の車に挟まれながら何をしたのかって？ ……残ったトム、ロン、キース、シェリと私は、ポテト・チップス、水に浸したボローニャ・ソーセージ、ブルーン・ジュース、ソーダ水を手に持ち、ピクニック気分で観戦していました。私達のことを不審に思ったパトロールマンが車を止め、私達の旅のサクセス・ストーリーに耳を傾け、その話に同情した彼は、「激しく車が行き交う道路から急いで移動しろ」とも言わず、カートとマレーが戻るまでに、私達にコーヒーをおごってくれました。タイヤを買った時点で、マレーはスケジュール毎に決められたツアー予算を、ギリギリまで使い果たしてしまいました。\$22で買ったタイヤさえ新品ではなく、他の部品代を合わせると、とても高くついてしまったのです。タイヤの買い物に使用したタクシーの運転手は、とんだ変わり者でした。彼が言うには、「世界中の95%の人間はどうしようもないバカで、残りの5%は狂人さ」 敢えて言うなら、私達はどちら側の人間なのでしょうが……。何と神経を擦り減らす旅！ この調子の悪い旅の途中で、ブギーが病気にかかり、5時間もぶっ続けでキーキー鳴いていました。まだ彼は、どこでおトイレしていいのかさえ分かっていません。最も手っ取り早い場所が、餌入れかカートのシャツ。わらが何のためにあるのかさえ分かってない様子です。

さらに、歯の問題もありました。トムは歯槽膿漏で、カートは親知らずがとても痛みます。シェリは歯茎がしみて、私には口内炎の痛み。

ブッキング事務所は、私達が契約したショーに1日遅れてしまうという事態に激怒していました。彼らの困惑のすべての原因は私達にあったのですが、その事に対してカートは、「車のトラブルは誰にでも起こり得ることで、新車でもそれは有り得るんだ」と怒りながら訴えました。それにしてもトラブルが続き過ぎ……取り替えたタイヤは30マイル(約48km)走ったところでパンクするし……まあ、そんな感じで火曜日の午後5時にミルウォーキーに着いて、その晩はホリデイ・イン The Holiday Inn というクラブで演奏しました。



11月17日…火曜日——先週土曜日の夜のホリデイ・イン、ステージ中盤で演奏するシリアスな曲“*No More Bomb*”の途中で少し盛り上がる。早くもステージへの参加を決心した小さなブギ・ウギは、ショーの途中で紹介されるまで楽屋で待機。マイク・スタンドをよじ登る技を見せようと、楽屋からひょいと出てきたブギ・ウギ。しばらくの間、客達は面白がったけれど、ブギ・ウギがマイクに跳び移って客席のテーブル下に走って行った時、女性客がヒステリックに叫んだ。ロンがブギ・ウギを捕まえようとテーブル下を這って行くのを、客達は好ましく思わなかった。結局ブギ・ウギは楽屋に連れ戻され、私達は“*No More Bomb*”を完奏した。

ホリデイ・インはまさに豪華なクラブ——フランク・シナトラ、ドリス・デイ、トニー・ベネット、ナット・キング・コールらが出演した場所です。観客は演奏中、ディナーを楽しみながら皿やグラスをカチャカチャ鳴らして談笑し、バー・カウンターの椅子も客で一杯の状態です。とてもいい感じのサパー・クラブだけど、ブロードウェイ・ショーみたいに構成されたゴールドブライアーズの演奏には、雰囲気合いません。新しい音楽を引っさげてジブシーみたいに演奏旅行していること、これまでにどこで演奏してきたのか、レコードのことについてなど、いい形で私達のことを紹介してくれる司会もここにはいません。そんなわけで、トム、ロン、マレーがインスト曲を演奏した後、マレーがマイクに近づき、こう紹介します。「それではこれから、目新しいモダン・ジブシー達の演奏に、皆さんをご案内いたしましょう!」300キングでは、男性メンバーによるインスト曲演奏の前と、“シンシナティ”という私達のワイルドなジブシー・ムードの曲演奏の後に、ワイルドなレコードが流され、さらにちゃんとしたグループ紹介もありました。それらは、ゴールドブライアーズのとても変わった音楽を聴く観客が、心の準備をするために必要だったからです。

300キングには才能ある照明担当者もいましたが、ここホリデイ・インでは、オリーという照明担当に頼まなければなりません。彼は指を骨折していて、それ無しでは何も見えない割れたメガネをかけ、やる気の無い、かつ神経質な男でした。こんな数々の無能さに加え、毎晩いつも酔っ払っている、本当に無能な男でした。

ホリデイ・インのもう一つの売りとして、2つのガラス・ドアの向こうに“ア・ゴー・ゴー”という部屋があり、週末の夜にはそこに、客の気分をのせるためのプロ・ツイスト・ダンサー数人がいて、客はツイストしたり叫んだりして、ヘトヘトになるまで踊ります。実際、週末にはその小さな部屋にたくさんの客が詰め込まれ、動けないほどでした。ダンス音楽のプレイとMCは、ミルウォーキーの主要なラジオ局アナウンサー、テックス(DJネーム)が担当しました。セントルイスの人気ラジオ番組のチャートで、ゴールドブライアーズのシングル“Shenandoah” / “Pretty Girls and Rolling Stones”が1ヶ月間1位になった時にも、彼はその局にいました。毎晩、彼は“ア・ゴー・ゴー”で、ゴールドブライアーズの音楽と私達へのインタビューに興奮していました。

今回のホテルは、ニューヨークのクリストファー・ホテルよりも気味の悪い所でした。このミルウォーキー・ホテルには特徴が5つあります。クリストファー・ホテルよりモダンで、クリストファーの螺旋階段に対して、こちらにはエレベーターがあるのですが、まるでお墓のようでした。この1週間で乗り合わせた客は2人だけでした。(きっとこの時期は客が少ないのね) ほとんどのホテルでは、ロビーに座っている人をちょくちょく見かけるけれど、ここではいつも、受付の人がソファで寝ているだけ。昨日シェリと私が部屋から出てロビーに歩いて行くと、空のウィスキー瓶が挨拶してくれました。

私達は、シングルリリースされた“Sea of Tears”のイギリスでの状況について、その後何も話を聞くことはありませんでしたが、最後に聞いたのは、“I’ve Got To Love Somebody”がフィラデルフィアのチャートで18位になったということです。少なくとも、この曲がまた何か動きを見せてくれるでしょう。



11月24日…火曜日——やれやれ、昨晚全員“ウッディー号”でニューヨークに着いた。この地で2週間ほどを予定しているレコーディング・セッションに集中するでしょう……それが終われば、カナダのウィニペグで次のショー契約。今のところ、グループは自信満々。ミルウォーキーのショーでは、逆に屈することなく皆でショーをこなしてきた。昨晚ミルウォーキーでは、マレーのお母さんと姉、そしてもちろん犬のジャックにも会えて嬉しかった。泊まったホテルは犬や猫の入室も許可されているけど、ジャックは小さい牛くらいの大きさ。ジャイアント・プードルで37〜38kgはあるし、足が1mほどもある。美容院に行ったばかりのグレーのカール・ヘアに包まれたジャックを見たら、きっと誰もが眉間にシワを寄せるでしょう。たぶんホテルの管理人はジャックを受け入れてくれないだろうから、裏口からこっそり入って、せっせとエレベーターに乗せ、誰にも見られないように部屋に運んだ。次の朝、メイドさんが掃除し終わった部屋に、こっそりジャックを忍ばせると、彼女は気付かぬまま他の部屋の掃除を始めた。そんな感じでメイドさんとかくれんぼして過ごした。チェックアウトの手続きをしていると、「私達が3夜に渡って騒音を出したことを法的に訴える」とホテルの支配人に告げられた。事実じゃないと分かっていたけれど、あっという間に彼のゲームにハマってしまった。私達を裕福な芸能人と見なした彼の真の目的は、お金を分けてもらおうという企みだ。(私達の実態を知っておいてくれたら!) ニューヨークの有能な弁護士に話して、とにかく支配人の言い分を聞いてもらうように頼んだ。さすが、たちまち彼は奴を黙らせた!

いつものように、旅の始まりは驚きばかり……ミルウォーキーを出発し、自分達が難を逃れたことに気が付いたのは1区画ほど走った道の途中でした。“ウッディー号”の修理で\$95も余計に出費したことにウンザリしていたところ、また何かが明らかにおかしいと感じたので、ちょっと車を点検してみると、追いうちをかけるようにガス欠状態になっていました!

誰もミルウォーキーの町を振り返りはしませんでした。ミルウォーキーは、今まで行った町みたいな個性が無いと感じられました。たぶん正しい方向を見ていなかったのかも知れないし、そんな時間が無かったのかも知れません。この町についてたくさんは学ばなかったけど、ミルウォーキーは軍の駐屯地で五大湖に位置し、冬は寒く(滞在中は摂氏マイナス20度近く)、地域の人々を楽しませておくために色々な醸造所があるということがわかりました。

★—11月の第4木曜日に行われる



11月26日…木曜日 ニューヨーク(感謝祭★)——今日は感謝祭、皆でボブ・ゴールドスタインの部屋で料理をして過ごし、ベヴァリー・ロスも来る予定……また会えるのが楽しみ。2ndアルバムでレコーディングした、彼女のオリジナルの2曲が大好き。会う時はいつもオリジナル曲を持って来てくれる。ボブがアパートにピアノを入れたので、ベヴはここでピアノを弾けるし、私達もそのメロディに合わせてアドリブでハーモニーをつけて遊べる。才能ある彼女を尊敬している。次のレコーディング・セッション用に、ベヴは2曲書いてくれた。1つはボブと一緒に書いた“June Bride Baby”、次のシングルに決まっている曲。(ニューヨーク風アクセントで録音した)キャッチーな曲で、この曲が順調に売れて、初めての全国的ヒットに繋がればいいなと思う。

シングル盤になり得るいい曲なので、このレコーディング・セッションは、集中して取り組まれそう。今回の新曲、サウンドの拡張、サポート・ミュージシャン、レコーディングなど、その全ては商業的に最大の仕事になるはず。感謝祭の食事会は、祝宴になりそう。“ゴールドブライアーズ旅物語”の始まりのために、10kg近くあるターキーを朝7時半にオープンにかけました。男達は慎重にソースをターキーにかけ続け、たぶんオープンを何度も開けたので、2時間余計にかかったけれど、ディナーを待ちくたびれる程ではなかった。メニューは、ミックス・サラダ、ベイクド・ポテト、クランベリー、ロールパン、各種ワイン、そして勿論パンプキン・パイ。フィラデルフィアからボブの両親と兄弟が訪れ、計14人のパーティーになった。

ニューヨークにいる間、私達は再びクリストファー・ホテルに宿泊している。ここはニューヨークで唯一のオテル OTEL。初めての宿泊のときからずっと、ホテルの看板の“H”は欠落したまま。ホテルの外見は、さながらおばけ屋敷のよう。館内に入れば、年中“メリー・クリスマス”と“ハッピー・ニュー・イヤー”の看板に迎えられる。エレベーターは僅か数人しか入れず、動きがとても遅いので、待つ間はエレベーター入口のベンチでゆっくりくつろげる。私達の部屋がある階に着くと、気持ちの悪い異様な臭いが漂う。部屋はとてもユニークで、床の傾斜したバスルームとベッドルーム、そして蛇口からは勝手に水が漏れている。ほとんどの人はエアコンをつけてリビングルームで過ごすだろうけど、外壁まで貫通している大きな壁穴から絶えず隙間風が差し込んでくるため、シェリと私はバスルームで過ごしている。客に不親切だと思われないためか、壁は何度か塗り替えられているけど、日に焼けてしまっている。でも幾つか、このオテルで好きな所がある。1つ目は、ここに宿泊する変わった人達を見る楽しい冒険、2つ目は、ここのベッドが、これまでの旅のどのベッドより心地良いこと。今となっては諸々の理由で壊れているのだろうけど。

ニューヨークからウィニペグに出発する直前、一人新たにロード・マネージャーが同伴することになった。彼の名はルーサー・ゲイラード Luther Gaillard。サウス・キャロライナ州チャールストンから来た、典型的な南部の紳士。仕事の状態、予算、ショーの照明、他諸々の面倒を見てくれる誰かが必要だったから。ルーサーはゴールドブライアーズのチャールストンでの仕事を色々と手助けしてくれたことから、ロード・マネージャーとして彼が適任だという話になった。今日彼から受け取った手紙には、チャールストンでサッカーの試合を観に行ったら、ちょうどG・B・ポイズゴールドブライアーのような格好をしたピーナッツ売りが見えたと書いてあった。もし次のシングルがヒットしなかったら、皆でチャールストンのG・B・ポイズゴールドブライアーに混ざってピーナッツを売らなきゃいけないかしら。

ブギーが少し慣れてきたみたい。飼い始めた頃ほどは噛まなくなった。じゃれて噛むんだけど、痛いよ！ ブギーが狂犬病の予防注射してて良かった。ある夜、カートと私はブギーを散歩に連れ出した。ブギーは注目の的で、歩道を歩く人は立ち止まり、車の中からは何という動物か訊かれる有り様でした。アリクイやナマケモノと思われるときもある。

昨日は、4曲レコーディングした。“Last Two People”、“Hush, Hush”、“Nothing Wrong With You (That My Love Can't Cure)”、それと“June Bride

Baby”。セッションは2:30p.m.～5:30p.m.と、7:00p.m.～10:00p.m.。私達はヘトヘトだったけれど、結果がワイルドな感じに仕上がったことで、疲れは気にならなかった！ここまでのレコーディングでは全員が、のびのびとした曲“Nothing Wrong With You”(ポプとベヴ作)を気に入っている。最近のヒット曲みたいな感じで、ゴールドブライアーズ・スタイルのイギリス風の曲。レコーディング4曲中の2曲には妙な効果音を入れた。“June Bride Baby”では、ポプがレジのベル音みたいな音がする古時計を使用し、“Last Two People”でも彼が、マレーのギター・アンプで何とも言えない気味悪い音を創った……カミナリみたい。

もし今回のセッションから1曲もヒットが生れなかったら、次のアルバム・タイトルには“No More Bomb”(持ち弾無し)がいいかも知れないと話した。私達のような大所帯のグループを支えるために……高い維持費^{まかな}を賄うために、本当に儲けが見込める、流行するレコードを創ろうとしている。

いつも通りどこへ行っても、男性メンバー達は“ビートルズ”、“ローリング・ストーンズ”などと呼ばれてしまう。イギリスには、カート、ロン、マレー、トムのような、長いもみ上げと片耳ピアスのグループなんて無いのに。黒い長髪なら誰でも、ビートルズと見なされるのね。シェリと私でさえ“ビートルズ”って呼ばれちゃう。全然、似てないわよ。

今日、エピックと弁護士[★]の所にブギ・ウギを連れて行き、彼はニューヨークの大社会と対面。ブギ・ウギが机やコート・ラックに駆け登っている時、エピックの社長が社長室に現れて、騒ぎを抑えるよう命じた。エピックの秘書は驚きの声を上げる。またもや騒ぎを起こしたゴールドブライアーズ……でもエピックのA&Rマン、ポプ・モーガンはブギーを気に入った様子だった。

クリストファー・オテルには、ブギーを置く空き部屋が幾つもあったので、夜には睡眠の邪魔にならなかった。ご存知の通り、彼は夜行性。ある夜中に受付の人から、何とか部屋を抜け出したブギーが、オテルの5階を走り回っているという知らせがあった。ブギーも冒険好きなのね。

数日前、私達は全員、ロルフ・ハリス Rolf Harrisのレコーディング・セッションに参加した。ロルフは最初に会った芸能人の一人で、以来ずっと良き友人だ。彼の全ての曲(前途の通り、彼のヒット曲“Tie Me Kangaroo Down”)は、ワープル・ボード★とディジャリドゥー★★を使って出す効果音が入っている。

★—乗っかってバランスをとる運動器具
★★—オーストラリア原住民アボリジニーの
民俗楽器

ニューヨーク(先週のレコーディング)——レコーディングが終わるといつも、新兵訓練を終えたような気分になります。新しいレコード用の曲は、多くの大変な作業によって完成しました。それぞれの曲が完璧な作品になるように、たくさんの編集作業があり、意見を聞くための協力スタッフがいます。たくさんのマイク、楽器、協力スタッフ、まるで音楽のジャングル。実際、マイクを掴むにはスタジオ内を掻き分けて行かなければなりません。カートのギター・シールド★に私がつまずいて、アンプからジャックが抜けたことが笑いを誘ったのですが、それを直しに来てくれたエンジニアのフランクもまた、ギターにぶつかってしまいました。

★—アンプからギターに繋がるコード

私達は計5回のセッションで8曲を録音しました。皆のお気に入りには依然、“Nothing Wrong With You”でした。レコーディング前に予測していた“June Bride Baby”に代わり、今はこの曲の方がシングル曲に相応しいと感じていますが、常に予測不可能なこのビジネスにおいて、未だ上層部の人達は“June Bride Baby”を推しています……シングルは翌年1月に発売される予定です。

マレーの新しいニックネームは“マウンテン・マレー”。私達が旅をするとき、いつも彼が「俺達まだ山の中にいるの?」って言うからです。いつも古い登山帽を被っているし(寝るときも被っていそう)、彼の帽子さえ“マウンテン・マレー”って呼びます。現在、彼の大事な物は2つ——帽子と書類カバン。カートも帽子のおしゃれをし始め、今はウェストサイドのギャングみたいな帽子を被っています。ロンも、彼の性格に合った帽子を持っています。それはえび茶色の毛糸の帽子で、それを被ると、7人の小人のメンバーに見えます……まるで“寝ぼすけ”、そう、いつもの彼ね。食事が終わると彼はいつも言います。「寝て忘れようっと」彼は、私が知る中で唯一の睡眠薬人間。前にお話した通り、運転の時も半分寝てるし。ロンが運転したら、車線の端から端に車が優雅に揺れて、何かおかしいぞ、っていうことになります。

ゴールドブライアーズのメンバーって皆、変だと思う。最も普通じゃないのがトムの喋り方で、まるで子供がモゴモゴ喋ってるみたい。ちょっと可愛い喋り方だとは思うけど、何言ってるかいつも分かりません。

レコーディング・セッションの後、ついに次の目的地が決定しました。二度目のウィニペグでの仕事依頼と同時に、チャールストンからも5週間契約のオファーを受けた私達は、16、7度も気温の低いカナダの気候が嫌だったので、より南方にあるチャールトンへ車で向かうことを決めました。カナダだったら車が持ちこたえられないし、クマちゃんは死んでしまうだろうし、他の薄着してるメンバー達も、長くは耐えられないだろうから。

年上で賢いシェリは抜け目が無く、ボーイフレンドのキースと飛行機でチャールストンへ飛びました。さあ、また旅に出るぞ! ……トムが言う“クサイ旅”とは、この旅のことをよく表しています。なぜなら時間が無くて車の掃除もしていないし、“ウッディ号”の旅は凄く砂埃が舞うし、おまけにクマちゃんを連れて行くと、腐った臭いの旅になってしまうからです。

チャールストン(初めの2週間)——「おかえり、おかえり」——再び、ここにやって来ました。クリスマスを過ごすには、この地は二番目にいい場所だと感じています。“チャールストンの両親”を誰にすればいいのか決められないくらい、本当にたくさんの人が親身に接してくれるからです。私達はルーサーの家に泊りました。彼の父がスペインで兵役中で、母と姉もそこにいるので、彼はここで独りで暮しています。まさしく巨大な家。私達が泊まって以来、ここはまるで寄宿舎のようでした。何人も男性がいるので、ボーイ・スカウト・キャンプみたいでした。

ウェイフェアーズこと300キングのオーナー達は、部屋を綺麗にするメイドを手配し、料理も手伝ってくれました。南部では、メイドの給料がとても手頃



です。メイドの名前は、アイダ・メイ。語呂がいいので、アイダ・メイ・メイドと呼んでいました。彼女はとても印象的な、厚さ1インチ(2.5cm)ほどのメガネをかけて熱心に働いてくれるのですが、それでも十分に目が見えず、ディナーを半分も床に落としてしまったことがあります。でも皆彼女が大好きでした。

今年は、ルーサーが特別なゴールドブライアーズ・クリスマス・カードを準備しました。私達は約200通の宛名を書き、うち100通は業界向けでした。少なくとも今回のクリスマスは、たくさんの人々が私達の気持ち(と宛名書きの大変さ)を分かってくれたことでしょう。

軍隊向けかと思えるほどの、盛大なクリスマス・ディナーでした。巨大なターキー、ハム、フルーツ・サラダ、詰物、バイクド・ポテト、調理した野菜と生野菜、クランベリーズ、それにもっともたくさん。ルーサーの家でディナーを準備し、“聖なるゴツタ煮”を作り、クリスマス精神を保ちました。サマー神父の家でのディナーだったので、いい雰囲気でした。あまりにもたくさんの食べ物で、いくら食べてもほとんど量が減ったように見えません。これだけあれば、来週も食料品店に行かずに済みそうです。ブギーは、熱心なゴールドブライアーズ・ファンからペロペロ・キャンディを幾つかもらって、クリスマスの日を楽しみました。ブタみたいに包み紙まで食べたブギーは、体調が戻るのにクリスマス・パーティーから2日かかりました。

クリスマス・イヴやクリスマスの日にはクラブで演奏することには、あまり気が進まなかったのですが、そこはショービズ。でもステージでたくさんのクリスマス・ソングを覚えていたことで、クリスマスの祝宴が台無しになるようなことはありませんでした。

カートのお母さんは、着るのにワクワクするようなステージ衣装をシェリと私に新しく作ってくれました。今まで着ていた出来の悪いロング・スカートは、擦り切れるほど着て、ボロボロだったのです。男性メンバー達も、まだピーターパンのようなチューニックに、二色のアース・カラーのブーツ姿でしたが、今週にも新しいものを注文する筈なので、前のものはお蔵入りになるでしょう。一晩に同じ衣装で4、5セットの演奏すると、本当に飽きてしまいます。春が訪れるときのように、洋服タンスに新しいステージ衣装が追加されるのが楽しみです。

間もなく発売の新しいシングルのヒットに備えて、皆でショーに磨きをかけ、新しい曲をもっと追加しようとしていました。チャールストンでの公演が始まってから2週間、ショーは大成功を収めました。ほとんどのショーで、クラブがぎゅうぎゅうになるまで観客が集まりました。あと3週間ここで演奏して、次にどのクラブに行くのか、まだ誰にも分かりません。西海岸でのショーを熱望しているけれど、またいつものように、ハプニングが起こることでしょう！

The GoldeBriars' Story
“Whatever Happened to Jezebel?”
The GoldeBriars' Epic Years
ジェザベルに何があったの…?

CHAPTER

8

“FAME OR FAMINE”

名声か飢饉か

第8章 “名声か飢饉か”



1月1日(1965年)…金曜日——チャールストーン—新年の決断…“名声か飢饉か”

夜中の12時が過ぎ、新年のダンス・パーティーが始まった。人々はラッパを鳴らし、おかしい小さな帽子を被っている。ミッキーとクラブのウェイター達は、デコレーション・ペーパーを飾り、風船をヘリウムで膨らませた。カートの新しいガールフレンドのベヴと、トムの奥さんのジャネットが新年の休暇を取って、ミネソタからチャールストーンにやって来た。髪を金髪に変えたベヴは、誰もがシェリと彼女が姉妹か双子だと間違えるほど、よく似ている。

ブギ・ウギは、シェリによく似てると思う。ところで最近になって、実はそのクマちゃんがメスだってことを男性メンバー達が発見したので、これで男性メンバーは女性メンバーより1人多いだけ、という状態になった。

別の夜、ダッジョことサマー師は、教会での変わった経験を話してくれた。1)ある日曜日のミサの最中、教会団体の一人が、ミサで使う丸いウエハースを口に入れる代りに、こっそりポケットに入れた。2)結婚式の習慣で、花嫁になるために、古い物、新しい物、借りた物、青色の物を纏^{まと}うというのがあり……借りた物のサイズが合っていなかったのか、彼女が教会のヴァージン・ロードを歩くときにパンティーが足首までズレ落ちた。3)或るじめじめした朝に、師が葬式の説教を唱えていたとき、礼拝後の祝祷を言うためにダッジョが上体を曲げると、土が彼の足元で崩れ、背丈より深い墓穴にハデに落ちてしまった。



★——“June Bride Baby” / “I’m Gonna Marry You”

1月7日…木曜日——カートが21歳の成人になったので、昨晚300キングのショーの後でサプライズ・パーティー。エピックから先日のレコーディングのテープが届き、皆で次のシングル曲★を聴いて、さらに盛り上がった。私達が一番に推していた曲は“Nothing Wrong With You”だったけど。

よりたくさんのファンレターをもらうようになった男性メンバー達が、少女達の腕にサインする。マレーは、彼の名前が500回書かれた手紙と、オモチャの汽車をもらった……ある夜のショーで、マレーがギターで汽車が走る音を演奏し、少女達が歓喜の声を上げたことが、その由来。

先週の日曜日、農園に行って新鮮な野外の空気を吸い込んで、馬やスクーターに乗ったり、ジューシーなステーキを食べたりしたので、皆まだ筋肉が痛くて、体調は完全に回復していない状態。

現在“ウッディ号”を修繕中——男性メンバー達は、解体屋で新しいスピードメーターを物色している。新しいタイヤ、シートや中身のクッションも付け替え、車体も塗り替えて、一連のチェックも済ませたところ。

キースは、シェリとゴールドブライアーズ一団から離れ、カリフォルニアへ向かい、彼自身の仕事を続けることになった。ゴールドブライアーズの新曲テープを彼が持ち、彼やウェイフェアーズの面々がカリフォルニアのクラブでプレイするというので、ゴールドブライアーズと西海岸とが、何となく繋がっている。

仕事の予定は、2月7日にニューヨークでコンサートが決定。さらに、はっきりとはしていないが、2月8日から14日までがミシガン州ランシングで、16日から2週間コロラド州デンバーの会場“エキソダス”でのショー。デンバーの後、カリフォルニア州のどこかで演奏が決まればいいなあ、と皆が思っている。

新しく先週火曜日から始まった、スポンサー付トップ40形式の全国放送TV番組ハラバラー Hullabaloo。一場面の画面背景に、数々のアルバム・ジャケットを並べた壁があり、そこにゴールドブライアーズの2枚のアルバムを見つけた。番組初放送に出演したってことよね。

昨晚ゴールドブライアーズがクラブで演奏してる間、ブギーがルーサーの家で冒険旅行をした様子。どうにか檻を出て、そこらじゅうの物を荒し回った……手作りケーキ、ビスケット、シェリと皆の大事な花飾り。ブギーの小さな胃が袋状に張っているのを見て、笑いが止まらない私達。現在、私達はルーサーに、マネージャーとしての仕事を、ゆっくり着実に仕込んでいる。彼は呑み込みが早く、その他の雑用や、ショーの照明までこなしてくれていて、皆とても彼に信頼を置いている。



1月23日から26日…火曜日～金曜日(チャールストンからカナダへ)——私達ゴールドブライアーズは2度目のチャールストンを離れ、現在、カナダに向かっている。新たな冒険旅行が始まった。旅が始まると雨、雪、霧に見舞われ、いきなり困難に直面。今回の旅は今までと違って、グループを勇敢に支えるロード・マネージャーのルーサーがいて、彼がカナダ国境までほとんど運転してくれた……彼は道の達人。全ての道はローマに繋がる(そしてカナダにも)ってのは知ってるけれど、どんな小道も把握してるわけではない……彼は、道無き道も進んで行ってく感じ。修復された“ウッディ号”は、以前とは少し様子が変わる。a.)えび茶色からグレーに塗り替えられた……より陰鬱になったみたい。b.)新しいスピードメーター……これでスピードの出しすぎに気付ける。c.)新しい車内装飾材を床とサイドパネルの内側に付けた……ガソリンスタンド店員のミスが1つ——装飾材を付け替える時に、支えを付け忘れた。雨が降り始め、足元から噴出した水にカートだけが被害に遭う……無礼な車？ カートを洗うため？ d.)時間がなくて、ガソリンスタンド店員が床に断熱材を入れなかったの、エンジンの熱が全員の足元を直撃。e.)現在3つの座席……他の車から持ってきた予備席が後部座席に付いた。後部には、何とか乗れるって感じ。相変わらずトラブルが絶えず、チャールストンを出発したのに、これからチャールストンに向かう途中って感じに思える。やっと車の修理が終わる。車が生まれ変わった。どうせまた修理が必要になるんだろうけど。

ブギ・ウギが、驚くほど大人しい状態。口籠はさせずに鎮静剤だけを投与した。ほかに良い手があるかしら？

次の契約はロンドン、カナダの2箇所、それぞれベテランのフォーク・シンガー、オスカー・ブランドが司会の歌番組の収録。ゴールドブライアーズにとっては不利なことに、これは厳格なフォーク番組。でもベストを尽くして商業用フォークを歌うつもり。

ヴァージニア州ブルーリッジ山脈にて……1000マイル(約1600km)を走る。山々の眺めには、大きなジェット・コースターのコースが思い浮かび、山頂のいくつかは、白い帽子を被っている様に見える。つる草の這う家々は空虚で孤独な感じで、虫や野生動物の棲み家になっていそう。

☆☆☆私達が外人になる……私達のほとんど全員にとっては、初めてのトラブル。オスカー・ブランド・ショーのディレクター本人の認可無しには、カナダ国境を越えられないということが、出入国管理局で発覚。多分、何かしら言い訳したり嘘をついて越境し、カナダ国内で法を冒す人が多いからかしら。まあ、外国に行ったことのない私にとっては、理解し難いことだけど……当然の事ながら、またしてもこの問題は、ブッキング事務所が正しい法的手続きを済ませていなかった、という不手際から。局員から浴びせられる質問は、何となく私達が犯罪者みたいな扱いで……両手を挙げさせられて、所持品の引き渡しを要求されたところで、どうせコートのポケットには歯ブラシぐらいしかなく、そんなものは何の証しにもならないんだろうけど……局員が私達に、申請する動物が居るのかを訊いた。ブギーは病気だし、彼らがブギーの越境を許可するとは思えなかったので、それを訊かれなくなかったけど、車にクマがいると申告した。局員はブギーを確認し、予防注射の証明書の提示を要求。シェリが、ちょっと便秘の弱々しいブギーを局内に運び、優しくカウンターに置いた。その時まさにブギーが便秘状態を脱し……カウンターの隅まで走ってキーキー鳴き、うんちをして、カウンターから飛び降りると部屋中を駆け回った。局員はティッシュやペーパータオルでうんちを拭いてまわり、シェリは「ブギーちゃん、もうおよしなさい!」と叫び続ける。結局、局員は元気なブギーを越境可能と判断。とにかく、そこから早くブギーを出したかったみたい。

ブッキング事務所とカナダの仕事仲間に、解決のための助けを求めている間、国境近くにあるアメリカ警察署の床で寝た……ホテルに泊るお金が無いので……外は極寒、車は色々調子悪いし、もしこんな状態で車を走らせたら、どうせ一酸化炭素中毒で永遠の眠りに就くのがオチ。そこで優しい警官が、私達のいきさつを聞いて、夜は警察署の床で寝ることを許してくれた。でも床が冷たすぎて、結局は車で寝たんだけど、暑くて死にそうだった。次の朝、たくさんの人が珍しがって、車内の私達をジロジロ見ている……7人と1匹のクマが重なり合って寝ている姿は、きっといい見世物だったでしょう。

……時間が問題を解決し、カナダへの入国を許された。カナダの仕事仲間に交渉し、ついに私達のカナダへの入国目的を口頭で出入国管理局員に認可させてくれた。それから急いでロンドン市のホテルでのショーの契約を済ませ、ホッと一安心。

新しい街に入ると、誰も知り合いがいなくてトラブルが多いことから、グループに新しいメンバーが加わるような事態が起こるのだと気付いた。たくさんの理由で、本当にメンバーがもう1人必要だと思う。日々の困難から守られているという安心感を得るため、笑い合える仲間として、そしてグループとして計画したことを成し遂げるために。



2月3日…水曜日(1965年)——オスカー・ブランド・ショーのTV収録の成果。グループにとって充実した仕事になるよう、準備したことは出来たけれど、“フォークの雰囲気”の中で、ちょっと場違いな自分達を感じた。



2月7日…日曜日——昨日、ニューヨーク州南西オリーンの山中にある大学で、初めてのカレッジ・コンサート。最近ずっと、山から何かを得てるって感じ。アメリカでも有数のバスケット・チームが、ここオリーンの“ヒップ”なカレッジ・タウンにあったなんて驚き。大学に着くと、またもやフォーク・ライブとしてゴールドブライアーズがブッキングされてることに“大喜び”……初期4人のオリジナル・メンバー時代から、私達は厳正なフォーク・グループであった例が無く、新しいメンバーが増えてサウンドが拡張されてからも、フォーク目当てや、初期のゴールドブライアーズ・サウンド目当ての人々を本当に次々と驚かせてきた。用意された音響システムが、ロック・ミュージックを演奏するゴールドブライアーズG.B.'sにはあまりにもお粗末だったため、アンプの歪みや破裂音を聴きながら、特別に演奏を構成し直さなければならなかった。私達は相変らず、嵐によって大学全体をさらって行く“はちゃめチャグループ”。



2月14日から16日…日曜日～火曜日(チャールストンからデンバーへ)——チャールストンに少しばかり立ち寄って、デンバーへと発つ! ルーサーはゴールドブライアーズを離れ、チャールストンに戻った……ロード・マネージャーの仕事が、彼が思っていたのと違い過ぎて参ってしまったのね、多分。

チャールストンでは、音楽のキャリアを育てるため西海岸に移るザ・ウェイフェアーズのショーン・ボニウェル Sean Bonniwell を車で拾って、デンバーまで一緒に行く。

たくさんの作家と同様に、ショーンは自分の音楽への思い入れが深く、それが能力に反映されている……ここに彼の詞をひとつ。

The shepherd of music & tears
The echo's of tomorrow hears
The candy cane,
The marble melodies of the insane,
And puts them away
for yesterday and the day before,
And he is
Because he is his own tears.
The truth is only so when one utters it,
And another agrees

羊飼いの音楽と涙
明日に耳を澄ませると、こだまする
懐かしの棒キャンディ
おかしい渦巻きメロディ
それら皆に、さよならしよう
昨日、過去のために
彼らしく
なぜなら彼は自身の涙
誰かがうなずき、言葉にすれば
それは真実になっていく

ウェイフェアーズは結成して以来、長い間活動していたけれど、悲しいことに解散し、メンバーはそれぞれの道を進み始めた。ゴールドブライアーズのメンバーは皆、ショーンが好きなので、ジブシー・ワゴンに彼が乗るのを誰も嫌がらなかった。スシ詰め乗車に、彼の心の準備ができていたかどうかは知らないけれど、旅の途中、ロード・マネージャー役と、次の会場デンバーのエキソダス・クラブでの仕事の世話を、ショーンが引き受けると言ってくれた。

天気予報と地図に従う旅で、私達はこの後、吹雪に突っ込み砂漠を横切ることになると知る……何という組み合わせ！ ブギーは4つ目の檻の中。前の3つの檻は、噛んで穴を開けてしまったから。檻に入れておくのが、あまりにもかわいそうで、時々誰かが暇を見つけてはブギーと一緒に遊んでやっている。

旅にはたくさんの不平不満がつきもの。販売機のキャンディを買ったり、脂ぎったスプーンのレストランで食べたり、貧しい食事や、あちこちに転がっての僅かな睡眠。

テキサスのガソリン・スタンドで、孤独で寒そうに歩き回っていた寂しい目の犬を拾う。スタンドの店名に因^{ちな}んで、フィナと名付けられ、ワゴンの乗組員としてG.B.'s、ショーン、クマちゃんに続いて、その犬も加えられた。何だか、オズの魔法使いが蘇^{よみがえ}ったみたい。レストランやお店で、私達を見て子供を隠しながらお店に入る人がたまにいるのに気づく。ご存知の通り、しばしばゴールドブライアーズはジブシーの団に勘違いされる。ジブシーは小さな子供を放り投げる、と信じられていて……そんな目で見られてしまう。またある時は、どんな宗派に属しているのか訊かれたりもする。



2月23日…火曜日(エキソダスにて)——エキソダスでのショーが1週間終わり、残りあと1週間。ゴールドブライアーズがアンプを使ってライブをするまでは、このクラブは厳正なフォーク・クラブだった。敵意ある観客がひとりいた以外は、受け入れは想像していたよりは良かった……彼らは、ものすごく妙な表情をして——彼らにとって私達は、どこかの少数民族が何かみたいに奇妙で、啞然とさせてしまったみたい。

デンバーは海拔1マイルの高地として知られ、空気が薄く、私達の呼吸もそれに順応している様。エキソダスでのショーの最初の2日間は、歌うのに大変だったけれど、もう慣れてしまった。デンバーでもそうだったように、気候の変化で、シェリ、カートそして私の声が何度もしゃがれたので、喉のためにステージ上に滅菌スプレーをかけ、風邪をこじらせないように咳止めシロップを飲む。私達の声は、最高の状態を保つ努力のお陰で、綺麗に響いたかも知れないけれど、時には薬で頭がフラフラだったこともある。

エキソダスでのショー 2週目——ラッキーなことに、ローカル新聞2つに、ゴールドブライアーズに好意的な記事が載り、いつもとは違う観客に、いつもと違う見方をされる。例を挙げると、本の表紙だけを見ても、中身までは分からないのと同じで、新聞ではゴールドブライアーズの風変わりな様子までは分からないのだ……先週、私は取材で、メンバー達はモダンでカッコいいと説明した。そう、確かにモダン。そのモダンさは、この世界が未だ私達を受け入

れる準備が出来ていないほど……4人の男と2人の女が火曜日のエキソダスのステージに上がると、観客は唖然とし、呆然と立ち尽していた。

別紙からの記事——セント・バーナード・ヘアにピアスの4人の男と、漫画アダムス・ファミリーみたいな風貌の女2人がエキソダスにて、完全なる新しいサウンドで観客を魅了した……などなど。

エキソダスでショーを始めた時点では、いつものように、まだ次の契約地がどこなのかは未定でした。ボブ・スタインが味方の、ラッキーなゴールドブライアーズ。カリフォルニア州パサディナの“アイス・ハウス”のオーナーである彼が、ゴールドブライアーズのいい噂を聞きつけて、それを確かめるために特別にデンバーへ飛行機で駆け付けてくれました。彼が観に来るのは夕方のショーでした。アイス・ハウスはしばらく、大方のほかの店と同じような営業をしていたフォーク・クラブでしたが、流行に敏感でヒップな店にするために、新しい才能を探していたところでした。そこでボブ・スタインは、ユニークな私達を適任とし、エキソダスの後、3週間の契約を直々に取り付けに来てくれたのです。さあ、大変な興奮です！ 皆、次はカリフォルニアに行きたがっていて、今それが実現したのでから……気候が少し暖かい所に移るのも悪くはありません。デンバーでは2、3度吹雪に遭いました。故郷のミネソタは雪で知られているし、それに慣れてはいましたが、その吹雪は突然の、その年最初のものでした。早く金色に日焼けしたいわ！

★—99ページ参照

カリフォルニア州に向けて出発する前に、私達の仕事をとてもよく気遣ってくれたショーンが撮った、6人のメンバーになって初めてのプロモ写真★が出来ました。ボブ・スタインはそれをとても気に入り、もうすぐ始まるアイス・ハウスでのショーの宣伝に、それらを使いたい様子でした。それは本当に変わった写真でした。組まれたハシゴに、シェリ、カート、ロンが昇り、その傍にトム、マレー、私が寄り添っています。写真のタイトルは“駆け昇るスター達”（語呂合せ!）そして写真の側には小さな書き込み……「ゴールドブライアーズ、輝かしく澆刺^{はつらつ}とした演奏は、煌くポップ/フォーク/ロックの流星^{きらめ}に乗り、エピックからのアルバム、“The GoldeBriars”と“Straight Ahead”と共に成功へと突き進む」



カリフォルニア州に到着（パサディナのクラブ、アイス・ハウスとブエナ・パークのクラブ、“メッカ”を含む、3月2日火曜日～4月17日土曜日 1965年）——アイス・ハウスでの初演は、前列を占めるたくさんのカリフォルニアの新聞社と雑誌社のボーッと眺める記者達の批評のためのショーとなった。思いもしなかった今夜の結末……トムは酷い病状で、ファースト・ステージの途中で、さり気なく舞台袖へ降りると、観客はそれもショーの一部なんだと受け止めていた。午後のショーは全て5人で演奏され、1つの悪評を除いては、とても良い紙上評を得ることができた……でもその悪評が、とても面白い記事で……ゴールドブライアーズの全てを扱き下ろしたその記事を無くしてしまった！ ああそう、いつだったか、粉々にしちゃったのかしら。でも良い論評から名言をひとつ、本当に素晴らしい記事。男性メンバーについて「荒々しい髪型と歯によるギター演奏」 エキソダス・クラブもそうだったけれど、ここアイス・ハウスでも、私達は初のアンプ使用グループだった。



アイス・ハウス・クラブ用のプロモ写真

★—この後の66年、アソシエーションのこのシングル曲をカートがプロデュース

アイス・ハウスでの演奏期間中、“サーティーン・メン The Thirteen Men”というグループが、よく私達のショーを観に来ていたので、ショーとショーの合間に彼らに声をかけました。このサーティーン・メンから、“アソシエーション The Association”(“Along Comes Mary”★で知られる) というグループが誕生します。

アイス・ハウスでの3週間のショーを成功させた後、次に開く扉は、別のフォーク・クラブ、プエナ・パークのメッカです。ジョン・デンバーがそこでショーを終えた直後でした。観客にユニークなサウンドをお届けするのが好きなゴールドブライアーズなのに、なぜフォーク・ロック・ポップ・サウンドのためのクラブが無いの?? ブッキング事務所はいつも、次から次へと簡単に、最低な環境のクラブを見つけて来るし……客は相変わらず、私達が別の惑星から来たみたいな反応を示すし。

メッカでショーを続ける間、待ちに待ったシングルが発売されました! 春の訪れ、恋人達が春の恋に浮かれ始め、エピックは“June Bride Baby” / “I'm Gonna Marry You”を発売。グループの未来がこのシングルの成果に懸かっていると皆が分かっています。これが売れるか、それともゴールドブライアーズが終わるか。マレーによる最後の予算プランによると、もしシングルが売れず、その収入が得られなければ、計算上では1日1人あたり83セントと3分の1のお

金で過ごす以外に、グループで一緒にいられる手段が無いのです。私の洋服ダンスに望む物は、もっとファッショナブルな服を誰かのご好意で頂くこと、そして、私の財布の中身は、土曜日の教会のお皿に乗った寄付金くらい。お金が全てじゃないって分かっているけれど、あれば助けにはなるもの。シェリと私は、タンバリンをお恵み皿にしようって冗談をよく言ったものだけれど、これってちょっと、わざとらしい手段。

パッとしない時間の中で、誰かや何かがシーンをパッと明るく輝かせることがあります。今回について、それは誰なのか。彼の名はデヴィッド・ミリッシュ David Mirisch、ゲイル・ガーネットの宣伝責任者だった人物。ゲイルのことはよく知っていたし、その前の週のメッカでのショーで、ゴールドブライアーズとゲイルはプログラムを分担した間柄です。デヴィッドはゴールドブライアーズのショーをとてき気に入って、マネージメントを申し出てくれました。お願い、マネージャーが必要だわ! これまでは断続的に、マネージャーについて見通しが良くなる事はあったけれど、現実的には長続きしないのです。メンバーの誰も、グループ全体の面倒を見る者はおらず、ビジネス・ゲームにおいて、ずる賢く立ち回れる者もいません。仕事に対して私達が持っている知識なんて、経験から学んだ事しかないのです。学んだ事と言えば、最初、人に踏みじられた事くらい。

仕事始めにデヴィッド・ミリッシュは、ココナット・グローヴでのショーの仕事を持ってきました。チャリティ・ディナー会場にて一夜だけの演奏です。そこに集まったたくさんの有名タレントとショービズ関係者を前に、いい印象を与えることができました。この好機に、私達はオシャレして歌いました。シェリと私は、カートのママが縫った床までの丈の刺繍された2ピース・ドレス、男性メンバー達は貸衣装のタキシードを着ました。アンコールを受けた時は、とても幸せな気分でした。



4月27日…火曜日——ショービズ界は今、ゴールドブライアーズにとって、いい状況にあるみたい。数ヶ月以内に、ハラバラーとシンディグ、幾つかの地方のロック番組、サム・リドル・ショーの出演が決まりそう。ハラバラー・ショーのオーディション評価も高かった。プロデューサーのジャック・グッドは、ゴールドブライアーズの演奏は、今までで最も優れたライブ・オーディションだったと言ってくれた。新しいシングルが出て約1週間、キャッシュ・ボックスやビルボードの、様々な国内評価を得ている。



5月1日…土曜日——月が替わり、新たな障害が生じる。ロンが脱退。ショービズの世界に生きる人は、心の声が導くがままに生きる。ロンはゴールドブライアーズの音楽を信じているだろうけれど、他のグループからの誘いを受けた。このニュー・グループはショーン・ボニウェル率いる“ミュージック・マシン The Music Machine”。(この後“Talk, Talk”で全米チャート・トップ10に入る) キース・オルセンもベーシストとして、このグループに参加した。個々のメンバーに才能があって、サウンドを自分達でプロデュース出来るこのグループには、最上級の可能性があると思う。このグループは、大いにロンの才能で増強されていて、何人かの人が彼をアメリカ随一のドラマーだと明言している。ロンが(そして私達も)成功するのを祈る。その価値があるもの!

ロンの代わりを見つけて、ゴールドブライアーズの全ては上手く行っている。彼の名前って芸名みたい——ビル・テイラー Bill Taylor。巨人しながらに身長は6フィートと3インチ(2mちょっと)あり、かなり特徴のある顔。まるで、ビートルズのリンゴの兄みたい。私達が彼のロング・カール・ヘアを切るまでは、リンゴの姉の様でもあったけど。18~19歳のゴールドブライアーズの平均年齢にもフィットしている。たくさんの可能性がありそうだし、熱心に早く学び取るので、新しいメンバーとしてうまくやってくれそう。

現在、全員カリフォルニア州ハリウッドに住んでいる。特にシングルがブレイクすれば、ここの方が私達のビジネスには向いていそう。偶然の一致で、ゴールドブライアーズはグリーンプライアー・アパートに引越した。今のところ、お金になる仕事が入っていない。その代わり、グループを続けるお金を稼ぐため、時代の音にそぐう激しいロックの曲作りに、フルに時間を費やしている。

ニュース速報!!——昨日、どこかで、カート、新しいドラマーのビルと友人が、盗みの容疑で警察に連行された。カートが言うには、全てが映画のように進んだらしい。「4人の警察官が僕らを止めて手を挙げさせるんだ。彼らに従うことを厳く要求をされるまでは、冗談かと思ってた。警察官達の間違いが判明するまで、警察署で1時間以上も取調べを受けたんだよ」 フーッ! 速報終了! 興奮したわ!



グループと新メンバー——後列左にビル・テイラー、右にマレー、中段左からカート、ドーティー、トム・ドーホルト、中央にシェリ

ベヴァリー・ヒルズにある、有名で権威あるダンス・クラブ、ウィスキー・ア・ゴー・ゴーのオーディションを受け、そのために作り上げてきたダンス・ロック・ソングのレパートリーを披露すると直ぐに連絡があり、ちゃんと雇われるようになった。ミュージカルなサウンドが気に入ってもらえたみたい!

そうして、すぐさま私達がたくさんの新しいダンス曲を覚え始めると、彼らはとても楽しんで歌ったわ! カートはロイ・オービソンの曲さえもマスターし、彼がハーモニーをアレンジした“*It Hurts To Be In Love*”は、信じられないほどの美しさ。

ちょっと前、仕事仲間からの噂話では、ゴールドブライアーズのアルバムを聴いてとても感心したビートルズのマネージャー、ブライアン・エプスタインから、私達のニューヨークのブッキング事務所に電話があり、将来のゴールドブライアーズのイギリス・ツアーを気に留めておく、とのこと。もし今この噂が本当なら、すごい事が私達に起こってるってことだけど、ショービズ界の噂の蔓が、たった数人の間でどれ程に言葉がね^{つる}じれて伝わるかは、過去の経験でよく分かっているつもり。でも、この噂が真実だったらいいのに! ……そんな中、激しいロック作りのトライアルに没頭し続けている。

サード・アルバム用レコーディング曲(作者)

★—Bobb Goldsteinn は Bob Goldstein と
して知られる

- 1) June Bride Baby (written by Bobb Goldsteinn★ & Beverly Ross)
- 2) I'm Gonna Marry You (written by Bobb Goldsteinn)
- 3) Nothing More to Look Forward To (written by Richard Adler)
- 4) Freight Train Blues (written by Bob Dylan)
- 5) Linin' Track
- 6) The Last Two People on Earth
(written by Jerry Powell & Michael McWhinney)
- 7) Hush, Hush
- 8) There's Nothing Wrong with You that My Love Can't Cure
(written by Bobb Goldsteinn & Beverly Ross)
- 9) Licorice (written by Bobb Goldsteinn & Beverly Ross)
- 10) Walkin' Down the Line (written by Bob Dylan)
- 11) Tell It To The Wind (written by Bobb Goldsteinn & Jeff Barry)

当時の通常、アルバム収録曲全12曲に、選択候補として予めレコーディング
されていた曲。

- 1) My Song (Written by Curt first original song GoldeBriars learned)
- 2) Que Bonita
- 3) Sunshine Special
- 4) We Shall Overcome
- 5) Noah
- 6) Saro Jane (also performed on Hootenanny Show)

つまりこの時点でゴールドブライアーズのサード・アルバムは発売寸前で、
当時新しいマネージャーだったデヴィッド・ミリッシュは、TV番組シンディグ
とハラバルーとのブッキングを望んでいた。

こんな良い状況で、どうやって事が悪く運ばれるでしょう?????

The GoldeBriars' Story
“Whatever Happened to Jezebel?”
The GoldeBriars' Epic Years
ジェザベルに何があったの…?

CHAPTER
9
“THE FINALE”
終局

第9章 “終局”

たとえそれが無邪気な発言で、いい意味で言ったことだとしても、あなたが発したその言葉で誰かをカッとさせてしまったことはありませんか？ そうだとしたら、その事態は、それまでに積み積み重ねてきたものが、あなたの言葉で爆発してしまったものだったのかも知れません。それはきっと、ガスの充満した部屋が、あなたの擦るマッチの火種を待っているようなものだったのでしょう。そしてあなたは、そうなることを余儀なくされる。さて、音楽グループにも、それに似たようなことが起こり得るのです。不幸にも、ゴールドブライアーズは、そんなグループの1つとなってしまいました。

最悪のタイミングで起こった、この解散劇についてお話しするとしましょう。1965年6月1日火曜日……ヒットする可能性を秘めた3曲を含み、その完成までに、アルバム・タイトルとボブのライナーノーツを残すのみだった3rdアルバム発売直前の出来事。丸2年の活動、その成果と完成されたサウンドは、シェリと私がカートとの活動から離れることを決めた瞬間に、煙の中に埋もれてしまいました。とはいえ、私達姉妹がそれに先陣を切ったというわけではありません。すでにトム、ビル、マレーの3人は、カートと離れるという決断のもと、それぞれの道を歩き始めていたのです。彼らは、カートとの活動に対して居心地悪く感じ始めていたらしく、その気まずさは、ゴールドブライアーズのリハーサルにも影響を及ぼしていきました。会話すらがかなり困難な状況になり、とうとうお互いに口もきかないという事態にまで陥ってしまいました。そんなことから、7月7日、ついにゴールドブライアーズは“ゴーン(過ぎ去った)ブライアーズ”となってしまったのです。

シェリと私は、今までに一度もこのような状況に立たされたことがなく、それをうまく乗り切るには人生経験も乏しく、そして若すぎました。私達姉妹は結果を考えもせず行動し、そのことは救いにはなりません。レコード会社を含め、関係者全員にグループの状況について話しました。そしてそこから、レコード会社のギアはあらぬ方向へと回り始めたのです。

彼らがどうしようとしたか、読者の皆さんはお分かりでしょうか？ 何とエピック・レコードは、脱退した私達姉妹の代わりに適当なシンガーを雇って、そのグループをゴールドブライアーズと呼ぼうとしたのです！ こんなことが想像できるでしょうか？ しかし、かつてこれと同じ事態が、同エピック・レーベル内で、ボブとヴィレッジ・ストーンパーにも起こっていたのです。レコーディングしたメンバーとは違うメンバー構成で、同グループ名義のバンドが存在していましたが、当時のボブはそれについてコントロール不能でした。しかし、そんなグループは別のグループとして在るべきだと考え、私達はエピックの申し出を拒絶しました。このような経緯で、伝説の3rdアルバムは、未だ発表の機会を得ていないというわけなのです。

これで、私達ゴールドブライアーズの歴史の全てが、皆さんにご理解いただけたでしょう。そして、私自身の歴史もまたそこにあるのです。

長年に渡って、私自身が他人の親切を信じすぎないようにして生きてきたとしても、諺にあるように、私は他人に導かれて良き道を見出そうとしてきました。そしてその方法で、必ずしもがっかりしなくてすんだのでしょう。

ほとんどの人にとって、このように生きることは意義があることなのでしょう。そしてたくさんの人が、この生き方を試みるでしょう。人は正直に生きたいと願っている、ということを私は信じています。そしてその大切さは、うそやごまかしの埋め合わせが招いた、子供時代の悪夢のような体験から学ぶのです。私達が「これが正しいと思う」と言いながら日々を過ごしているように。

これまでの人生の旅で、私はとても素敵な場所へと誘われました。私には夫、娘、父という家族がいて、感謝すべき友達があります。そして文章を書くこと、歌うことという自分自身の芸術があります。健康で幸せな子供達が、その才能をのびのびと発揮して築く、より幸せな世界を夢見ています。「傷つけられた子供達は、その子供達を傷つける」というのは、単純明解なことだからです。

私は人生のなかで、たくさんの傷つけられた子供達と出会い、助け合い、共に生きてきました。たくさんの子供達は才能豊かで、とても美しい。しかしそれは彼ら自らが望んだものではないのです。彼らの才能が自らを苦しめてしまいます。神から授かったものの代わりに、彼らは、その才能ゆえに、周りの人間を傷つける災いの元として見られてしまうのです。そうしたことから私達に大きなダメージがもたらされてしまいました。その傷跡は、これからもずっと残るのです。

それでも音楽は生き続けます。私の、カートの、そしてゴールドブライアーズの音楽。世界中にサンシャイン・ポップを届けるために、私達が神から素敵な才能を授かり、新しい時代の夜明けに立っていた日々の思い出と共に。

ドーティー・ホルムバーグ-ワデル
2004年5月

CD-Rom eBook

The GoldeBriars' Story
“Whatever Happened to Jezebel?”
The GoldeBriars' Epic Years
ジェザベルに何があったの…?

GROUP CORNER

グループのコーナー

写真

素敵なレシピ

手紙からの抜粋

ノヴェルティ・ソングその他

詩

カートのマンガ

シェリのアート



エピックからの1stアルバム・プロモ写真



1965年ゴールドブライアーズ解散直前にリリースされたラスト・シングル
“JUNE BRIDE BABY”(A面)

ガーン!……いつの間にか私のレコードは反ってしまって聴けなくなっていました。

急報——喜ばしいことに、“JUNE BRIDE BABY”/“I’M GONNA MARRY YOU”のシングルは、カートのリコーディングに関する大々的なウェブサイト WWW.CURTBOETTCHER.COM を運営するマット・モーリング氏から提供されました)



1965年ゴールドブライアーズ解散直前にリリースされたラスト・シングル
“I'M GONNA MARRY YOU”(B面)

素敵なレシピ

ナッツ・ケーキはいかが？ これは私達がよく食べた、全てのチャールストン
育ちがバースデイケーキとして満足する、“チャールストン・ケーキ”のレシピ。
ホント、文句なし……男の子達が、むさぼるように食らいついてたわ。

棒状のバター ……………2本
砂糖 ……………1カップ
卵 ……………5コ
薄力粉、ふるいにかけて ……2カップ
ナッツ ……………1カップ
バニラ ……………ティースプーン 1杯半

バターを溶かし、そこに砂糖を全部入れます。卵を1コずつ入れてよく混ぜ合
わせませす。薄力粉を少し残して加えます。（ナッツ用に少し取っておく） そこ
でバニラを加えます。ボウルからミキサーを外してナッツを加え、スプーンで
混ぜませす。皿によく油を塗り、ケーキのたねを流し込みませす。（コックの一言
——プレーン・ケーキがお好きな方は、ナッツを入れずに）

チャールストン・ファンより

手紙からの抜粋

ボブ・ゴールドスタイン(私達の専属ライター)より

親愛なるクレイジー達へ

★一ボブがゴールドブライアーズと一緒に仕事をするために、エピックから受け取った小切手が旅費分しかなかったことから、彼は「1単語につき3セントしかもらえない」という皮肉を書いたようだ。彼はゴールドブライアーズへの信頼から、幾分か自腹を切ってまで仕事をしていた

★一変わったルックスのグループだったために、行く先々で変な目で見られることもしばしばだったのをボブが察している。実際、長旅では清潔にもできないし、カルト教団かジプシーの集団として見られて苦労した

1単語にたった3セントしかもらえないんで★、仕事はこれで終りにしようかな……分かるだろ？

万博は、もうそろそろ開催されるところだよ。もし我々がリハーサル中だったら、ボブおじさんは不憫に思って皆を万博へ連れ出すかもね。外に出るって楽しいじゃないか？

みんないい子にしてるかい？ 君達みたいなコミュン生活には大変な混乱があるだろうね★。車はどうなってる？ ニューヨークに戻るやつがあるかい？ またもう1台必要？ 公共機関で戻る？（お金の心配はしなくていい、君達のいようにすればいい）

この仕事が終わるまでショー(次のプロジェクト)の仕事は私はやるつもりはない、って言ったものだから、こっちは全くパニック状態だ。君達は株式市場が暴走した!って思うかもね。プロデューサーは、箱の中身を引っ掻き回されたせいで死にそうになってるよ。

まったく、君達って奴らは連続メロドラマなんかよりもっとハラハラさせてくれるよ。

ボブ・ゴールドスタイン

私の手紙は退屈だろうね。申し訳ないけど……すまないね……



サマー神父

サマー神父(ダッジョ)より

最近、私の生活で一番嬉しかったことは、君達に会う機会を持ち活気を感じられたことだよ。君達が私を心の父、または尊い神父とってくれるのも、重ねて嬉しいことだ。君達が必要としている言葉を贈ることが、私の出来る全てと分かってくれているだろう。君達の救いになる励ましならば何でもさせてもらうよ。君達は最も清らかなグループであり、それを決して失って欲しくない。年月を超え、それが君達に仕事と深みのある創造性をもたらしてくれるからだ。君達が運んでくれた輝きは私だけでなく、この古い町に住むたくさんの人々の心に触れたのだ……(チャールストン中のね)……神が君達に授けた才能は全てが刺激的で純粋。ならばそれを極限まで活かすのだ! クレイジー達よ! そうだろう?

いつでも、君達の“神父”サマー

急報——2001年、このゴールドブライアーズ・ストーリーの執筆中、思い出の箱から、まだ開封されてない神父さまからの手紙を見つけました。ただ「ああ…」とつぶやくことしか出来ず、サマー神父に今まで全く電話もしなかったことに私は罪を感じさせました。そこで、お返しをしようとインターネットで彼を探してみたのですが、見つけることが出来ませんでした。ですから、ここにその手紙を掲載させていただきます。

1965年5月5日

親愛なるクレイジー達へ

★—Lent(四旬節)の第一日

これは君達の心の神父からの便りで、この四旬節の聖灰水曜日★から約40日間続く、神聖な季節のお知らせだよ……乗り遅れないように、ね?

天気の良いカリフォルニアでいかがお過ごしかな……こちらは何も変わったことは無いが、ただ何週間も雨続きでウンザリしているよ。お天気の日が待ち遠しい。

懐かしのチャールストンは相変わらずで、私は四旬節が始まれば復活祭までとても忙しくなりそうだ。300キングSt.クラブのギャング達も同じく、素敵な店の営業、経営に忙しくしている様子だよ。辛抱強くしっかりやっていると思う。ルーサーや友人達みんなに代わって、私が君達によろしくと言っておこう。

この手紙にはとりわけ理由があるのだが……君達に借している\$30、ちょっとばかりに出来ない値段の電話料金のこと。素晴らしき西部への旅の前に、こちらにその電話料金支払分を送ってもらえると嬉しいのだが。恐らくもう私の電話を使うこともないだろうから、これが最後の請求だね。1月終わりまでの電話分……よろしく頼んだよ。

仕事の話はこれぐらいにして……君達がうまくいくことを本当に祈っているよ。ところで、デンバーのエピスコパル教会の写真を送ってもらえないかね? 約束したじゃないか!

上に書いたようなことは言いたくないんだが……もし君達に、お金が無かったらね……ところで、デンバーでの素敵な時間と、西部での大きな成功を祈っ

ているよ。また一緒にいられたらいいね。夏はどこにいるんだい？ 9月に神学校が始まるまで、私は暇だから……その頃、君達がどこにいるか捜してみるとするかな!? よし。

ではその時までよろしく。そして神のご加護を。送金、ありがとう。

いつでも、君達のビル神父より

March 5, 1965

Dear "Crazy Things":

This is your spiritual "father" reminding you that we have entered the holy season of Lent with Ash Wednesday now behind us and 40 days to go nearly....so let's get with Him okay?

How are you doing out there in sunny California ...it has been doing nothing but rain rain rain here for many weeks now and we are a littel tired of it all. Sunny days ahead though.

Things are going just fine here in old Charleston and I will be very busy now that Lent has started between now and Easter. The whole gang of friends down at 300 King St. are also just the same and trying to keep the wonderful place open and in business. I think they might make it with all patience and steadfastness. I am sure that Luther and all the friends there would greet you with this note to you from me.

I have a particular reason to write to you.... I have received another nice little telephone bill and the calls that you all still owe are to the amount of \$30.00. I would appreciate your sending to me that sum to cover calls you made on my phone before you left for the great WEST. I suspect that this is the last time I will have to ask you for this..since you are not using my phone any more. These were calls made the last part of January.... THANK YOU too.

Enough for business....I trully hope you are just fine. Why did not you not send to me a picture of the Episcopal Cathedral in Denver? You promised!

I hate to have to write to you about these things above.....especially if you are not financailly solvent ---BUT here is hoping you are a great success in the WEST and that you had a great time in Denver. I still would love to be with you. Where will you be this summer? You know I am going to be without much to do this summer while I wait for Seminary to start in September.... I might just look you up someplace where you might be!? OKAY.

Until again then...my best to you and the blessings of God. Thanks for sending me the money to cover your bill, too.

Always, *"Father" Bill*

ノヴェルティ・ソングその他

“HALF WAY HOME”

これはステージのテーマソングになった曲で、誰が書いたのかは分かりません。

The fields are green
There's spring on the hill
The sparrow sings his song
Each willow's won its place in the sun
But, where do I belong?
Or, am I still only halfway home?
Only halfway home?

大地は緑
丘には春の訪れ
雀は歌い
柳は陽のあたる場所でそよぐ
でも僕は何処にいるの?
まだ家へ帰る途中かな?
ただ家へ帰る途中かな?

I've wandered far in search of the dream
That's always 'round the bend
Will arms reach out? Will love welcome me?
Is this my journey's end?

夢を探して彷徨えば
くねくね曲がった道ばかり
辿りつけるかな? 愛に逢えるかな?
これが旅の終りなのかい?

“HAIKU”

カート・ベッチャー 作 1964年

この曲には日本の俳句が反映されています。2ndアルバム“Straight Ahead”収録曲

Falling snow
Time passes slow
Deep in thought
of memories forgotten

雪が降り
時静かなり
遠い記憶に

A summer breeze
The fragrant trees
My love at hand
Love is in the land

風そよぎ
夏薫る木々
地に愛溢れ

Summer's gone
The leaves are fluttering down
No love is mine
I search, but never find
Falling snow
Time passes slow
Deep in thought
of memories forgotten

夏が過ぎ
木の葉舞い散り
消え去りし愛
雪が降り
時静かなり
遠い記憶に

MISSISSIPPI MUD SONG INTRO

イントロはゴールドスタイン作。ミシシッピ・マッドは、ゴールドブライアーズ結成以前から
シェリと私が歌っていた古いスタイルの曲

CURT: Earlier we mentioned that the girls used to do a singing-dancing act before they- and we- became the GoldeBriars. When we signed contracts with them, their agent at the time was their Grandmother- a fantastically spry 80 year old who still wears MU Mus and straw hats with unraveled strands that stick out to here, with things like toy crocodiles and little golf clubs, and tiny beer cans sewed on them...and sun glasses, and the whole bit-

DOTTI: Which is alright if you live in Florida- but this was all in Minnesota, so it was a little strange-

SHERI: But she was wonderful. She booked us into all the ladies teas-

DOTTI: And the local bars- although she didn't drink- not a drop. Honestly. And we'd do our specialties: We had little skirts with suspenders that we'd snap during Feudin', Fightin' and a-Fussin'.

SHERI: And we sang Lullaby of Birdland, and Shanty Town, and Third Man Theme.

DOTTI: Which isn't an easy song to do- without music- I mean instruments.

CURT: As I was saying, Agent Granny was very suspicious of this new act we were going to do, and she felt I wouldn't let them do their specialties anymore-

DOTTI: And the people just enjoyed us so much- and our little movements and everything.

CURTS: So, in the contract, there is clause which says that every other set, the girls get to do one of their specialties...So, here it is, Cocoa Beach! The Holmberg Highlight Sisters of Hugo, Minnesota!

カート: 思えばその昔、ゴールドブライアーズ結成前に少女達が歌い踊った曲。僕らが結成した当時、彼女達のエージェントはお婆ちゃん、ムームーに三つ編みが突出た麦藁帽姿、おもちゃのワニやゴルフクラブ、小さなビール缶アップリケにサングラスなんかがお似合いの、元気な80歳だった。

ドーティー: フロリダならありえる話だけど、これは全てミネソタの話、だから可笑しいの。

シェリ: でも素晴らしいお婆ちゃん。彼女は私達を全てのお茶会にブッキングしたの。

ドーティー: そしてローカル・バーにもね。正直な話、お婆ちゃんは一滴も飲まないけど。で、私達は十八番^{おはこ}をやるの。サスペンダー付の小さなスカートで、指を弾きながらFeudin', Fightin' and a-Fussinを歌ったわ。

シェリ: バードランドの子守歌、シャンティ・タウン、第三の男のテーマも歌ったのよ。

ドーティー: 難しい歌よ、音楽無しで歌うのは。伴奏無しってことね。

カート: 僕が言いたかったのは、エージェントお婆ちゃんがこの新しいショーの在り方をひどく疑って、もう二度と十八番を披露させないわって思ったってこと。

ドーティー: お客さん達は、このムーヴメントやショーの全てをただ楽しんでくれたわ。

カート: 僕らの契約には、どのショーでも彼女達がその十八番を披露するって決まり事があったもんだから……さあ、行くよ、ココア・ビーチの皆さん! ミネソタはヒューゴからやって来た、ホルムバーク・ハイライト・シスターズです!

“THE LAST TWO PEOPLE ON EARTH”

マイケル・マクウィニー&ジェルー・パウエル 作詞・作曲

So, it was written that man's hate for man
Would poison the skies and would blacken the land,
Now there is peace, but the price was so high
The world was destroyed, leaving just you and I.

それは憎しみについての物語
人は空を汚し、大地を陰らせ
平和は戻った、大きな犠牲の上に
世界は滅び、残ったのは君と僕だけ

Yes, we are the last two people on earth
Now, we've got to try for all that it's worth
To build a brand new world
Yes, we are the last two people
How does it feel to be Adam and Eve
Though this has happened, we still must believe
That life can begin in a garden of dust
The whole human race is depending on us.

そうさ、僕らは地球に残った最後の二人
さあ、全てが良くなるように生きてみよう
新しい世界を創るために
そうさ、僕らは最後の二人
アダムとイヴみたいなもんさ
こうなっても、まだ信じなきゃ
楽園の民として生きていけるってことを
この世界は僕らにかかっているのさ

Let's put our hearts together
There's nothing we can't face
Now hate is gone forever
And love has taken its place

心を一つに合わせよう
君と僕しかいないんだから
今、憎しみは永遠に遠のいて
愛がそれにとってかわる

For we are the last two people on earth
Yes, we are the last two people on earth

地球に残された最後の二人なのだから
そうさ、僕らは地球に残った最後の二人

Published 2004 Take Home Tunes/ASCAP

“NO MORE BOMB”

マイケル・マクウィニー&ジェルー・パウエル 作詞・作曲

Refrain:

No more bomb, no more bomb
No more big bad bomb
No more bang, bang
From dee boom, boom
Sit beneath dee palm
No more bomb, no more bomb
No more big bad bomb
No more bang, bang
From dee boom, boom
Everything is calm

Dee world may be full of corrosions
But it is a wise and an old one
And it just learned that atom explosions
Make much hotter wars than dee cold ones
At last Dee-day has finally come
When coconut milk has no strontium

(Repeat refrain)

No more are my fingernails way down
For waiting in fear for dee warnin’
No more do we pray when we lay down
at they’ll be a world in dee mornin’
Since I cannot see one mushroom cloud
I’m teaching my child to sing out loud

(Repeat refrain)

※

バクダン反対、バクダン反対
危険な巨大バクダン反対
ズドンズドンは止めて
バクダンの轟きはイヤさ
今にも上から降ってきそう
バクダン反対、バクダン反対
危険な巨大バクダン反対
ズドンズドンは止めて
バクダンの轟きはイヤさ
すべては悲しい静けさにつつまれて

世界は徐々に蝕まれているかも
でもそれは昔からある賢い考え
原子バクダンに学ぶのは
悲惨な戦争を招くってこと
ついにその日がやって来て
核の悪魔がばら撒かれる

(※繰返し)

こりごりなのは
恐れながら警告を待つこと
眠る時に祈りたくない
明日の朝が来ますようになって
キノコ雲一つ無い世界で
大きな声で子供に歌って聴かせよう

(※繰返し)

Published 2004 Take Home Tunes/ASCAP

“SO GOOD, SO LONG”

ボブ・ゴールドスタイン 作

Well, I've been so good for so long
I'm going out of my mind
Yeah, I've been so good for so long
I'm going out of my mind

ずっと楽しかった
いつまでも忘れないさ
ああ、楽しかった
いつまでも忘れないさ

CURT: For the past (2 weeks) (Charleston's)
where I've been.
I've been looking' so hard,
but I can't find no sin.

カート: チャールストンで過ごした、この2週間
探しても探しても
悪い所が見当たらない

Well, I've been so good for so long
I'm going out of my mind
It would feel so good to do some wrong
But, there ain't nothing I can find

ああ、楽しかった
いつまでも忘れないさ
少しばかりの思い違いもいいもんさ
でも全然それも見つからない

MURRAY: I walk down the street and see a sign
that says BAR.
But, when I get closer, it spells out DAR.

マレー: 道を歩くとBARの看板を見つけたよ
でも近づいたら米国愛国婦人会DAR★だった

Oh, I've been so good for so long
I'm going out of my mind
Yeah, I've been sooo good for sooo long
I'm going out of my mind

ずっと楽しかった
いつまでも忘れないさ
すっごく楽しかった
いつまでも忘れないさ

TOM: The girls I seen, well they don't tease or
flirt.
Well, you call this a garden spot,
so where's the dirt?

トム: 少女達は人をからかったりしない
ここが庭だって言うなら
土はどこなんだい?

Oh, I've been so good for so long
I'm going out of my mind
Well, I've been so good for so long
I'm almost losin' my mind

ずっと楽しかった
いつまでも忘れないさ
すっごく楽しかった
心を奪われそうさ

SHERI & DOTTI: Now, I'm sure there must be
scandals and some messin' around. Well, please
don't hide it from me, just cause I'm new in town.

シェリ&ドーティー: スキャンダルや
ゴタゴタだってあるはずよ
さあ、私からそれを隠してちょうだい。
だってこの街の新入りなんだから

Cause I've been so good for so long
I'm going out of my MIND.

ずっと楽しかった
いつまでも忘れないさ

★—1890年に組織された革命期の米国人子孫からなる団体。
The Daughters of the American Revolution

Published 2004 Take Home Tunes/ASCAP

“THE GLUE SONG”

ボブ・ゴールドスタイン 作 1964年

私達が作った曲で、ショーでの安全パイの曲でもあり、“Mulberry Bush”★のメロディで歌います。

Did you all know that model glue
That model glue can be bad for you?
Did you know 'bout model glue
Hey, Jimmy and Herby and Sidney?

知ってたかい?
接着剤って体に悪いんだってさ
知ってたかい?
ねえジミー、ハービー、シドニー

(It's) all right to use it in building a plane
or making a tunnel to go with a train-
But use it for sniffing—
“It weakens your brain” and perforates your kidney!

飛行機作りにゃいいかもね
汽車のトンネルにもね
でも鼻で吸っちゃだめさ
バカになっちゃうし腎臓に穴が開くよ

★—おばけ(なんてないさ)の歌に似ている曲

Published 2004 Take Home Tunes/ASCAP

“BOP! GOES THE RUMBLE”

ボブ・ゴールドスタイン 作 1964年

これも私達が作った曲で、ショーでの安全パイの曲でもあり、
“いたちがぴよんとはねてでる!”のメロディで歌います。

You'll wish you wasn't one of the gang
When on the street you crumble
A sneak attack— A knife in your back
Bop! Goes the rumble

ギャングになったことを後悔するぜ
道端で殺られちゃう時にさ
暗殺者のナイフが背中に忍び寄る
殴れ! ケンカだ

Now, what's the good bein' dead but proud?
It's better to live an' be humble
Be different— Don't be one of the crowd
When Bop! Goes the rumble

プライドのためになんか死ぬるかよ
卑しく生きてる方がましさ
染まるな、群れるな
殴れ! ケンカだ

Published 2004 Take Home Tunes/ASCAP

“WILLO-WAY”

作者不詳。シェリがソロで歌った、とても美しい曲。

Little toy sailboat, take me to sea
Willo-way, willo-way
Where can love be?
Tiny tin soldier, march by my side
Willo-way, willo-way
Where does love hide?

Hobby horse told me, love isn't far
Only a giant step...over a star
Hobby horse, sailboat—soldier, all three
Willo-way, willo-way
Where can love be?
Willo-way, willo-way
Find love for me

小さなオモチャのボートよ、海へ連れてって
ゆらゆら、ゆらゆら
愛は何処にあるの?
小さなオモチャの兵隊さん、傍で行進してごらん
ゆらゆら、トコトコ
愛は何処に隠れてる?

オモチャのお馬さんが私に言う、愛はすぐ近くにあると
一歩大きく跨^{また}いだけで……もう星の向こう側
お馬さんとボートくんと兵隊さん、ねえ 3人さん
ゆらゆら、ゆらゆら
愛は何処にあるの?
ゆらゆら、ゆらゆら
私の愛を探してちょうだい

“NOW IS THE TIME”

カート・ベッチャー 作 1965年

Now is the time; to be.
Now is the time; to me,
and something within me.

今がその時、あるべき時
今がその時、僕と
そして僕の心の時間

Now is the time to be tender and..
to remember,
and to be remembered forever;
in time and in space;
in a loved one's face and mind's eye.

今、優しくなる時、そして…
覚えておこう
永遠に忘れずに
時と空間
愛する者の顔と心の視線

Now is the time; to cry,
And in this pain
we try to find a consolation.

今がその時、涙する時
そしてこの傷みに
僕らは慰めを求めている

Now is the time; so it is said,
again and again,
so...Now is the time;
and it is!...REALLY!
till I'm dead.

今がその時、それを
何度も繰り返し
そう……今がその時
その時なんだ……まさに!
僕に死が訪れるまで

but, Now is the time,
and Now is the time;
For all time,
and it is because
it is now;
not then;
or when,
but now.

でも、今がその時
そして、今がその時
いつでもそうさ
何故って
それは今
その時でもなければ
何時かでもない
今なのだから

“THE RAIN AND THE SEA”

カート・ベッチャー 作 1964年

If a cloud burst grew,
Would raindrops come down from the blue?
The rose on that hill might still have been unborn

雲が立ち込め張り裂けたなら
青空から雨が降り注ぐの? じゃなきゃ
あの丘に咲く美しいバラは生れてこなかったんだね

If the tides did cease,
How would driftwood find its peace?
And its beauty a dream would be seen by no one

潮の流れが止まったら
流木は何処に流れ着いたらいいの?
その美しい夢は誰にも知られずに

Rain, rain, come down
Waters wash the ground

雨、雨、降り降り
水は大地を洗い流せ

But the rain came down
And the waters washed the ground
And two creatures of beauty were created

雨が降ったら
水が大地を洗い流せば
二つの美しき物が生れる

Now the rose was plucked
In a house in a vase it was stuck
And the petals played around and came down
and were wilted
And the driftwood on the shore
Was sold at a seaside store
To a child with a smile who sits in a wheelchair

今その美しいバラは摘まれ
家の花瓶へと挿され
花びらは遊び、床に落ちてしばむ
そして流木は海岸へと辿り着き
海辺の店で売られて行く
車椅子に乗った子供の笑顔のために

And the rain and the sea
Made a joy to be
And they laughed and resumed
where they had started

そして雨と海は
喜びを創り出し
微笑みながら還って行く
彼らが元いた所に

シェリ・ホルムバークの詩 1967年

I do have a veil of happiness
But, too often, it hides itself behind a tear—
I have only to find someone strong enough
to wipe the tear
and lift the veil, and bring out the beauty
For the world and me to see

私は幸せのヴェールに包まれているけれど
それはいつでも、涙の影に隠れてしまう
涙を拭いてくれる誰かを見つけなければ
ヴェールを取り、私の美しさを引き出してくれる誰かを
そして私に世界を見せてほしいの

“LIFE”

シェリ・ホルムバーク 作 1964年

Life is like a winding road—
Some things you see may be beautiful,
Others may be distasteful
Many walk these roads
and see only the distasteful things

A few find the beauty which was meant to be seen

I tried to find a road
where there was nothing but beauty
But there was always something ugly
standing before me
I groped my way through the ugliness
and found a flower
But everyone knows a flower doesn't live forever—

My flower died
I am now searching for a new one—
It isn't easy
All the weeds seemed to have taken over
my beautiful garden

I picked out the weeds—
still no flower
Maybe someday I will find it
I will continue searching along this winding road
until I do—
I will never give up, for to me BEAUTY IS LIFE

人生は曲りくねった道
幾つかは美しい出来事
残りは苦い経験かしら
たくさんの道を歩いて、苦い思いばかり

幾人かは運命の美しい出来事に会うのでしょうか

私は美しいものだけが存在する道を探していた
けれどいつも醜い何かが私の前に立ちはだかる
醜さの中で手探りで花を見つけることはできても
その花は永遠の命ではない

私の花は枯れ
また新しい花を探している私
でもそれは容易いことじゃない
私の美しい庭は雑草に占領されてしまったみたい

私は雑草を抜いた
まだ花は見つからない
きっといつか見つけるわ
曲がりくねった道を探し続けよう
決して諦めない、美は生きることだもの

ロン・エドガーの詩 1963年

Pox upon you little fellow
Creep and fink with the stripe of yellow
The gang you squealed on has the urge;
To sing and strum your funeral dirge

Into the drink, you should have went
Neatly cast in wet cement
Delinquency becomes a blight,
When clods like you don't do it right!

ぶつぶつ顔のちっぽけな
うじ虫みたいな告げ口野郎
ギャングなんかに密告したって
てめえの追悼歌を歌われるのがオチだぜ

お家に帰って酒でも飲んでりゃよかったものを
セメントに放り込まれちまって
非行は破滅の始まりって言うけど
それはお前みたいなろまのことさ!

ロン・エドガーの詩 1964年

Being a salt shaker must be a wonderful thing
You sit alone on the table with funny little holes in
your head
Sprinkling tiny little fragments on peoples

塩入れ容器になるって、きっと素敵なことさ
独りテーブルの上で、頭に可笑しな穴開けて
塩を人間達に振り掛けてりゃいいんだから

“WHY MYSELF?”

ドーティー・ホルムバーク 1965年

初めて書いた詩

Tell me—Why can't I write my feelings down?
But express them like a funny clown
Why can't I open up my heart
And let myself be more a part..

教えて、なぜ自分の心を書き留められないの?
どうしても可笑しなピエロみたいになっちゃう
なぜ自分の心を開けないの?
そしてもっといろんな自分を演じたいのに……

Why do I confuse myself with moods?
And often wind up acting rude
Why do I worry and fill my mind
With happenings I never find
Why is life so little
Giving me time to find myself a riddle

どうして心は思い通りにならないの?
いつも緊張して失礼に振る舞っちゃうの
なぜ心配して心に満たしてしまうのかしら
在りもしない不安を
なぜ人生ってこんなに短い?
自分の心の謎解きのためには

Why myself?

どうしてなの?

“SKY WATER”

ドーティー・ホルムバーク 1965年

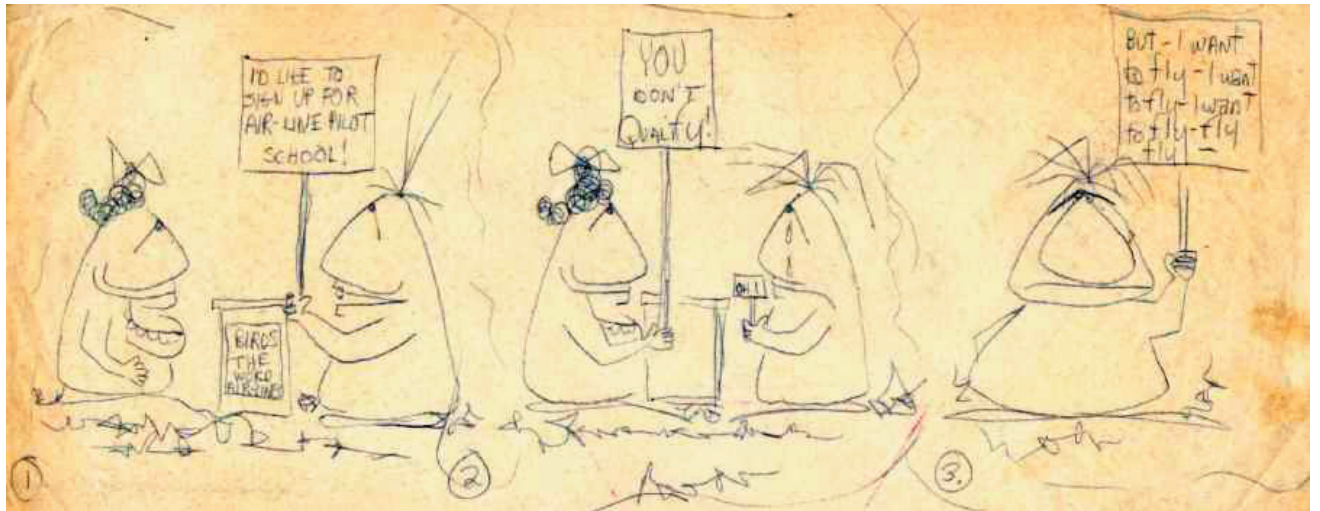
次に行った詩

Sky water—
So much of you pouring out of the sky
like a free faucet;
Feeding the dryness,
Drowning the lakes
You often hide the sun
And make rainbows for fun
So many molecules I cannot see
Fighting against each other to be free—
Sky, who turns your faucet on?

空の水よ
お前はどんどん流れ出る
開けっ放しの蛇口のように
渇きに潤いを与え
湖をいっぱいにし
ときどき太陽を隠しては
虹を架けて皆を楽しませる
目に見えないたくさんの分子が
自由になろうと、われ先にと動き回る
空よ、誰がお前の蛇口をひねるの?

カートのマンガ

カート・ベッチャーによる独特なマンガスのマンガ
(シェリへのプレゼントに描かれたもの)



1—パイロット・スクールに入りたいんですが!
(契約書を持って)
バーズ・ザ・ワード・エアライン

2—あなたは認められません

3—でも、飛びたい
飛びたいもん
飛ぶ、飛ぶ、飛ぶ



4—飛びたいーいたーいたーいたーい
飛びたいんだよ、お嬢さーん
ねーねー!

5—ダメだってば! ダメ! ダメ!
飛べません…
あなたには資格がないんです!

6—「サイナラー」



カートが描いたメンバー 6人の似顔絵
(カート、シェリ、ドーティー、マレー、トム、ロン)

シェリのアート

シェリはたくさんの子供の絵を描きました。これらの作品は彼女が私にくれたものです。





CD-Rom eBook

The GoldeBriars' Story
“Whatever Happened to Jezebel?”
The GoldeBriars' Epic Years
ジェザベルに何があったの…?

AFTERTHOUGHT
あとかき

音楽トリビア
グループ解散1年後の報告
概要
時間延長…グループ解散その後
追記…1969年それぞれの状況
あとかき
2002-2004年時点でのグループメンバーと友人達について
ジェザベルに何があったの…?

音楽トリビア

1965年ゴールドブライヤーズ解散後ちょっと経って

ゴールドブライヤーズの解散後、私にはまだ音楽グループで歌うことへの憧れがあると、キース・オルセンに話しました。彼は私のために、まず西海岸にいたキャス・エリオットに電話してくれました。私はその電話で彼女に、ゴールドブライヤーズは解散したばかりなのだと告げ、女性シンガーを求めているグループがないかと訊ねました。キャスは「今、どのグループでどんなことが起こっているのか全く分らない」と言い、彼女はバハマ諸島にソロ・アーティストとして歌いに行くところなのだ、と言いました。

次にキースは、ジョン・セバスチャンに電話をしてくれて、ジョンもまた女性シンガーを求めているグループを知りませんでした。彼自身は新しく男性ばかりのグループ“ラヴィン・スプーンフル”を組んだのだ、と言いました。

それから暫くも経たないうちに、キャス・エリオットはカリフォルニア、ハリウッドの映画試写会にキース・オルセンと出席しました。キースがシェリと私に告げたのは、その試写会でキャスがキースに打ち明けた、こんな言葉でした。「私達(つまり彼女の参加した新しいグループ、ママス&パパス)は、ゴールドブライヤーズのサウンドを盗んだのよ」

グループ解散1年後の報告

今のところ、シェリと私は秘書の仕事によって安定した収入を得ています。自分で使えるお金を持つためとは言え、何て不思議な感覚なんでしょう！

しかし多かれ少なかれ、一度ショービズの血が体に流れると、その血はずっとそこに存在してしまうのです。シェリと私は一緒に仕事をするのを止めるつもりはありません。私達は副業にコマーシャルでデュエットしたいし、多分、踊りの仕事も得るつもり。私について言えば、心の中にショービズが残した部分がまだ大きく残っています。よく分からないけれど、時々自分が檻の中にいるようで、そこから抜け出して世の中に何か音楽的なものを与えたいと感じています。

恐らく、私をどこかへ連れて行く、まるで軍隊が押し寄せてくるようなこの感覚は、いつも私の中にあるのでしょうか。音楽への情熱によって溢れ出てくるメロディだけでなく、歌詞もです。その感覚をどうやって自由に紙の上に表現したらいいのか、最近ちょうどそれに気がついたのです……つまり、今は曲を書いているところ。過去には詞を幾つか書いたことはあるけれど、この数ヶ月間で2、30曲作ってみたの。純粹に心を込めて歌を歌うって、とても開放された気分。それらが音楽的にどんな性格を持つものなのか私には分からないけれど、ただ歌詞とメロディに自分の感覚を反映させているのです。もし私がラッキーで、ビジネスの一頻り^{ひとしき}をもっと学んだなら、きっと、いつか自分の曲を公に発表することが出来るでしょう。

……そういうわけで、秘書の仕事でお金を稼ぎ続けながら、私は曲を書き続けます。でもショービズ界って予測不能なことはいっぱいで……私達は、“昔々”そんな事があったって知ってるの。

(未来の夢……自分の曲を歌うため、私自身のレコーディング契約を得ること)
「ショービズ、それは束の間の出来事に他ならない——安らぎなんてとんでもない!」

概要

1966年12月の回想

私の心は次第に、自分自身の虹の道を伸ばしていきました。私達は皆それぞれ、自分を輝かせてくれるものを探し続けるのでしょう。つまり、心の命ずるままに、このクレイジーなショービズ界で、自分自身を発見していくのです。

積み重なる思い出の岩々は地盤を固め、人の心を十分に支えてくれるのかも知れません。有り余るほどの飢えた日々……楽しみに笑った日々…感傷や悲しみに涙した日々……そしてその全てが一つになって初めて、人は伝えなければならない何かを、声の限り伝え始める……自分の言葉で……その時、よりたくさんのことが見えてくる……あなたの魂は何を叫ぶのだろうか。

「夜明けの向こうに隠れている魂は、真実を叫ぶ時を待ち構えている!」

追記…1969年それぞれの状況

“飢えて、笑って、涙して”が古い日記から構成され、“ゴールドブライアーズ”に関わったメンバー達に対しての、たくさんの感慨深い思い出を残しながら1969年11月に初めて選集本のかたちで出来上がりました。グループを解散したメンバー達が、どうなっていったのかは、いつでも興味深い事柄だからでしょう。

1969年

シェリはキース・オルセンとの結婚生活に落ち着き、4年半に渡ってたくさんのアルバム、シングル、コマーシャルに参加。とてもプロフェッショナルなバックিং・ボーカルの仕事をこなしていた彼女の心の中には、相変わらず音楽が存在していました。



★—革新的な多重録音テープ・レコーダーを売る会社

カートは、ゴールドブライアーズ以降ずっと音楽の夢を追い続け、その能力をレコード会社(トゥゲザー・レーベル)、電子録音機器メーカー(クリエイトロニクス★)、著作物管理会社(ミー・ムー・ミュージック)などの運営にも発揮しました。彼はアソシエーションの1stアルバムと最初の2枚のシングル“Cherish”、“Along Comes Mary”をプロデュースしました。(彼がメロディを作ったにも関わらず、全くその印税を受け取れなかった……法的に自分を守ることに對して無頓着だったために…音楽界では、握手を交わしただけの約束は全く信用できないのです)

ロン・ニールソンは、その後より彼らしく生き、クリエイトロニクスの共同経営に力を発揮しました。

マレーはちょうど兵役を終え、再びその新鮮な才能を発揮する準備をしていました。

トムはミネソタのどこかへと去り、噂によればどこかのロックグループでベースを弾いているということです。

ロン・エドガーについては、ゴールドブライアーズ時代から彼のドラム・プレイは既にかなり完成されていたので、今の彼は、いつの日かトップ・ジャズ・ドラマーとして成功するための準備段階に過ぎないのだと私は感じていました。ゴールドブライアーズ解散直前、彼はロック・グループ、ミュージック・マシン(“Talk, Talk”という曲で知られる)に参加し、そのグループ解散後は、良く知られたその多彩なドラミングの評価により、カートと幾つかのレコーディングに参加し、たくさんのスタジオ・ワークをこなしました。

私の心の奥底には、とても強い音楽への思いがありました。自分なりに学んでいった曲作りを通じて、いつか自分のフィーリングを音楽として、再び披露出来たらいいなと思っていました。

あとがき

仕掛け扉を行き来して

In and out of trap doors

時間の国を彷徨えば

We weave through realms of time

理性は詩歌を生み落す

Our reasons will find rhyme

神秘が包むその心

With our mystic minds

おしまい

2002-2004年時点でのグループメンバーと友人達について

カート——1987年没、プロデューサー、ボーカリスト、作(詞曲)家として様々な功績を残す。(享年43歳)

ボールルーム The Ballroom——カート・ベッチャー、サンディー・サリスベリー、ジム・ベル(カントリー・ロックの先駆けグループ、プアー The Poor)、ミシェル・オマリー(その後、ミレニアムに参加)

ミレニアム The Millennium——キース・オルセン(ミュージック・マシン)とゲイリー・アッシャー(作曲家、サーフ・ミュージック・クリエイター、コロムビア・スタッフ・プロデューサー)の協力により、カートはミレニアムを結成。

このグループは、カート・ベッチャーを含む7人のミュージシャンと作家によって成る。カート以外のメンバー6人は——ロン・エドガー、ダグ・ローズ Doug Rhodes (ミュージック・マシン)、マイケル・フェネリー Michael Fennelly (その後、クラビー・アップルトン Crabby Appleton を結成)、リー・マロリー Lee Mallory、サンディー・サリスベリー Sandy Salisbury (ボールルーム)、ジョーイ・ステック Joey Stec。このグループの成果、即ちカートのボーカル・アレンジとスタジオ技術によるラヴリーな新芸術の表現は、彼の天才的な才能を明白なものとした。アルバム“ビギン Begin”は、世界で2番目に16トラックのレコーディング技術によって録音されたアルバムである。カートはこのアルバム製作の1年間で、コロムビア・スタジオの歴史上、最も高額なレコーディング費用を使い果たす。

サジタリアス Sagittarius ——ゲイリー・アッシャーと共に結成(サーフィン／ホット・ロッド作曲家、プロデューサー)

プロデューサーであるゲイリー・アッシャーのために、気心知れたミュージシャン達が1ヶ月間スタジオに籠って出来上がったのが、サジタリアス——カート・ベッチャー、ブルース・ジョンストン Bruce Johnston、グレン・キャンベル Glenn Campbell、ファイアーサイン・シアター The Firesign Theatre 他。ヒット・シングルは、“My World Fell Down” 1967年。

継承されるカートの独特な音楽——ヴァニティ・フェア音楽誌 2001年11月——“The Rock Snob's Dictionary”(スティーヴン・デイリー、デヴィッド・ケンプ、ボブ・マック著)からの抜粋——カート・ベッチャー……この上なく甘ったるいシンガー・ソングライター、敬虔なる60年代西海岸の軽い音楽“サンシャイン・ポップ”のプロデューサー、それ故に今日流行している現代的なサウンドの先駆者である。

報道によると、カート・ベッチャーは、1987年にH.I.V.によって、その生涯を閉じた。

シェリ——1997年没(享年54歳)

シェリは、カート・ベッチャーとキース・オルセンのプロジェクトにおいて、広範囲に渡るバックিং・ボーカルの仕事をこなした。キースとシェリは結婚7年後に離婚。シェリはその後、大手のプロ写真スタジオで活動する写真家/画像処理技師、ダニエル・キャスリン Danniell Catherine (たくさんのメジャー・レコードのジャケット・アートに多大な影響を与え、ハリウッドで有名になる)と結婚する。ダニエルは、トム・ケリー(マリリン・モンローの写真家として有名)が撮るマリリンの写真のカラー技師を務め、そのベスト・プリントをトムから授けられる。1997年9月25日、肺がんによって没。

キース・オルセン

70年代から90年代を通じて、オルセンはプロデュース業において伝説的な名声を得る。その仕事で、39以上のゴールド・ディスク、24以上のプラチナ・ディスク、14以上のアルバムがマルチ・プラチナ・ディスクに認定された。彼は第一線のプロデューサーとして、100を超えるトータル的なアルバムを製作し、フリートウッド・マックを始め、グレイトフル・デッド、ボブ・ウィアー、エディ・マナー、エマーソン・レイク&パーマー、リック・スプリングフィールド、REOスピードワゴン、パット・ベネター、ハート、ジョー・ウォルシュ、スターシップ、サンタナ、キム・カーンズ、ジェスロ・タル、ベイビーズ、オジー・オズボーン、スコーピオンズ、バッド・カンパニー、38スペシャル、ラス・バラード、サミー・ヘイガー、ホワイトスネイク、フォリナー、シーナ・イーストン、スティーヴ・ペリー、ジャーニー、ラヴァーボーイ、ルー・グラムなど様々なアーティストを手掛ける。

ロン・ニールソン

彼は、ニールソン・クライン・インクという、プロ及び家庭用オーディオ機材製造と宣伝サービスの会社で成功する。

ボブ・ゴールドスタイン

ウッディ・アレン初のプロとしての仕事である、山の中にある彼の劇場のための共同作家として仕事をした後まもなく、ボブは若い頃に書いた曲“ワシントン広場の夜はふけて”についてのユニークなアレンジのアイデアを思いついた。その曲の楽器アレンジは、“フォーク・ディキシー”のトレードマークとなり、その後“フォーク・ロック”のように、今日まで次々に生まれくる、世界中の音楽が組み合わされた複数の要素を持つ音楽の始まりとなった。その頃ボブは、ゴールドブライアーズの共同作家、共同プロデューサーとしての仕事、この本に出てくる1stアルバム発表直後から未発表の3rdアルバムまでを引き受けることになる。音楽アレンジに続く、ボブの先駆者としての発明は、彼が書いたブロードウェイ・ショー“Light Works”でのディスコ照明で、2台以上のターンテーブル★を使用して、音楽を同期させてミックスする最初のアーティストとなった。ボブが、照明、スクリーン、ミラーボール、映画、スライド写真をミックスして操ったことを、メディアがどう表現していいのかボブに訊ねたとき、彼は“マルチメディア”という言葉を創ることによって、それを説明したのである。また、ボブはカートと共に、ルー・クリスティー Lou Christie の隠れた名曲“Canterbury Road”を書いた。さらに、アンディ・ウォーホールが撃たれる直前の、彼の映画作品“ロンサム・カウボーイ”のために、ボ

★—レコード・プレーヤー

★—シンガーや作家などのエンターティナー
をバックアップするための会社

ブはタイトル曲を書き、プロデュースも手掛けた。アンディ・ウォーホルの名前が製作者としてクレジットされた、ローリング・ストーンズのアルバム“スティッキー・フィンガーズ”のジャケットも、後に映画“クラム”の予告編を製作したボブのデザインによるものである。現在の彼は、ポゴ!エンターテインメント bOgO! Entertainment ★の共同経営者で、彼の新しいハリウッド・ミュージカル、HowOldCaryGrant.com を日本で初演を迎えさせようと準備中である。

ロン・エドガー

ロンは、正規のジャズ・ミュージシャンとしてゴールドブライアーズに参加。……グループは彼に、世界中のたくさんの優秀なミュージシャンと出会う機会を与える。ゴールドブライアーズ脱退後は、ミュージック・マシン、次いでミレニアムに参加。（ミレニアムにはボーカリストとしても参加）その他、以下のレコーディングでドラマーとしてクレジットされている。ブレッド、ポール・レンズのアルバム“Everlasting”、サジタリアスのアルバム“Present Tense”。ロン・エドガーとショーン・ボニウェルは去る2001年、ミュージック・マシンとして路上ライブを披露。

現在のロンは、ジャズ・バンドでの作曲と演奏を楽しんでいる。

トム・ドーホルト

ミネソタ州アノカ在住。ゴールドブライアーズ解散および彼が参加した3rdアルバム未発表のショックから、66年に音楽の道を断念。

2002年11月24日のトムの談話から

「65年春のゴールドブライアーズ解散後、その年の夏ミネソタに帰ったんだ。以前のグループ・メンバー、ロン・ニールソンと2ヶ月間バンドを組み、それから66年の秋までロック・バンドを転々とした。ベースを弾く楽しみは無くなり、お金のためだけにプレイするようになってしまったよ。本当にやりたいことを省みて、きっぱりとバンドで演奏するのをやめにしたんだ」

マレー・プランタ

マレーが現在どこにいるのか分らない。60年か70年代に軍に入隊したらしい。ジョーイ・ステックがプロデュースした“クラビー・アップルトン”のデビュー・アルバムに、マイケル・フェネリーと共にリズム・ギタリストとして参加。（マイクとジョーイは元ミレニアム）

ゲイリー・ホルムバーグ——2000年没(享年58歳)

その天使の歌声は、歳を重ねる毎により美しく成長していった。

2000年5月26日、筋肉の疾患によって没。

ドーティー・ホルムバーグ——私自身

Dottie Holmberg (本名)

Dotti Holmberg (ミュージシャンとしての名前)

Dotti J. Holmberg-Waddell (結婚後の名前)

ゴールドブライアーズ解散後、たくさんの曲や詞を書き始め、歌唱のみならず作家への道の探求に興味を示す。著書“On, off, skip, trip but you're always sailing on YOUR OWN SHIP”に、それらの詩を集める。

ニューヨーク州コクサッキーのサンデイズド・ミュージック・レーベルから、ドーティーのサンシャイン・ポップの録音66～70年までを集めたソロ・デビューCD “Sometimes Happy Times” (脚注3/P.166を参照)がリリースされる。リイシューならぬ、この初お目見えのアルバムによって、60年代から続くドーティーのシンガー・ソングライターとしての夢が現実となる。人生とは、どんな驚きの事件が起こるか分らないものである。

ドーティーは子供ミュージカルの作家でもあり、89年にフロリダ州レイクランドの地方劇場で初演された“Land of Myrtle, The Gloom”を手掛ける。他には小学生向けに“make the right choice”で2枚のアルバムをリリース、“Stop & Think” (with the Right Choice Kids)では作家及びプロデューサーとして、そしてニュー・ジャージー州ロング・ブランチのキンボー・エデュケイショナル社プロデュース、販売の“Make the Right Choice”89年初版の製作を手掛ける。これらの楽曲はアメリカ保健・福祉省によって、青少年のための推奨作品として認定される。さらに、人形のキャラクター作り、物語製作、歌唱も手掛ける。ホームページ——KIDBIZ.com

1987年シェリの夫ダニエル・キャスリンによって撮影されたシェリ(左)と私の写真



ジェザベルに何があったの…?

“未解決の謎”…

急報——2001年ロン・ニールソンとの電話で、私が彼にジェザベルの所在などについて訊ねた結果。



ロンはゴールドブライアーズを脱退する際、グループがマスコットのジェザベル(マーシャル諸島土着民のトーテム像)を持っておくようにと、カートに話しました。

たしかその数年後、次にロンがカートに会った時、彼はジェザベルについて訊き、ジェザベルが300キング・ストリート・クラブのある晩のステージ終了直後に盗まれてしまった、とカートは答えました。カートの話——その晩最後のステージの後、まだステージ・セットや機材を片付けないうちの出来事に違いない。そして思うに、ゴールドブライアーズの熱狂的なファンがジェザベルを盗んだんじゃないか、と……そんな訳で、未だそれは謎なのです。ジェザベルはどこへ?

きっと、もしサウス・キャロライナ州チャールストンに行き、何年にも渡って子供を産み続ける恰幅の良い女性を探したなら、恐らく、そこでジェザベルが見つかるかも知れません。(ゴールドブライアーズに肥沃の魔力を発揮したのと同様に)

言うまでもなく、ゴールドブライアーズが解散した時に、ジェザベルをマーシャル諸島から持ち帰った父の元に返そうと思っていたロンは、がっかりでした。

……つまり、この物語にお気付きの通り、“ジェザベルに何があったの…?”には、2つのバージョンが存在したのです。

おしまい



カートのマンガ



The GoldeBriars' Story
“Whatever Happened to Jezebel?”
The GoldeBriars' Epic Years
ジェザベルに何があったの…?

FOOTNOTES

I

“Hopscotch”
by Dotti Holmberg sound clip
ドーティー・ホルムバーグの
サウンド・クリップ
“恋の石蹴り遊び”

脚注1

“Hopscotch”は1966年にカリフォルニア州ハリウッドにあるコロムビア・スタジオでレコーディングされました。カート・ベッチャーが、彼のアワー・プロダクションズ・レーベルからドーティーのシングル2曲をリリースするために、計5曲をプロデュースし、その中に含まれていたのが、このドーティー作曲“Hopscotch”です。このセッション中、ロス・アンジェルスにいたロン・ニールソンは、“Hopscotch”と“It’s Not Worth It At All”のコード譜をカートに渡すために採譜してくれました。このレコーディングに参加してくれたミュージシャン達は、マイク・ディージー、ベン・ベニー、ドラマーとしてジェリー・シェフとトキシ・フレンチ。アワー・プロダクションズ・レーベルは、このレコーディング直後に破産してしまいました。

サンデイズド・レーベルのボブ・アーウィンが、私のアルバム“Sometimes Happy Times”の選曲をする際、一風変わったこの“Hopscotch”が、靈妙なムードを持つ他の17曲とマッチしないという理由で、除外されました……そんなわけで“Hopscotch”は、このゴールドブライアーズ本に初お目見えとなったのです。

“Hopscotch”をお聴きになるには、Windows Explorerを開き、CDドライブから“Hopscotch.wav file”をクリックしてお楽しみください。

“HOPSCOTCH”

Written by Dotti Holmberg

You come and we're near
Then you leave for a year
First you're mine
And then you're free

You tease my mind
Then love's peak has decline
As you play hopscotch with me

I'm every other square
That you miss, then you care
We're one
Then two for tea

Alone and got the blues
Then we're in the same shoes
Arms like branches of a tree

But you're messin' with my mind
And love can make you blind
As you play hopscotch with me

This game will never end
You say, I hear, pretend
As a dog talks to a flea

But when the wise are taught your rules
They won't be caught the fools
And they'll play your game with three

恋の石蹴り遊び

ドーティー・ホルムバーグ 作

彼と出会い
恋したのに
ゲームのつもり?

おふざけに
冷める私
恋の石蹴り遊び

じき分かれて
また寄りそって
お茶した二人

でも変な気分
だってちぐはぐ
お互いの想い

マジメに聞きなさい
ふざけすぎてキライ
恋の石蹴り遊び

終わりが無い
意味ない素振り
堂々巡り

誰も止められず
チョッと見てチャカす
ゲームの続き

マジメに聞きなさい
ふざけすぎてキライ
恋の石蹴り遊び

Published 2004 Apple Core Publishing/BMI

The GoldeBriars' Story
“Whatever Happened to Jezebel?”
The GoldeBriars' Epic Years
ジェザベルに何があったの…?

FOOTNOTES

2

GoldeBriars' Song Lyrics
ゴールドブライアーズの歌詞

脚注2 ゴールドブライアーズの歌詞

トラディショナル・フォーク・ソングや靈歌、
ゴールドブライアーズによる改作、作者不詳の曲

アメリカの作家や1922年以前からアメリカに存在する著作権フリーの詞曲。これらの曲はトラディショナル・ソングに属します。ゴールドブライアーズは、しばしばトラディショナル・ソングの詞曲にグループ自身のユニークなアレンジを加え、独特なテイストを表現し、それらは今日“改作”としてBMI認可されています。改作には、下記のタイトルに星印★が添付されています。

目次

A Mumblin' Word (He Never Said).....	147
Alabama Bound★.....	149
Come Walk Me Out★.....	150
He Was a Friend of Mine★.....	151
I've Got to Love Somebody★.....	152
Joy, Joy, Joy.....	153
Jump Down★.....	154
Long Time Travellin'★.....	155
No More Auction Block★.....	156
Old Time Religion★.....	156
Pretty Girls & Rolling Stones★.....	157
Railroad Boy★.....	158
Ride that Chariot.....	159
Saro Jane.....	160
Shenandoah★.....	161
Sweet Potatoes.....	162
Voyager's Lament★.....	163
Zum Gale Gale★.....	164

“A MUMBLIN' WORD” (He Never Said)
トラディショナル黒人霊歌……“Dey Crucified My Lord”としても知られる。

REFRAIN #1:

Mumblin' word, mumblin' word
Mumblin', mumblin', mumblin' word
Mumblin' word, mumblin' word
Mumblin', mumblin', mumblin' word

※

だんまり、だんまり
だんまり、だんまり、だんまり
だんまり、だんまり
だんまり、だんまり、だんまり

REFRAIN #2:(twice)

He never said a mumblin' word
He never said a mumblin' word
He never said a mumblin' word
He never said a mumblin' word

※2(×2)

ぶつくさ言わないさ
彼は無言のままさ
ぶつくさ言わないさ
彼は無言のままさ

Verse #1: (twice)

They whipped him up that hill
And he never said a mumblin' word

※(×2)

丘で鞭打たれる
彼は無言のままで

They whipped him up that hill
Over me—

丘で鞭打ちされる
俺をかばって

And—

そして、

REPEAT REFRAIN #2

※2(×2)

Verse #2 (twice)

One day when I was lost
They hung him from a cross

歌2(×2)

俺は途方に暮れる
彼が磔^{はりつけ}にされて

And—

そして、

REPEAT REFRAIN #2

※2(×2)

Oh, oh, mumblin', Oh, oh, mumblin'

オー、オー、だんまり、オー、オー、だんまり

Verse #3 (twice)

They crowned him with a crown of thorns
And he never said a mumblin' word

歌3(×2)

いばらの冠かぶせられ
彼は無言のままさ

And he never said a mumblin' word
And he never said a mumblin' word

ぶつくさ言わないさ
彼は無言のままさ

They crowned him with a crown of horns
Over me—

いばらの冠かぶせられ
俺をかばって

And—

REPEAT REFRAIN #2

Verse #4 (3 times)

On Easter mornin' he arose

On Easter morning, he arose,

On Easter mornin' he arose

He never said a mumblin' word,

He never said a mumblin' word

He never said a mumblin' word-OVER ME!

そして、

※2(×2)

歌4(×3)

復活の朝、目覚めた

彼は無言のままさ

復活の朝、目覚めた

復活の朝、目覚めた、復活の朝、目覚めた

彼は無言のままさ、彼は無言のままさ

彼は無言のままさ、俺をかばって

“ALABAMY BOUND”

“Alabama Bound”として知られる。ゴールドブライアーズは“Alabama Bound”と歌ったが、エピック・レーベルは1stアルバムに“Alabama Bound”とタイトルを打ってしまった。この曲はトラディショナル・フォーク・ソングで、オリジナル・タイトルは“I’m Alabama Bound”、1909年ロバート・ホフマンによって書かれた。

Ooh, Ooh, Ooh, Ooh,	ウー、ウー、ウー、ウー、
I’m Alabamy Bound, I’m Alabamy Bound (repeat)	アラバマ州境、アラバミー・バウンド (繰返し)
And if this train don’t stop and let me turn around I’m Alabamy Bound	列車が止まらなくても、どうか連れてって アラバミー・バウンド
Oh, don’t you leave me here, Oh, don’t you leave me here (repeat)	置いてくなよ 置いてくなよ (繰返し)
If you will go anyhow, leave me a dime for beer	どうしても行くなら、ビール代おこれよ
I’m goin’ way down, way down to Alabamy (repeat)	来ちまったよ、こっからはアラバマ州 (繰返し)
And if this train don’t stop and let me turn around I’m Alabamy Bound	列車が止まらなくても、どうか連れてって アラバミー・バウンド
I’m goin’ way down, way down to Alabamy (repeat)	来ちまったよ、こっからはアラバマ州 (繰返し)
I’m Alabamy Bound, I’m Alabamy Bound (repeat)	アラバマ州境、アラバミー・バウンド (繰返し)
And if this train don’t stop and let me turn around I’m Alabamy Bound	列車が止まらなくても、どうか連れてって アラバミー・バウンド
I’m Alabamy Bound, I’m Alabamy Bound (repeat)	アラバマ州境、アラバミー・バウンド (繰返し)
Ooh, Ooh, Ooh, Ooh,	ウー、ウー、ウー、ウー、

“COME WALK ME OUT”

トラディショナル・ソングで、“Morning Dew”として知られる。

Come walk me out in the morning dew darlin’ Come walk me out in the morning dew today	朝露のなか連れ出して、ダーリン 朝露のなか連れ出して、ねえ
You’ll never see the morning dew darlin’ You’ll never see the morning dew again	朝露なんて見えないよ、ダーリン 朝露なんて見えないよ、もう
I thought I heard a thunder rollin’ darlin’ I thought I saw a cloud arise today	雷の音が聞こえたの、ダーリン 雲がせまってくるわ、ねえ
You’ll never see a cloud arisin’ darlin’ You’ll never hear a thunder roll again	雲なんか見えないよ、ダーリン 雷なんか聞こえないよ、もう
Where have all the people gone darlin’? Where have all the people gone today?	みんな何処へ行ったの？ ダーリン みんな何処へ行ってしまったの？
Don’t worry about the people darlin’ You’ll never see the people again	心配いらないよ、ダーリン 今日は誰にも会えないさ、もう
Come walk me out in the morning dew darlin’ Ooh, Ooh, Ooh, Ooh, Ooh, Ooh	朝露のなか連れ出して、ダーリン ウー、ウー、ウー、ウー、ウー、ウー
You’ll never see the morning dew darlin’ You’ll never see the morning dew again	朝露なんて見えないよ、ダーリン 朝露なんて見えないよ、もう

“HE WAS A FRIEND OF MINE”

トラディショナル・ソングで、この曲のGilaは“ヒラー”と発音される。
アリゾナ州にヒラー・ベン・ランという場所があり……
恐らくこの曲は、親友が死んだこの土地についての歌。

He was a friend of mine
He was a friend of mine
He died without a penny
He didn't have a dime
He was a friend of mine

彼は友達
彼は友達
一銭も持たずに
死んでしまった
僕の友達

He died on the Gila Bend Run
He died on the Gila Bend Run
His wandering days were over
His loneliness was done
He died on the Gila Bend Run

その場所はヒラー・ベン・ラン
その場所はヒラー・ベン・ラン
彷徨い果てた
孤独に散った
その場所はヒラー・ベン・ラン

I stood alone and cried
(I stood alone and cried) (Stood alone and cried)
I stood alone and cried
(I stood alone and cried) (Stood alone and cried)
The tears they fell like raindrops
The night my old friend died
I stood alone and cried (Stood alone and cried)

寂しくて泣いちゃうよ

寂しくて泣いちゃうよ

涙の雨が降った
彼が死んだ夜に
寂しくて泣いちゃうよ

He was a friend of mine
He was a friend of mine
He died without a penny
He didn't have a dime
He was a friend of mine (He was a friend of mine)

彼は友達
彼は友達
一銭も持たずに
死んでしまった
僕の友達

“I’VE GOT TO LOVE SOMEBODY”

(トラディショナル・ソング)

You want meat, go to the market
You want fish, go to the sea
You want love, don’t go no further
Just come on along with me

お肉を買うにゃマーケット
お魚ならば海に
愛なら、離れないで
ただ私の傍にいて

I’ve got to love somebody
And somebody’s got to love me

誰かを愛して
愛されたい私

You want bread, go to the grocery
You want honey, look to the bee
You want love, don’t go no further
Just come on along with me

パンなら店屋さんに
ハチミツならミツバチ
愛なら、離れないで
ただ私の傍にいて

I’ve got to love somebody
And somebody’s got to love me

誰かを愛して
愛されたい私

Ooh, Ooh, Ooh, Ooh, (etc.)

ウー、ウー、ウー、ウー…

You want cabbage, go to your garden
You want apples, look to the tree
You want love, don’t go no further
Just come on along with me

キャベツなら庭畑
リンゴならリンゴの木に
愛なら、離れないで
ただ私の傍にいて

I’ve got to love somebody
And somebody’s got to love me

誰かを愛して
愛されたい私

Ooh, Ooh, I’ve got to love somebody
Ooh, Ooh, I’ve got to love somebody

ウー、ウー、誰かを愛したい
ウー、ウー、誰かを愛したい

“JOY, JOY, JOY”
(トラディショナル・ゴスペル)

You, You....

さあ...

You can tell the world about this
You can tell the nations about that
Tell them what the master has done
Tell 'em that the gospel has come
Tell 'em all the victories been won
He brought, joy, joy, joy to my soul

世界の民に伝えよう
主のお導き
主の御業
福音の知らせ
勝利来たれり日
主よ、喜びを与えたもう

My Lord spoke
He did it well
Yes, he did, Yes, he did
'Bout the children of Israel
Yes, he did, Yes, he did

主よ
あなたは成し遂げた
与えた、与えた
イスラエルの弟子達に
与えた、与えた

My Lord spoke
He did it well
Yes, he did, Yes, he did
'Bout the fires that flame in hell
Yes, he did, Yes, he did

主よ
あなたは成し遂げた
与えた、与えた
燃える炎を地獄に
与えた、与えた

Jordan's River is chilly and wide
I've got a home on the other side
He brought joy, joy, joy to my soul

ヨルダン川の向こうに
我らの安息の地が
主よ、喜びを与えたもう

You can tell the world
You can tell the world
You can tell the world about this
You can tell the nations about that
Tell them what the master has done
Tell 'em that the gospel has come
Tell 'em all the victories been won
He brought, joy, joy, joy to my soul

伝えよう
伝えよう
世界の民に伝えよう
主のお導き
主の御業
福音の知らせ
勝利来たれり日
主よ、喜びを与えたもう

“JUMP DOWN”

黒人霊歌として知られる……“Pick a Bale”は労働歌に分類されるが、
奴隷時代にしばしばダンスや糸紡ぎにも歌われた。労働歌としては“John Henry”によって、
酷使される或る奴隷が一日中綿摘みをする歌詞で歌われる。

REFRAIN #1:

I'm gonna jump down, turn around
Pick a bale of cotton
Gonna jump down, turn around
Pick a bale of day

Jump down, turn around
Pick a bale of cotton
Gonna Jump down, turn around
Pick a bale of day

REFRAIN #2:

Oh Lordy, pick a bale of cotton and
Oh Lordy, pick a bale of day
Oh Lordy, pick a bale of cotton and
Oh Lordy, pick a bale of day

Me and my wife gonna pick a bale of cotton
And me and my wife gonna pick a bale of day
Me and my wife gonna pick a bale of cotton
And me and my wife gonna pick a bale of day

REPEAT REFRAIN #2

Me and my boys gonna pick a bale of cotton and
Me and my boys gonna pick a bale a day
Me and my boys gonna pick a bale of cotton and
Me and my boys gonna pick a bale a day

REPEAT REFRAIN #2

Jump Down, turn around
Jump Down, turn around

Whoa, Whoa

※1

さあテキパキ動いて綿摘みさ
さあテキパキ動いて一日中

テキパキ動いて綿摘みさ
さあテキパキ動いて一日中

※2

おお神よ、私は綿摘み
神よ、一日中
おお神よ、私は綿摘み
神よ、一日中

私と妻は綿を摘みます
私と妻は一日中
私と妻は綿を摘みます
私と妻は一日中

※2

私と妻は綿を摘みます
私と妻は一日中
私と妻は綿を摘みます
私と妻は一日中

※2

テキパキ動いて
テキパキ動いて

ウオー、ウオー

Jump down, turn around
 Pick a bale of cotton
 Gonna Jump down, turn around
 Pick a bale of day (etc.)

テキパキ動いて綿摘みさ
 さぁテキパキ動いて一日中
 テキパキ動いて綿摘みさ
 さぁテキパキ動いて一日中……

“LONG TIME TRAVELLIN’”

“Been a Long Time Travelling Here Below”として知られる、古き日のトラディショナルな山歌。
 私達のレコーディングではロン・ニールソンがバンジョーを弾き、シェリがタンバリンを叩いた。

Oh, been a long time a travellin’
 Here below, here below
 Been a long time a travellin’
 Away from my home, away from my home

思えば長旅
 ここまで、ここまで
 思えば長旅
 我家を遠く離れて

Oh, been a long (long time a travellin’)
 time a travellin’ (long time a travellin’)
 Here below, (here below) here below
 Gonna lay my body down
 (gonna lay my body down)
 Gonna lay my body down
 (I’m gonna lay my body down)
 Gonna lay my body down
 Body down

思えば(長旅)長旅(長旅)
 ここまで(ここまで)ここまで
 休むとしよう
 (休むとしよう)
 休むとしよう
 (さて休むとしよう)
 休むとしよう
 さてさて

Oh, been a long (long time a travellin’)
 time a travellin’ (long time a travellin’)
 Here below, (here below) here below
 Been a long time a travellin’
 Away from my home, away from my home

思えば(長旅)
 長旅(長旅)
 ここまで(ここまで)ここまで
 思えば長旅
 我家を遠く離れて

Oh, been a long time a travellin’
 Here below, here below
 Gonna lay my body down
 Gonna lay my body down
 Gonna lay my body down, down, down, down,
 down, down, down

思えば長旅
 ここまで、ここまで
 さて体を休めよう
 この体を休めよう
 横になって、さてさてさて
 さてさてさて

“NO MORE AUCTION BLOCK”

黒人霊歌——ガスタバス D.パイク 作 1873年

No more auction block for me
No more, no more
No more auction block for me
Many thousand gone

もう競り台に上がりたくない
もう、二度と
もうオークションに掛けられたくない
何千人も…

No more driver's lash for me
No more, no more
No more driver's lash for me
Many thousand gone

もう鞭で打たれたくない
もう、二度と
もう鞭打ちはまっぴらだ
何千人も…

No more auction block for me
No more, no more
No more auction block for me
Many thousand gone

もう競り台に上がりたくない
もう、二度と
もうオークションに掛けられたくない
何千人も…

“OLD TIME RELIGION”

トラディショナルなゴスペル——1865年

私達のレコーディングではロン・ニールソンがバンジョーを弾き、シェリがタンバリンを叩いた。

REFRAIN:

Give me that old time religion
Give me that old time religion
Give me that old time religion
It's good enough for me

※

信仰、昔からの
信仰、昔からの
信仰、昔からの
私のためにも

Well, it was good enough for my father
It was good enough for my father
It was good enough for my father
It's good enough for me

信仰、父の代からの
信仰、父の代からの
信仰、父の代からの
私のためにも

(Repeat Refrain) (Oh....)

※ (オー…)

Well, it was good enough for my mother
It was good enough for my mother
It was good enough for my mother
It's good enough for me

信仰、母の代からの
信仰、母の代からの
信仰、母の代からの
私のためにも

(Repeat Refrain) (Oh, ...) (etc.)

※ (オー…)

“PRETTY GIRLS & ROLLING STONES”

作者不詳——1963年ゴールドブライアーズとしての初ブックイング、
ル・ズー・コーヒー・ショップの楽屋にて、旅芸人のフォーク・シンガーに教わった曲。
歌詞は私が速記で書き留めたのだが、なぜかそこに彼の名前が無い。

Some people think that a rollin' stone
Gathers no moss
But I'm just a natural-born travellin' man
And I've suffered no loss

転がる石に苔生さず
って言うけど
風来坊の俺にや
失うものはない

But a pretty little girl runnin' over the hill
I want to follow her so,
If I won't be home by Saturday night
I'll write you and let you know

でも丘を越えた可愛い娘を
追いかけたいのさ
土曜の晩までに戻れなきゃ
手紙でも書くよ

It's a mighty long way to Jacksonville
It's a mighty long way back home
But if I decide to settle down
I never more will roam

遥々来たよジャクソンヴィル
遠く我が家離れて
落ち着く先が決まったら
さすらいは止めるよ

But a pretty little girl runnin' over the hill
I want to follow her so,
If I won't be home by Saturday night
I'll write you and let you know
I'll write you and let you know

でも丘を越えた可愛い娘を
追いかけたいのさ
土曜の晩までに戻れなきゃ
手紙でも書くよ
手紙でも書くよ

The train I'm on is mighty long
Figure about a mile
And if she's gonna run on time
I'll greet her with a smile

乗り込んだのは、とても
長い列車
もし時間通り走るなら
俺はゴキゲンさ

But a pretty little girl runnin' over the hill
I want to follow her so,
If I won't be home by Saturday night
I'll write you and let you know

でも丘を越えた可愛い娘を
追いかけたいのさ
土曜の晩までに戻れなきゃ
手紙でも書くよ

Some people think that a rollin' stone
Gathers no moss
But I'm just a natural-born travellin' man
And I've suffered no loss

転がる石に苔生さず
って言うけど
風来坊の俺にや
失うものはない

“RAILROAD BOY”

“The Butcher Boy”また他曲“*There is a Tavern in the Town*”として知られる。
この悲しい曲、報われない恋、自殺、親との関わりの歌は、クラシカルなフォークのイメージを持っている。
元は1883年に“*There is a Tavern in the Town*”というタイトルで作られた。

She went upstairs to make her bed	娘は母に無言のまま
And not a word to her mother said	二階のベッドを整える
Her mother she went upstairs too	母は娘が気になって
Saying daughter, oh daughter, what's troublin' you?	二階の娘に呼び掛ける
Oh, mother dear, I cannot tell	お母さま、言えないの
It's that railroad boy that I love so well	恋した鉄道員は
He's courted me my life away	私の人生を奪い去った
And now at home he will not stay	この家にもう彼は来ないわ
There is a place in London Town	ロンドンの或る場所に
Where that railroad boy goes and sits down	彼は向かい、そこに落ち着き
He takes a strange girl on his knee	見知らぬ女にひざまずき
And he tells to her what he won't tell me	愛を告げたの…私を捨てて
Her father he came home from work	仕事終えた父が呼びかける
Saying, "Where's my daughter, she seems so hurt"	「出ておいで、辛いのかい?」
He went upstairs to gain her hope	二階に上がり彼は見る
And he found her hangin', hangin' by a rope	ロープに下がった娘の姿
(Oh, Oh)	(おお、おお)
He took a knife and cut her down	娘を床にロープから下ろし
And on her bosom these words he found:	ふところ 懐に遺言を見つける
"Go dig my grave both wide and deep	「大きな墓に私を埋めて
Put a marble stone at my head and feet"	頭と足元に墓石を立てて」
And at my breast put a white snow dove	胸の上には白雪姫
To tell the world that I died of love	愛に死んだと伝えてよ
And at my breast put a white snow dove	胸の上には白雪姫
To tell the world that I died of love	愛に死んだと伝えてよ

“RIDE THAT CHARIOT”

(トラディショナル霊歌)

Ride the chariot in the mornin’ Lord
Ride the chariot in the mornin’ Lord
Ride the chariot in the mornin’ Lord

二輪馬戦車に乗るのさ
二輪馬戦車に乗るのさ
二輪馬戦車に乗るのさ

REFRAIN:

Gonna ride the chariot in the mornin’ Lord
Ride the chariot in the mornin’ Lord
Gettin’ ready for the judgment day
My Lord, My Lord

※

朝には二輪馬戦車に乗って
イエス様に会いに行こう
審判の日への覚悟は出来た
主よ、主よ

Are you ready my brothers—“Oh, yes”
Are you ready my sisters—“Oh, yes”
Are you ready my brothers—“Oh, yes”
We’re ready for the chariot in the morning Lord (Oh)

兄弟よ、いいかい? 「オーケー」
姉妹よ、いいかい? 「オーケー」
仲間よ、いいかい? 「オーケー」
朝の二輪馬戦車を待っただけさ(オー)

REPEAT REFRAIN (We’re....)

※繰返し (俺達や…)

I never will forget that day
Ride the chariot in the morning Lord
When all my sins, they was taken away
Ride the chariot in the morning Lord

決してあの日は忘れないぜ
朝には二輪馬戦車に乗るのさ
全ての罪が悔い改められた時
朝には二輪馬戦車に乗るのさ

REPEAT REFRAIN (We’re....)

※繰返し (俺達や…)

“SARO JANE”

この歌詞はABCフーテナニー・ムービー・クリップの中でゴールドブライアーズが歌った船歌……
このCDロム本に収録されております。

I've got a wife and five little children
Believe I'll take a trip on the big MacMillan

俺にゃ女房と五人の子供がいるぜ
マクミラン号で船旅をするのさ

REFRAIN:

Oh, Saro Jane, Oh, Saro Jane
Oh, nothing to do but to sit down and sing
Rock about my Saro Jane

※

おお、セイロ・ジェーン、おお、セイロ・ジェーン
おお、やる事無いけど座って歌うよ
俺のセイロ・ジェーン

I'm gonna rock about my Saro Jane
Rock about my Saro Jane
Oh, nothing to do but to sit down and sing
Rock about my Saro Jane

歌うロックは俺のセイロ・ジェーン
ロックでセイロ・ジェーン
おお、やる事無いけど座って歌うよ
俺のセイロ・ジェーン

The engine gave a whistle, the whistle gave a squall
The engine is going through a hole-in-the wall

エンジンうなって嵐を呼ぶぜ
エンジンが壁を突き抜ける

REPEAT REFRAIN

※繰返し

The Yankee built the ships for to shoot them Rebels
My gun's ready and when she's level

北軍軍艦、南軍撃って
俺の銃は女房を撃つさ

REPEAT REFRAIN

※繰返し

I've got a wife and five little children
Believe I'll take a trip on the big MacMillan

俺にゃ女房と五人の子供がいるぜ
マクミラン号で船旅をするのさ

Oh, Saro Jane, Oh, Saro Jane
Oh, nothing to do but to sit down and sing
Rock about my Saro Jane (Saro Jane)

おお、セイロ・ジェーン、おお、セイロ・ジェーン
おお、やる事無いけど座って歌うよ
俺のセイロ・ジェーン

“SHENANDOAH”

1826年に作られる。これは船歌で、イカリ巻上げ時や積み荷の上げ下ろしの時に歌われる。
曲の起源は謎で、川で生活する昔のアメリカ人という説と、ボヤジャーズ★という説がある。
他にも、海に沈む前のある国の国歌という説もある。広く一致する見解は、
アイルランド人とアフリカ系アメリカ人の要素があるということである。
“Shenandoah”は陸地でも海でもよく歌われることから、無数に名前があり、
“Shennydore”、“The Wide Missouri”、“The Wild Mizzourye”、“The World of Misery-Sold Fas”
(恐らく最も古いバージョンで、西部のインディアン船歌)、
“The Oceanida”、“Rolling River”などがある。
シェナンドーは、ミズーリ川付近に住むインディアン酋長の名前でもある。

★—毛皮会社に雇われ、カナダ辺地に人や物資を運んだ人

★★—シェナンドー河 (Virginia 州の北西部の川)

Da, Da, Da, Da, Da, Da, Da, Da etc.

ダ・ダダダダ・ダダダダ・ダ...

Oh, Shenandoah, I long to see you
Way-hey, you roaming river
Oh, Shenandoah, I long to see you
Away - I'm bound away
'cross the wide Missouri

おお、シェナンドー、お前に会いたいよ
ゆらゆらと、河を彷徨うお前
おお、シェナンドー、お前に会いたいよ
俺は広大なミズーリの
虜になっちまったよ

Oh, Shenandoah, I love your daughter
Way-hey, you roaming river
Oh, Shenandoah, I love your daughter
Away-I'm bound away
'cross the wide Missouri

おお、シェナンドー、あの娘が好きさ
ゆらゆらと、河を彷徨うお前
おお、シェナンドー、あの娘が好きさ
俺は広大なミズーリの
虜になっちまったよ

Oh, Shenandoah, I'm bound to leave you
Way-hey, you roaming river
Oh, Shenandoah, I bound to leave you
Away-I'm bound away
'cross the wide Missouri

おお、シェナンドー、離れ離れだよ
ゆらゆらと、河を彷徨うお前
おお、シェナンドー、離れ離れだよ
俺は広大なミズーリの
虜になっちまったよ

Da, Da, Da, Da, Da, Da, Da, Da etc.

ダ・ダダダダ・ダダダダ・ダ...

“SWEET POTATOES”

(クレオール人★のフォーク・ソング)

★—中南米の西インド諸島で生まれた(特にスペイン系の)白人

REFRAIN:

Roo, roo roo roo, sing roo
Sing hawketakum
Roo roo roo roo, roo roo roo roo

Soon as we all eat sweet potatoes
Sweet potatoes, sweet potatoes
Soon as we all eat sweet potatoes
Hurry up to bed

Soon's we touch our heads to the pillow
To the pillow, to the pillow
Soon's we touch our heads to the pillow
Go to sleep once more

REPEAT REFRAIN

Soon's the rooster crows in the morning
In the morning, in the morning
Soon's the rooster crows in the morning
Hurry wash our face

Soon as we all eat mommy hollers
Mommy hollers, mommy hollers
Soon as we all eat mommy hollers
Hurry up to bed

REPEAT REFRAIN

※

ルー、ルールー、歌うルー
歌うハウキテーカム
ルールールー、ルールールー

食べ終わるよ、スイート・ポテト
スイート・ポテト、スイート・ポテト
食べ終わるよ、スイート・ポテト
おやすみなさい

頭を乗せて、枕に
枕に、枕に
頭を乗せて、枕に
また眠りましょう

※繰返し

コケコッコ鳴く、朝方
朝方、朝方
コケコッコ鳴く、朝方
さぁ顔洗おう

怒り出すぞ、ママぎゃーぎゃー
ママぎゃーぎゃー、ママぎゃーぎゃー
怒り出すぞ、ママぎゃーぎゃー
おやすみなさい

※繰返し

“VOYAGER’S LAMENT”

カートによって“航海者の悲歌”と名付けられたこの曲は、英語とフランス語で歌われる。
このフランス語歌詞については、ドーティーの義理の兄弟ダニエル・キャスリンがその翻訳を助けた。
カートが“The Joys of Love”という曲に(フランス語タイトル“Plaisir d’ Amour”、即ち“lost pleasure”)
航海者の歌詞を乗せ、ゴールドブライアーズの“Voyager’s Lament”となる。

Oh.....

There once was a voyager banished from his home

There was a voyager banished from his home

オー...

かつて母国を追われた船乗り

かつて母国を追われた船乗り

While crossing many lands weeping as he roamed

While crossing many lands weeping as he roamed

国々またぎながら涙流した

国々またぎながら涙流した

×2

Si to vois mon pays

(French translation: If you see my homeland)

Mon pays malheureux

(French translation: Know that I'm homesick)

×2

母国を見たならわかっておくれ

恋しい気持ちをわかっておくれ

愛の喜びは刹那

Joys of love are but a moment long

×2

友に伝えてよ、想っていると

友に伝えてよ、愛していると

×2

va dire a mes amis

(French translation: Go tell my friends)

que je me souvient d'oux

(French translation: I remember them)

愛の痛みが人生を紡ぐ

愛の喜びは刹那

愛の痛みが人生を紡ぐ

The pain of love endures the whole life long

朝陽の中に夢は消えたけれど

Joys of love are but a moment long

いつまでも愛は心に生きてる

The pain of love endures the whole life long

My love now has gone like a dream

that fades into dawn

But the words stay locked in my heart-strings,

“My love loves me”.

“ZUM GALE GALE”

“Zum Gali Gali”または“Zoom Gole Gole”としても知られる

イスラエルのフォーク・ソングで、作者は不祥。

この曲は、イスラエルになる以前のパレスチナで、シオニズムの開拓者達に歌われた曲。

歌詞の解釈として……一つになって働く開拓者達よ、全世界に平和が訪れるであろう、
夜が明け陽が沈むまでに、人々は成されるべき仕事を見つける。

Zum Gale Gale, Zum Gale Gale

ズンガリガリ、ズンガリガリ

Zum Gale Gale, Zum Gale Gale

ズンガリガリ、ズンガリガリ

Zum Gale Gale, Zum Gale Gale

ズンガリガリ、ズンガリガリ

Zum Gale Gale, Zum Gale Gale

ズンガリガリ、ズンガリガリ

Avo-dah lah mon eh-chalutz.

アーヴォダーリーマンニハルーズ

(Zum Gale Gale, Zum Gale Gale)

(ズンガリガリ、ズンガリガリ)

Avo-dah lah mon eh-chalutz

アーヴォダーリーマンニハルーズ

(Zum Gale Gale, Zum Gale Gale).

(ズンガリガリ、ズンガリガリ)

Oh.....

オー……

Zum Gale Gale, Zum Gale Gale

ズンガリガリ、ズンガリガリ

Zum Gale Gale, Zum Gale Gale

ズンガリガリ、ズンガリガリ

Hechalutz le maan avoda

ヘイハルーズリーマーナヴァダ

(Zum Gale Gale, Zum Gale Gale)

(ズンガリガリ、ズンガリガリ)

Hechalutz le maan avoda

ヘイハルーズリーマーナヴァダ

(Zum Gale Gale, Zum Gale Gale)

(ズンガリガリ、ズンガリガリ)

Oh.....

オー……

Zum Gale Gale, Zum Gale Gale

ズンガリガリ、ズンガリガリ

(Zum Gale Gale, Zum Gale Gale)

(ズンガリガリ、ズンガリガリ)

Zum Gale Gale, Zum Gale Gale

ズンガリガリ、ズンガリガリ

The GoldeBriars' Story
“Whatever Happened to Jezebel?”
The GoldeBriars' Epic Years
ジェザベルに何があったの…?

FOOTNOTES

3

“Sometimes Happy Times”

by Dotti Holmberg

ドーティー・ホルムバーグ

“Sometimes Happy Times”

脚注3 ドーティー・ホルムバーグ “Sometimes Happy Times”

その明るく響き渡る声は、彼女がカート・ベッチャーと共に結成したフォーク/ポップ・グループ、ゴールドブライアーズにも確認できる。“Sometimes Happy Times”はサンシャイン・ポップの傑作17曲から成り、サポート・アーティストとしてカート・ベッチャー、サンディ・サリスベリー、キース・オルセン(ミレニウム)が参加、シンプルな美しさを持つ素敵な1966～70年までのデモやホーム・レコーディング集。

歌詞とライナーノーツ 目次

I Sing My Song	168
Sea of Tears	169
Foolish Times	170
And We're One	171
Let You Know	172
The Bird (Didn't Die)	173
To Touch Upon The Light	174
The Essence	175
It's Not Worth It At All	176
Love Is (demo)	177
Baby's Blues (demo)	178
Sometimes Happy Times	179
Magic Carpet Ride	180
Pickin' Daisies	181
When The Wind Blows (demo)	182
Love, Love (demo)	183
Visualize (demo)	184
ライナーノーツ	185

ニューヨーク州コクサッキーのサンデイズド・
ミュージック・レーベルから2002年リリースの
CD (Sundazed SC 11114)

www.sundazed.com

66〜70年までの未発表曲と当時の写真を含
む12ページのブックレット付



“Sometimes Happy Times”

ドーティー・ホルムバーク

I Sing My Song
Sea of Tears
Foolish Times
And We're One
Let You Know
The Bird (Didn't Die)
To Touch Upon The Light
The Essence
It's Not Worth It At All
Love Is (demo)
Baby's Blues (demo)
Sometimes Happy Times
Magic Carpet Ride
Pickin' Daisies
When The Wind Blows (demo)
Love, Love (demo)
Visualize (demo)

“I SING MY SONG”

Written by Michele O'Malley & Dana Adams

I sing my song	歌うわ
But you don't sing along	わたしの歌を
The sun won't shine	太陽は暗い
Until you find the time	君と歌うまでは
To share with me that happy glow	夢見る幸せ
The one that only lovers know	恋人達だけの
When spring is near	春の日
And when I close my eyes	目を閉じれば
I see my own disguise	浮かぶまどろみ
And I see that you're there too	まぼろしの君
But we'll be free someday	でも不安が
When fear has flown away	晴れる頃には
I'll be standing there by you	自由になれる
I see the sign	見えるの
Your soul igniting mine	君に光る愛
Our light still clear	ぽつり、ぽつり
Although you're seldom here	瞬きのように
I still believe you'll come to me	君を信じてる
The past is just a memory	恋した思い出と
Of loving you	共に
And though our words are wise	見つめ合えば
Our lives are filled with lies	浮かぶ真実
For silence holds the truth	言葉の影に
Sometimes a silver star	いつか星が
Reflects the love we are	私の愛を
And that's when I see you	君へと運ぶ

“SEA OF TEARS”

Lyrics by Bob Goldstein & Music by Curt Boettcher

Sailing on a sea of tears
Alone and feeling kind of blue without you
So I'll be sailing far away, far away to stay
To stay and cry
And try and try
To find someone who may be will be fun again
Or maybe find a friend who's true

涙の海で
寂しさと悲しみに揺れながら
漂うわ
遠く遠く
辿る波の果て
戯れ合える誰かに
本当の友に出会うため

...And so I'm sailing on a sea of tears
Alone and blue because of you
Can't you see that I'm sailing on and on
The night turns into dawn
And day is gone and dusk comes on
And on and on, I search for someone just like you
But that's the worst thing I could do

涙の海で
寂しさと悲しみに暮れ
漂い続ける
朝焼けまで
時が過ぎ夕暮れを越えて
誰かを探してる
でも想いは揺れ続けるだけ

Because I'm sailing.....Doo, doo, doo, doo, etc.
Sailing on a sea of tears
Alone and feeling kind of blue without you
So I'll be sailing far away, far away to stay
To stay and cry
And try and try
To find someone who may be will be fun again
Or maybe find a friend who's true

デュデュデュデュ……
涙の海で
寂しさと悲しみに揺れながら
漂うわ
遠く遠く
辿る波の果て
戯れ合える誰かに
本当の友に出会うため

Doo, doo, doo, doo, etc.

デュデュデュデュ……

Published 2003 Take Home Tunes/ASCAP

“FOOLISH TIMES”

Words & Music by Curt Boettcher

You are alone in the shadow
Of a sun that never shines
Can't you see your toys are rusty
So put away your foolish times

君は孤独な影の中
光のない太陽の下
君のおもちゃは色褪せてるね
愚かな^{とき}時間を捨てちゃいなよ

Wings of pasted wax and feathers
Flying into nowhere times
My love melted all your highs
And sent you down to foolish times

君は蠟と羽の翼
偽りの時を飛びまわる
僕の愛溶かすその自惚れ
君は愚かな^{とき}時間に落ちてゆく

Going back past my beginning
Back before I met my mind
There I had a special friend
Who chased away my foolish times

始まりに戻ろう
目覚める前の僕に
特別な友がそこで
僕の愚かな^{とき}時間を追い払う

“AND WE'RE ONE”

Lyrics by Dotti Holmberg & Music by Sandy Salisbury

Hearts meet
And off we go
Away to new and better lands
Where we will meet
And seek and find and give
And feel our warm thoughts
That we'll tie together as one
On the rainbowed paths to be spun
And we will sing our love sounds
On life's merry-go round
And we're one.

Breeze hums
And sun shines
Through solid silver pillowed clouds
And tear drops pour
As we see through misty eyes
And we cry our love
As an endless echo of sound
And we laugh with the love we have found together
Inside we're feeling
That hearts will go easily along

BRIDGE:

Sunset falls in place
Into love's land of peace
Catching happy times
With love

Looking through our eyes
With laughing smiles
That softly say
Silently a spell has been cast
Embracing words that make searching a thing
in the past
For we've found our love can now last
And we will shimmer and steal away
Sailing together as one

FADE:

With love—And we're one
With love—And we're one

ふれあい
そして旅立とう
素敵な国へと
出逢いましょ
ふたり何度も
ほのぼのと
腕組み歩くわ
虹の架け橋わたり
歌う日々は
メリーゴーラウンドみたい

そよ風
そして陽射し
光る雲の枕
見つめ合う
涙は雨粒
鳴り止まぬ
この愛のこだま
笑い声響かせる
胸の奥に
ときめく恋よ

夕陽落ちる
平和な愛の国
幸せを
乗せたまま

瞳語るわ
にっこり柔らかに
静かに魔法をかけた
言葉が探り当てるのは
ちらちら光る愛に
ゆらり揺られ
歩む二人よ

愛し合う
愛し合う

Published 2002 Apple Core Publishing/BMI

“LET YOU KNOW”

Lyrics & Music by Dotti Holmberg

Love makes the world
Love makes the world
So don't take me down
To the level of the ground
Cause love makes the world

この世は愛
愛で出来ている
壊さないで
愛の地を
愛あるならば

Why do you say words that make me blue
When all the time I'm with you
So get off that boat
And return to home
Cause love makes the world

悲しい言葉
投げかけるのなら
舟を降りて
独り帰って
愛が無いのなら

Why do you hurt yourself so?
Why don't you let your mind go?
Cause it's love that makes the soul
And it's the love that lets you know-
Let you know

何故あなたそんなに
自分を傷つけるの
あなたの愛し方
それがあなたの姿
姿

Your soul tries to get through
It wants to live the you
So let all your days be one
For you can see the sun
Cause love makes the world

あなたの心が
求めるあなたに
近づくなれば
あなたは見るわ
あなたの姿を

And it's the love that lets you know
So let you know, so let you know, etc.

伝えたいのよ
伝えたいのよ……

Published 2002 Apple Core Publishing/BMI

“THE BIRD”

Lyrics & Music by Dotti Holmberg

この作曲についてのちょっとした話。この曲は、ミネソタにいる私の家族を訪ねた折に見た夢からインスパイアされて書いたもの。夢の中で、私の飼っていた2羽のうちのインコ1羽が死んでしまいました。そしてカリフォルニアに戻ると、アパートの留守番をしていた友人が言ったのです。「昨晚あなたの鳥が死んじゃった」

Verse 1:

The bird died last night
And I knew it in my dream
Oh, you tell me and I know
The bird died and it was so cold

夢枕に
小鳥が死ぬ
君から伝え聞く
小鳥の死、冷たい小鳥

Verse 2:

He went home to rest
In its nest of the sky
And I'll tell you I can cry
But the bird really didn't die

鳥は帰った
空の家へと
悲しいけれど
胸の中で、鳥は生きる

Bridge:

After the snow fell
The ice melted
And the spring came
And flowers grew from the rain

降る雪に
鳥の声
春が来て
花育む雨

Counterpoint Bridge:

I watched the snow fall
And heard the bird call
And then the spring came
And flowers grew tall from the rain

声無き声は
戦を知らず
平和を歌うために
帰って来るの、蘇るの

Verse 3:

He went home singing
Carrying news of the war
And now he can come back bringing
Peace and the Evermore

鳥は心に
視線送るの
自由の歌、歌い続け
現実を見下してる

Verse 4:

You see, the bird didn't die
His eyes are within all of us
Ringin' freedom we want, but still are crying
Now the bird knows reality

降る雪に
鳥の声
春が来て
花育む雨

Repeat verse #1

But he really didn't die, No, he really didn't die
Ooh, ooh, ooh, etc.

夢枕に
小鳥が死ぬ
君から伝え聞く
小鳥の死、冷たい小鳥

生き続けるわ、この胸の中
ウー、ウー、ウー……

Published 2002 Apple Core Publishing/BMI

“TO TOUCH UPON THE LIGHT”

Lyrics & Music by Dotti Holmberg

To touch upon the glow of night
I once could live the burning light
But now you're gone, my eyes can't see
For beyond the mist there's only me

夜の手触り
燃え続く灯り
でも君はいない
この霧の彼方に

I say I'll start and face the new
But when I turn around there's only you
You left uncertain of your way
Now each day passes on to another day

忘れようとしても
胸を離れない
今 君はいない
時が過ぎて行くだけ

You kept many promises held inside
But all the love you held you tried to hide
And now two hearts walk alone but free
Pretending but leaving behind what could be

秘められた約束
隠された君の愛
心は離ればなれ
平気なふりで過ごす日々

I can sit alone and feel the night
And touch upon the glowing light
And hold it captive one moment more
Till the night breaks through towards the lonely
door

孤独に暮れる夜
燃え立つ灯りに
また想いを寄せている
寂しいドアに夜が過ぎるまで

Lonely door, lonely door, etc.

寂しいドアに、寂しいドアに、……

Published 2002 Apple Core Publishing/BMI

“THE ESSENCE”

Lyrics & Music by Dotti Holmberg

The moon turns into shadows
The likeness of your eyes
The wanderlust in meadows
The willows whispering by

月の陰り
君の瞳
草原のお散歩
ヤナギの囁き

The aftermath of showers
The fragrance in my heart
The mellow tuning hours
The clock turns back to start

シャワーの湯けむり
香る心
ゴキゲンな^{とき}時間
日を替える時計

Its memory we still cling to
Not really knowing why
For yesterday can take you
On a loving lullabye

何故かしらまだ
消えぬ思い出
想い返す日々
子守歌に

And the days can't get much dimmer
As the clouds go floating by
And I see you walking slowly
With the shadows in your eyes

陰りのないお天気
流れ行く雲に
そっと歩く君の
陰りある瞳

The clock just struck the hour
And you know our time has past
And the essence grows the flowers
But the beauty doesn't last

時打つ音色に
日々は移ろう
美しい花も
いつかは老いる

And the evolving, strumming music
Now lingers in our hearts
But the message in its turning
Still keeps us apart

つま弾く音が
胸に名残る
奏でるメロディ
さよならの調べ

Published 2002 Apple Core Publishing/BMI

“IT’S NOT WORTH IT AT ALL”

Lyrics & Music by Dotti Holmberg

Refrain:

Unsatisfied—

It’s not worth it at all

Not worth giving at all

Not worth living at all

※

満たされない

くだらなすぎ

取るに足らない

やりきれない、まったく

Verse #1:

I gave to you all my love

And you gave me yours

Now still I give you all my love

While from you I get no more

※※

愛して愛された

仲なのに

やるせない片思い

やり場のないこの思い

Repeat Refrain

(※繰返し)

Verse #2:

I try to understand why

Your love no longer is

People say there’ll be another guy

But you know your love is his

解かる術もない

無くした恋

他の恋をしるだなんて

味気ない言葉ね

Repeat Refrain

(※繰返し)

Bridge:

How can I go on feeling this way?

Is it worth from love to fall?

Feeling a little bluer each day

No, it’s not worth it at all

こんなのいつまで続くの?

恋した価値あるかしら

日ごと辛くなるばかり

もう嫌、ウンザリ

Repeat Refrain

(※繰返し)

Repeat 1st Verse & Refrain

(※※、※繰返し)

Published 2002 Apple Core Publishing/BMI

“LOVE IS”

Lyrics & Music by Dotti Holmberg

この作曲についてのちょっとした話。

1965年、この曲は、日本の唱歌“さくら”からインスパイアされて出来ました。
ゴールドブライアーズ最後のリハーサルでカートは、ステージで演奏しようと
メンバー達に“さくら”を伝え、私達は彼が教えた通りに日本語で覚えました。

大好きなメロディだけど歌詞の意味が分からなかったので、
胸に焼きついたうる覚えの美しいメロディから、自分で歌詞を書く羽目になったのです。
自分の詞にフィットするように、展開部分のメロディを付け加えました。

Verse 1:

Love is strange, love remains
Passes on from age to age
Holds its spell, it will never change
Love is strange, love is strange

愛は謎、愛は残像
月日と共に移ろう
永遠^{とわ}に続く魔法
愛は謎、愛は謎

Verse 2:

Love finds you
Love finds two
Holds its beauty as the sky is blue
Gathers tears as the morning dew
Love finds you, love finds you

愛が君に
愛が二人に
空色の夢焼きつける
朝露は涙の粒
愛が君に、愛が君に

Bridge:

Love is kindness
Love is mine no less
Love is timeless
Love is, Love is

愛は優しさ
愛は私のもの
愛は無限
愛、愛

Verse 3:

Love is one
Togetherness spun
As the weaver who weaves and never is done
As four seasons make a year, evolved by the sun
Love is one, love is one

愛はひとつ
結ばれた二人
永遠^{とわ}に紡ぎ続ける人
季節が巡るように
愛はひとつ、愛はひとつ

Repeat Bridge & 1st Verse

愛は優しさ
愛は私のもの
愛は無限
愛、愛

愛は謎、愛は残像
月日と共に移ろう
永遠^{とわ}に続く魔法
愛は謎、愛は謎

Published 2002 Apple Core Publishing/BMI

“BABY’S BLUES”

Lyrics & Music by Dotti Holmberg

Cause I’m a’love you too
I am the cause of your blues
And when you stop, look around
You say, Babe, I’m gonna leave this town

あたしの愛に
あなたは悩む
立ち止り、見渡し
あなたは言う、町を出るよと

You know, I’m lone and blue
I can’t stop loving you
I’m gonna pull all my hair out and leave
Just pull by the roots for I grieve

止められないわ
あなたへの愛
この髪引きちぎるほど
悲しい気持ちなの

Oh, my baby’s blues
They get me so low down
My baby’s got a whole lot of blues
My baby’s blues, my baby’s blues

オー、あなたの嘆き
落ち込むあたし
悲しみ背負うあなた
マイ・ベイビーズ・ブルース、マイ・ベイビーズ・ブルース

We all want your love
To hold in souls of our shoes
Love’s blessings are your blue
Oh, what to do with baby’s blues?

皆あなたが好き
あなたが支え
愛がもたらす悲しみ
どうすりゃいいの?

You cry, go leave my place
More love than heart can taste
I cry, gonna leave, no more town
You know, love’s roots got me down

あなたは叫ぶ
堪えられないよと
あたしも出て行くわ
この愛が悲し過ぎる

Oh, my baby’s blues
They get me so low down
My baby’s got a whole lot of blues
My baby’s blues, my baby’s blues

オー、あなたの嘆き
落ち込むあたし
悲しみ背負うあなた
マイ・ベイビーズ・ブルース、マイ・ベイビーズ・ブルース

Oh, what to do, ’bout baby’s blues
My baby’s blues, my baby’s blues

仕方ない、やるせない
マイ・ベイビーズ・ブルース、マイ・ベイビーズ・ブルース

Published 2002 Apple Core Publishing/BMI

“SOMETIMES HAPPY TIMES”

Lyrics & Music by Dotti Holmberg

Sometimes I can be so happy
And smile about and go so free
But then your love was beside me
And now your love is held inside of me

わたし時々幸せ
微笑む愉快的な振る舞いで
あなたがここにいた日々
思い出を胸に集めて

Time will pass this lonely shadow
And we will look towards greener meadows
We will grow another flower
And we will share another hour

私の影に時が過ぎる
別々に青い草原を見て
別々の花育てるの
別々の時を過ごすのよ

And the hour isn't too much longer
And the showers they won't fall too much longer

つまらない時が流れるわ
手早く終らせるシャワー

They'll be a time
And there'll be a place
When we will meet face to face

いつの日にか
いずれ何処かで
あなたに会ったなら

When the sadness slips out slowly
It robs my heart of sunshine

悲しみ沁みる、ゆっくり
心の陽だまり無くし

Da, da, da, da, da, etc.

ダ、ダ、ダ、ダ、ダ、ダ……

Sometimes I can be so happy
And smile about and go so free
Da, da, da, da, da, etc.

わたし時々幸せ
微笑む愉快的な振る舞いで
ダ、ダ、ダ、ダ、ダ、ダ……

Published 2002 Apple Core Publishing/BMI

“MAGIC CARPET RIDE”

Lyrics by Dotti Holmberg & Music by Ty Chase AKA Randy Swickard

Verse 1:

I'm on a magic carpet ride
You've got my dreams a'flyin' high
The little dipper will be my guide
From over a rainbow to by your side

Verse 2:

I'm on a magic carpet ride
Two birds are singing by my side
Let two love knots together tie
To keep my carpet a'flyin' high

BRIDGE:

You say you've got Aladdin's lamp
And, you'll light up the world for me
And carry the stars to my front door
Showing me how love can be

Verse 3:

I'm on a magic carpet ride
The sun is shining in my eyes
You've asked my dreams to meet love's tide
From over a rainbow to by your side

REPEAT 1st Verse

※

魔法の絨毯に乗った
君が僕に夢くれた
道しるべは小ぐま座
虹の向こうに越えるさ、飛ぶのさ

僕の魔法の絨毯
鳥たちも歌うさ
結んだ二人の愛
その力で飛ぶのさ、飛ぶのさ

アラジンのランプ擦って
君が世界照らしたよ
星を運びドア開き
愛のパワー示すのさ

魔法の絨毯に乗った
瞳の中には太陽さ
君がくれた愛の季節
虹の向こうで出会うさ、飛ぶのさ

(※繰返し)

Published 2002 Apple Core Publishing/BMI

“PICKIN' DAISIES”

Words & Music by Zel & Gary Black

I keep pickin' daisies
Though my thoughts are hazy
And I'm going crazy over you

花摘みはデイジー
気分ぼんやり
あなたのこと思う

I keep pickin' daisies
Feeling kinda lazy
Love is so amazing it's true

花摘みはデイジー
気分はレイジー
恋は不思議です

My thoughts are getting cloudy
Feeling awful rowdy
So very much in love with you

意識は霞み
気持ち騒がしい
恋で一杯です

Daisies in my hand
Tell me if my man
Really loves me too

デイジーつまむ
恋を占う
彼の心

I just can't explain
The feelings and the pain
That I'm going through
Since I fell
Since I fell
Since I fell
In love with you...

言い表せない
恋に胸が痛い
もうやりきれない
あなたに
あなたに
あなたに
恋してる……

A field of daisies
He loves me or he loves me not
A field of daisies
Don't forget to add a forget-me-not

デイジーの野原で
恋を占ってるの
デイジーの野原で
願いを込めているの、彼の心

I keep pickin' daisies
Though my thoughts are hazy
And I'm going crazy over you

花摘みはデイジー
気分ぼんやり
あなたのこと思う

I keep pickin' daisies
Feeling kinda lazy
Love is so amazing it's true

花摘みはデイジー
気分はレイジー
恋は不思議です

My world's a topsy-turvy
Always in a hurry
Just to be a-holding you

あたふたの私
いつも大急ぎ
あなたが溢れる

Daisies in my hand
Tell me if my man
Really loves me too

デイジーつまむ
恋を占う
彼の心

“WHEN THE WIND BLOWS”

(“The Wind”としても知られる)

Words & Music by Dotti Holmberg

When the wind blows, you will return
When the wind blows, our hearts will yearn

風が吹き、君帰る
風が吹き、懐かしむ

And it's calling me with its sound
And it's calling, spinning around

風の音が呼んでいる
風の音が舞っている

When the wind blows, the windmills do sing
When the wind blows, all the bells do ring

風が吹き、風車舞う
風が吹き、鐘が鳴る

And it's calling me to a place
And it's calling, air floating space

私を連れて行く
空間を漂いつつ

When the wind blows, the souls will rise to high
When the wind blows, we reach our hearts and cry

風が吹き、胸高鳴る
風が吹き、心を知る

And we call out in words we can feel
And it's happening, we know it is real

思いのまま風に呼ぶ
真実を物語る

When the wind blows, you will return
When the wind blows, our hearts will yearn

風が吹き、君帰る
風が吹き、懐かしむ

And it's calling me with its sound
And it's calling, spinning around....
Spinning around

風の音が呼んでいる
風の音が舞っている……
舞っている

And I'm after the life I do want to live
And I'll follow the cries of the wind...
Of the wind...
Spinning around, spinning around

いま思いのまま生きる
風の叫び聴いて……
聴いて……
舞っている、舞っている

When the wind blows,
When the wind blows,
When the wind blows

風は吹く、
風は吹く、
風は吹く

Published 2002 Apple Core Publishing/BMI

“LOVE, LOVE”

(“Love We Long For”としても知られる)

Words & Music by Dotti Holmberg

Laughing with the trees
Smiling with the breeze
Let us walk along
And sing a song of love

木々に笑いかけ
風に微笑んで
共に生きる
愛の歌うたう

Your feet caress the leaves
Just singing in the breeze
Drop your worries off
Around the corner P.O. Box away

そよぐ緑を
足が撫でて
悩みは消える
街角のポストの向こうへ

The rain is finally gone
The stormy days were long
Let your senses feel
Oh, how this present day can be so real

続く嵐の
雨が止んだら
心解き放ち
喜びを祝おう

Sometimes I feel so old
Remembering the cold
But now it's warm
So nice & warm
Just holding your hand

老いる年を
寒さに思う
でも今は
あったかい
君の手の温もりで

Slow down your hurried day
And let us go away
Take a walk with me
And maybe we can be the love we long for

生き急いだ日よ
我を解き放て
共に歩もう
理想の愛を育もう

La da da da (twice)

ラダダダ(×2)

Take a walk with me
and maybe we can be the love we long for

共に歩もう、理想の愛を育もう

Ooh ooh & out

ウーウー……

Published 2002 Apple Core Publishing/BMI

“VISUALIZE”

(“Looking Glass”としても知られる)

Words & Music by Dotti Holmberg

Verse 1:

In the looking glass of your own sun
There's love for everyone
In this world you can come along too
There's love inside of you

※

その君の太陽
鏡に映る
みな君を待ってる
その愛ゆえに

Chorus #1:

Come along, come along take my hand
Look to the sunshine, you'll understand

※※

手を繋いで行こう
陽射し浴びれば分かる

Come along, don't wait long, now's the time
When rainbows and dreamlands unfold and unwind

おいで今がその時
広がる虹と夢の国

Verse 2:

In the looking glass goodness can't hide
When love's strong by your side
When I take off my mask I can see
And outpours the love from inside of me

鏡は嘘つかない
その強い愛に
私の心覗けば
愛が零れる

Chorus #2:

Come along, come along, don't be slow
You missed the last train, said you're feelin' low

おいでモタモタせず
乗り遅れたらダメさ

The gold in your heart, you will find it too
Just look to the love, so the sun can shine through

君の胸に透ける
金色の愛が見えるよ

Repeat Verse #1

(※繰返し)

Repeat Chorus #1

(※※繰返し)

In the looking glass of your own sun
In the looking glass of your own sun

その君の太陽
その君の太陽

Published 2002 Apple Core Publishing/BMI

“Sometimes Happy Times”

ドーティー・ホルムバーグ

ライナーノーツ

1960年代における彼女の
音楽経歴

ナチュラル・ハイ——

ドーティー・ホルムバーグの曲



パート1 “歌って、踊って、夢見て”

よくあるサクセス・ストーリーによる典型的な逆転人生の場で、ショービズのお膝元カリフォルニア州ハリウッドにドーティー・ホルムバーグは生まれた。その後すぐに引越した場所は、極端にショービズとかけ離れた土地……ツイン・シティと呼ばれるミネソタ州ミネアポリスとセント・ポール。まだ生後7ヶ月では理解できない何か、両親の離婚によって、彼女はみすばらしい状況へと追い込められた。ドーティーとその赤ちゃん服は、汽車に乗った2才の姉シェリと3才の兄ゲイリーのあいだへと押し込まれた。そして3人の幼児は、彼らの養育を引受けた祖母の元へと送られた。

3才になると、既にピアノで2人の兄弟の伴奏をしていた彼女は、お婆ちゃんの励ましを受け、5才のシェリとデュオでパフォーマンスをし始めた。「望まれる望まれないにかかわらず、歌とタップ・ダンスを披露したわ」とドーティー。「酒場でもね。チップが良かったの。映画みたいじゃない? “チップで歌ってくれるかい? お嬢さん”ってね」

映画のモンタージュ編集のように、少女達の背とボーカル・テクニクは、ぐんぐんと成長した。2人は10年の間に、教会や慈善事業の場で、ツイン・シティの“The Holmberg Hi-Lite Sisters”として紹介されるようになっていった。御手洗い、ボイラー室、階段の吹き抜けでの衣装替えを覚えた彼女達だったが、再びハリウッドへ戻る決心を固めていた。確かに空想のゴールではあった。しかしナイトクラブのステージに立ち、クロース・ハーモニー★で“第三の男”、“バードランドの子守唄”、“ミシシッピー・マッド”、さらにひょうきんなデュエットで“Sisters”を歌うようになると、彼女らの成功はますます必然のものと思われた。

★—メロディに対して出来るだけ近い音で
ハーモニーを構成する手法

兄のゲイリー ——3兄妹の中で最もいい声。彼も歌は歌っていたが、性別の違う彼の音楽的才能は、十代の終わりになるまで妹達と交わることはなかった。さらにその機会は最終的には短い期間に終わったが、友人のロン・ニールソンを加えたグループが結成された。4人グループ、キーノーツとして幾つかのタレント・コンクールに優勝したことで、先々のライブ・ショーを約束されたかのようにも思われたが、ゲイリー自身のキーノーツへの興味は、別グループのストウアウェイズに参加することで限定されていた。そして彼の執着により、ストウアウェイズは続けられることになる。差し当たってシェリとドーティーは不安を募らせ、もっと才能を活かすための何かを探り始める。そしてすぐに運命の日が訪れた。

それはたくさんの雪が降ったある冬の夜に、フォーク好きの若者が集うミネアポリスのコーヒー・ショップ、ル・ズーから、ぽつぽつと客が家へ引き上げ始めた頃に起こった。スタッフ達は、この天気で客よりスタッフの方が多いという状況を何とか凌がねばならなかった。

長い部屋の端の剥き出し舞台の真ん中では、小柄なフォークの弾き語りシンガーが、コーヒー・カップを揺らす客達の疎^{まば}らな拍手に、彼のショーを終えようとしていた。

必死の形相で、そのパフォーマーは観客に“Puff the Magic Dragon”を彼と一緒に歌うよう求めている。曲の半分が過ぎると、彼の鮮明なテナー・ボイスに無理なく絡みつく2つの聴き慣れぬ声が、そこに響き始めた。

勿論、これが映画ならば、無我夢中で歌うフォーク・シンガー、カートがその少女達をステージへ誘うというシナリオになるだろう。しかし彼はそうはしなかった。少女達を誘い出したのは、ショップ・オーナーで音響・照明担当の男だった。しかしながらクラブにいた誰もが、そこで聴いている何かが実はカリフォルニア“サンシャイン・ポップ”と呼ばれるものになることを、実感してはいなかった。さらに彼らが聴いたのは、正真正名の最初のゴールドブライアーズだった。

グループ名を選ぶ……ゲイリーの友人ロン・ニールソンの加入により、ゴールドブライアーズは、グループとしての基本的な状態を確立する。カートがその全てを仕切る。グループ名は、響きとイメージから彼によって選ばれた。彼がこのグループのスポークスマンであり、お米ダイエットを定着させ、得られた利益を割当てる。

彼が求めたグループ名は、熟考の上、対になる性質を持つ言葉として生み出された。高貴で特別だというイメージとしてのゴールドを“Golde”として、カートの気質である、中世の詩人が弦を爪弾くイメージを表そうとした。では、ブライアーは？ 彼の思惑どおり、何か世俗的で平凡なイメージとして選ばれた。(彼は決して棘のある発言をしない)

ステージでのそれぞれの役割の重なり合いが、ゴールドブライアーズ・サウンドの要である。4人のメンバーのうち3人、ドーティー、シェリ、カートがボー

カリスト。その中に、カートの少女のように響くジャジー・ベルカント★・テナーにより、“2人の少女と1人の青年”から成る3つの声は、あたかも“少女トリオ”のように溶け合う。伴奏では、ロン・ニールソンがフロントでギターとパンジョーを弾き、カートがリズム・ギターを担当した。

パート2 “ニューヨーク、ニューヨーク!”

60年代初頭、グリニッチ・ヴィレッジのフォーク・シーンの盛り上がりは、最高潮に達していた。コービー・ハウスのガーズ・フォーク・シティは、まだ元の位置に存在しており、ボブ・ディランは、まだマクドゥーガル・ストリートに自身の住居を持っていなかった。通りを進むと、フィル・オクスがバー“ケトル・オブ・フィッシュ”でハッパを吸い、劇作家エドワード・アルビーはサン・レモで陰気な状態、リチャード・ブライアーはデヴィッド・リー・ロスの叔父マニーが経営するカフェ“ワ?”でショー終了後の掃除をしていた。

そしてゴールドブライアーズは、そのアーティスト達の群れに加わる。しかし彼らのフォーク・サウンドは、独特で風変わりなものだ。カートが持つ音楽性の奥行きは、海軍将兵の息子として数年間日本で生活したことによって深みを得、そのオリエンタルな経験がゴールドブライアーズのサウンドに、醤油や生姜風味のマリネのようなテイストを溶け込ませた。

ドーティー・ホルムバーグはゴールドブライアーズについてこう語る。「私達はジブシーみたいな生活にどっぷり浸かっていたの。全員が髪を漆黒に染めていたの。女性メンバーはジブシー・ルックの長いシャツを着て、男性メンバーは黒パンツと黒チューニックと黒ブーツ。全部が黒。彼らはピアスをしていたわ。片耳ピアスを男性メンバーだけでね。それで、ステーション・ワゴン車ウッディ号に乗って街にやって来て、車を止め、外へ出た全員が、まるでカルト教団に属して魂を奪われたみたいな、日本女性のキス・ミー・マグネット人形を崇拜する私達ってわけ。今でこそ全く無害に聞こえる話だけど、当時の私達はその風体を理由に、ナイトクラブ巡業期間の真っ只中に、サウス・キャロライナ州チャールストンの、キング・ストリートにある一番大きなホテルを追い出されたの。他の宿泊客を恐がらせるから、って言われたわ」

その頃ボブ・ゴールドスタイン(ヴィレッジ・ストーンパー“ワシントン広場の夜はふけて”の共作者)は、彼が所有するワゴンをウッディ号として、メンバー達に提供することに同意した。何となく仲間同士のように似た名前、ゴールドスタインとゴールドブライアーズは、ショービズの会社G.A.C.(ジェネラル・アーティスト・コーポレーション)に属するクライアントとして、お互いに出会う。当時GACは、ボブ・ディラン、PPM(ピーター、ポール&マリー)、ホセ・フェリシアノを世界中にブッキングすることで儲けていた。

その後、GACのボス、バート・ブロックは、ゴールドブライアーズもしくはゴールドスタインと何をしていいのかわからぬまま、前者をゴールドスタインのウエスト・ヴィレッジ・スタジオ(後に映画“Andy Warhol's Trash”のオープニン

グ・シーンの室内撮影に使用された)に放り込む。ブロックはPPMのマリー・トラヴァースが所有する部屋を寝床として提供し、両者がうまくやってくれることを祈りつつ、彼はスター達のショーを扱う本来の自分の仕事に戻る。

エピック・レコードで、ゴールドブライアーズは3枚のアルバムをレコーディングする。うち最初の2枚のみがリリースされた。1stアルバムは、シンプルなタイトル“GoldeBriars”、1964年2月にリリースされ、当時の大半のフォーク・アルバムとの比較において、革新的だと見なされる。2ndアルバム“Straight Ahead”は、その6ヶ月後にリリース。ドーティー曰く、「“Straight Ahead”のタイトルについては、何がどこに進もうとしているのか、何も示さなかったけれど、“Straight Ahead”は私達そのものだったの。“真っ直ぐ前に”進んだところで、何も無かったわ」

この時点で、「音楽産業において、ゴールドブライアーズは何にカテゴライズしていいグループなのか分からない存在」だった、とドーティーは洩らす。「フォーク・ポップ・ロック・サウンド、奇妙な外観、ボブの監修によるブロードウェイ・スタイルのステージ・ショーから、新しいオーディエンスの反応はほとんどいつも“どの惑星から来たの?”って感じだったわ」

皮肉にも、ハリウッドでのお祭り騒ぎのゴールドブライアーズ初舞台は、彼ら最後の舞台となってしまう。ロス・アンジェルスの伝説的なクラブ、ココナット・グローヴで、頑固なショービズ関係者達を圧倒したパフォーマンス。

この時、3rdアルバムがリリースされる予定だったが、主要メンバーの和解不可能な不和が、65年6月のグループ解散を導く。

彼らが共に活動した期間は、たった30ヶ月であったが、そのユニークなボーカル・サウンドを確立するには、それは十分な時間だった。他のアーティスト達が、ベッチャー流のサンシャイン・ポップを彼らの作品に採用したのである。初期の支持者は、ママ・キャス・エリオット、ブライアン・ウィルソン(カートを“Good Vibrations”に起用)、フィル・スペクター。

そして再び、ドーティーとシェリはグループから自由の身となるが、その後の彼女達の思案は、それぞれ違う方向を向いていた。

パート3 “ドーティー・ホルムバーグによる 「ドーティーの全て」”

例えるならばその時、カートは架空の映画“カートの全て”の主演に忙し過ぎて、その周りで仲間達が同様に、自身の映画、即ち人生の主役を演じていることに気付かなかったかも知れない。“ポップの全て”、“ロンの全て”、“シェリの全て”、そして結局……しかし、少なくとも“ドーティーの全て”に対してだけは、確実に違っていた。

このCDにある曲の数々は、架空の映画“ドーティーの全て”を現実のものにしたサウンド・トラック。

歴史の火種の中に我々を巻き込む“カルチャー・サイクロン”の傍らで起こった、純真な少女の冒険の記録集である。

ロス・アンジェルスでの“激動の孤児”に始まり、それに続くディランの故郷、そしてゴールドブライアーズとしての活動の中核的な場所ニューヨーク、さらにはカリフォルニア州のチャールズ・マンソン事件現場近辺での一時滞在の年代まで。ドーティー・ホルムバーグは、いつも“まさにその場所”にいた。彼女の歩んだ道筋は、滞在した全ての場所の側に、異端者によって引き起こされた大事件が存在したという、年代順のロード・マップなのである。

悪徳の富が支配し、フリー・ラヴが廃れ、ドラッグ・カルチャーが^{しぼ}萎んでいく。もしくは、これらは逆の順序で起こった。これまでのアメリカの歴史において例の無い、“常識破りの芸術”は、無秩序に陥ってしまった。数百万人は、恍惚状態が過ぎて水ぶくれになり、今日まで続いたかも知れないたくさんの偉大なる経歴は、まるでマジシャンが一瞬にして燃やすティッシュ・ペーパーのように、消え去ってしまった。

そして疫病が起こることが余儀なくされ、死がもたらされた。

差し当たり、ドーティーはそこにいた。クッキーを焼き、タオルを洗濯し、キズに包帯を巻いていた。失われた土地の無料給食施設であるかのように。ドーティーは歌っていた。その時、彼女に救いを求める魂も存在した。そして彼女はそれらを救った。

ドーティーの功績はいつでも長所のライトに照らされている。多分それは、ただ単に彼女が生き延びているからではなく、勝ち進んでいるからであろう。

本アルバムには、彼女自身の言葉による思想、希望、そしてこれまでの人生における重要な瞬間を記録するという、情熱がある。

「今のところ、シェリと私は秘書の仕事に就いてるの。自分で使えるお金を持つためとは言え、何て不思議な感覚なんでしょう!」

「多かれ少なかれ、一度ショービズの血が体に流れると、その血はずっとそこに存在してしまうの。シェリと私は一緒に仕事をするのを止めるつもりはないわ。私達は副業にコマーシャルでデュエットしたいし、多分、ダンスの仕事も得るつもり。私には、心の中にショービズが残した部分が大きく残ってるの。よく分からないけれど、時々自分が檻の中にいるようで、そこから抜け出して世の中に何か音楽的なものを与えたいって感じるわ」

「恐らく、私をどこかへ連れて行く、まるで軍隊が押し迫るようなこの感覚は、いつも私の中にあるのでしょう。音楽への情熱によって溢れ出るメロディだけでなく、歌詞もね」

「その感覚をどうやって自由に紙の上に表現したらいいのか、最近ちょうどそれに気がついたところなの。過去には詞をいくつか書いたことはあるけれど、この数ヶ月間で2、30曲作ってみたの」

音楽的にどんな性格を持つものなのか私には分からないけれど、ただ歌詞とメロディで自分の感覚を反映させているの。もし私がラッキーで、“ビジネスのひとしきり”をもっと学んだならば、きっと、いつか自分の曲を公に分かち合えるようになることでしょう」

(ゴールドブライアーズ解散1年後のドーティーの日記より)

GYPSY GIRL

Gypsy Girl
A daydreaming mind
Wandering off to other lands

A new friend
Somewhere to find
Hidden in the grains of sand

Dancing mind
Directing the feet
Showing an emotion of hand

Moving away
To find your own
To find you if you can

Gypsy Girl
A song of heart
A song of who I am

GYPSY GIRL

ジプシー・ガール
白昼夢の中
彷徨うよその国

新しい友
何処かに見つける
砂粒に隠れてる

踊る心よ
足に道を教え
手の感情を見せて

流浪しなさい
君を見つけるため
君に出来るならば

ジプシー・ガール
心の歌
私の歌

(1966年頃のドーティー作)

同時に、カートは、アワー・プロダクションズ・レーベル設立を立案した利口そうな名前のスティーヴ・クラークと手を組む。

取り引きはこうだった。プロデューサー報酬のほとんどを受け取ることを条件に、カートはアワー・プロダクションズ・レーベルの共同経営をスティーヴと約束する。当時のカートとその会社は、彼のプロデュース作品であるアソシエーションの1stアルバム及び2枚のシングル“Along Comes Mary”と“Cherish”が、大ヒットしたところだった。憶測では、カートは金持ちになったと思われたが、実際は、それとは全く違う結果であった。カートの評判はアソシエーションの成功によって瞬く間に拡がり、彼は実際に、昼夜無くあちこちのスタジオに出入りする、ロス・アンジェルズで最も売れっ子の独立プロデューサーとして、馬車馬のように働く。では彼の膨大な報酬はどこへ？ それはスティーヴにより、無断でアワー・プロダクションズ・レーベルの運営資金へと注ぎ込まれていた。

ドーティーとカートは再び一緒に働き始め、今回はバックアップ・シンガーとプロデューサーという関係になる。ドーティーの声は、トミー・ロー Tommy Roe、ボビー・ジェイムソン Bobby Jameson、フライアー・タック Friar Tuck、リー・マロリー(後にミレニアムのメンバーと成る)らの作品で聴ける。

バックアップ・シンガーがリードシンガーになるという当時の典型的なケース通り、カートはドーティーのシングル曲のプロデュースに着手する。レコーディング・スタジオには全てこの場所が選ばれた——驚きの最新テクノロジーを誇る、ハリウッドのコロムビア・スタジオである。2台の12トラック・テープ・レコーダーを同期使用した、計24マルチ・トラック・レコーダーがあり、これがカートの新しいおもちゃとなる。

ドーティーのバック・ミュージシャンを努めるのは、完全無欠のミュージシャン達——ベン・ベニー、ジェリー・シェフ、トキシ・フレンチ。しかしシングル盤のプレス、プロモーション、リリースの前に、アワー・プロダクションズ・レーベルは破産する。

1968年、ドーティーはさらに、歌手ボビー・ジェントリーの会社ジェントリー・リミテッドのために、“The Bird (Didn't Die)”と“The Essence”の2曲をハリウッド・サウンド・スタジオでレコーディングする。新しいドーティーの伴奏者には、若手ラテン・アメリカ人ギタリストのランディ・ガルシア。ドーティーの姉シェリとアリソン・バフもバック・グラウンド・ボーカリストとして貢献する。しかし、この会社の税金未払いが暴かれたため、レコーディングしたそれらの曲は、テープ保管室の中にお蔵入りとなった。

そしてまた、2曲のドーティーのオリジナル曲、“To Touch Upon the Light”と“Let You Know”が、アリソンの夫ポールがエンジニアを、義理の兄キース・オルセンがプロデュースを担当し、オリジナル・サウンド・スタジオでレコーディングされた。ランデュ・ガルシアがドラムス、ギター、キーボード及び、うち1曲にボーカルをオーバー・ダビング。キースはベースを弾き、さらにシェリとアリソン・バフがバック・グラウンド・ボーカルを歌った。だが、

このレコーディング曲には、適当なレーベルが見つからなかった。

この時点でドーティーは、絞り染め、ドラッギーな装飾、サイケデリックな滑稽さ、平凡、稚拙は、自分のキャリアには似合わないと感じ始めていた。

「世界は、以前よりも狭い袋の中にあるようで……言ってみれば、たぶん当時はもっと自由な気風があって、爆発性の感情みたいなものを感じることが出来た。じゃ私達は今日、どこに心を開放すればいいの？ ……「何しよう?」ってことが、こんなにたくさんあるのよ」

(ドーティーの日記、1968年)

ドラッグ革命、セックス革命、黒人解放運動、女性解放運動、ゲイ解放運動、ケネディ大統領やキング牧師の暗殺。遠くの屋上から見たゲットー地区の炎上。暴動、ベトナム戦争、徴兵……どんな事件も彼女を変えられなかった。

一般には、この世で最も強いのは悪魔の力だと思われている。だが、それは違う。愛こそが強いのだ。

そしてそれは明らかにドーティー。物腰柔らかく、優しく、それでいてしっかり者。その航跡に星屑を残しながら世界を旅する女性。

ここについに、17曲のドーティーの未発表レコーディング集が完成された。神は天に、そしてドーティーの天使の歌声は未だ地球上に。スマイル。

Copyright 2002 by Dotti Holmberg & Bobb Goldsteinn



著者

ドーティー J. ホルムバーグ-ワデル

Dotti J. Holmberg-Waddell

このゴールドブライアーズ・ストーリー
CDロム本は、音楽ファン達が埋める
サンシャイン・ポップ・ルーツのバズルの
1ピースとして、きっと役立つことでしょう。

この本を手にとっていただいた事を
皆様に感謝申し上げます。